
ルナ ~ 銀の孤狼と月の娘 ~

翔

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ルナ ～銀の孤狼と月の娘～

【Nコード】

N2875U

【作者名】

翔

【あらすじ】

人間と獣人が共存する世界。エルリアと呼ばれる国に暮らす少女、綾瀬 瑠奈は、友人達や兄と共に、ありふれた高校生活を送っていた。

そんなある日、彼女はふとした事から、一人の狼人の青年と出逢う。それは青年と少女、そして彼らを取り巻く者達の運命が、大きく動き始めた瞬間であった……

別サイトで掲載している作品を、加筆修正して投稿しています。

序章 決意

俺の手は、紅く染まっていた。

辺りに転がるのは、大量の骸。それらは数分前まで確かに生きていた、そして、俺がこの手で葬った者達。

真紅の血が、大地に汚れた模様を描く。命の源であった滴は、もはや単なる赤黒い液体でしかない。

「これで、この地区は制圧完了だな」

「馬鹿な奴らだよ。銀月様を前にして、まだ立ち向かってくるなごとう」

「……………」

俺の部下は、侮蔑と哀れみの視線で死体の山を見据える。こちらには死者はいないようだ。

「銀月様。各部隊から連絡が入りました。全ての地区で、全滅を確認したとのことですよ」

「……………そうか」

部下からの報告を受けながら、俺は自らが作り出した光景を見て

いた。

そこは、まさしく地獄絵図という言葉がふさわしいだろう。全員出来る限り即死させ、苦しませないようにした。だが、彼らの亡骸には、最期の瞬間の……死への恐怖が張り付いていた。

「やはり……気分の良いものではありませんね。このような任務は……」

「……ラドル」

俺の様子を見てか、一人の部下が俺に言う。彼は、俺の腹心だ。

「……気は進まなかった。だが、仕方ない事だったんだ。降伏を勧めても、彼らは聞く耳を持たなかったのだから……」

……『仕方ない』か。俺は今まで、どれだけその言葉で自分をこまかしてきたのだろう。

彼らを殺した事は、本当に仕方なかったのか？ 違う……命を奪う事が、仕方ないで済まされていい訳がない。

俺は、逃げているだけだ。真正面から責任を受け止める事から。

「銀月様……そんな顔をしないでください。彼らは、こうなるだけの罪を犯した。その報いを受けたんです」

そう……こうしなければ、彼らを止める事は出来なかった。今回の任務は、彼らへの罰だったんだ。だが……

「罪……か。ならば、この虐殺は罪ではないと言うのか？ 本当に、

彼らを殺すのは必要な事だったのか……？」

「……………」

俺の問いかけに、ラドルは辛そうに目を伏せる。

「……………指揮官たる存在が言う事ではなかったな。許してくれ」

「いえ。あなたがそういう人だからこそ、俺達はあなたを尊敬しているんです」

「……………すまない」

ラドルの慰めは、少しだけ気を楽しみにしてくれた。

俺とラドルは、再び目の前の現実を見る。俺達の任務がもたらした結果を。

殺した者達の最期の瞬間の表情と叫びが、俺の瞳と耳に、呪いのように焼き付いていた。

……………何を今さら。俺はこれまでだって多くの命を奪ってきた。今回が初めてという訳じゃない。

俺には……………彼らの死に対して感傷を抱く資格すら無い。

「銀月」

「！」

背後から聞こえてきた声に、俺とラドルは振り返った。

そこにいたのは、一人の青年。男の種族は獣人の一種である虎人で、蒼く美しい毛並みを持ち、髪にあたる部分は他より少し色が濃い。

今は任務中のためか無表情だが、顔立ちは整っており、背にはその体躯に見合ったハルバードを携えている。

青年は、俺達のそばまでやって来ると、足を止めた。

「……蒼天」

「こちらも任務は完了したようだな」

この男は 蒼天。

無論、本名では無い。俺の 銀月 と同じ、コードネームのようなものだ。

彼は俺の同志であり、親友でもあった。

「どうしてここに？ お前の部隊はどうした」

「黒影がうちの指揮も引き受けてくれた。大方、お前がこうなっているだろうから、行ってやれとな」

「……そうか」

連中との付き合いは長い。俺が今回の任務にどんな感情を持つのか、見透かされていたか。

「……では」

ラドルは気を利かせたのか、軽く頭を下げてから、この場を離れた。

俺は部下の気配りに感謝しながら、親友に尋ねる。

「蒼天……お前はと思う」

「何がだ」

「俺達の『理想』は……本当に、こんな方法で叶うものなのか？」

俺の質問に、蒼天は目を閉じる。

「さて、な。ひとつだけ言える事があるとすれば、俺達の理想を實現させるには、お前は優しすぎる」

……違う。俺は優しくなんか無い。俺は……

「……優しくければ、このような虐殺など出来はしない。俺はただ、臆病なだけだよ」

「どちらでも構わない。ただ、このまま迷いを持ち続ければ、いずれはお前が死ぬ事になる」

「……納得しろと言うのか、このやり方に？」

「理想の為には、非情になる事も必要だ。それが無理なら、せめて割り切れ。そうしなければお前が保たないだろう……俺は、お前に死んでほしくはない」

蒼天の口調はぶっきらぼうだったが、俺を心配してくれている事

は、確かに伝わってきた。

「そんな顔をするな。俺達は指揮官だ。俺達の迷いは、全体の士気に関わる事を忘れるな」

「……すまない」

「謝る必要は無い。お前は先に戻って休んでいる。今日は俺がここの指揮を受け持つ」

「だが……」

「今の心境ではまともな指揮は出来ないだろう？ ……辛い時ぐらい、抱え込まずに甘えろ」

青虎はうつすらと微笑むと、少しだけ優しい口調になる。

「……分かった。今回は甘えさせてもらおう。ありがとう……シゲル」
「ド」

蒼天では無く名前で呼んだ事に、彼は少し眉をひそめる。

「任務中は出来るだけ名前を呼ばないでくれ。それと、礼もいらない。俺とお前の仲だろう？」

怒っている訳では無いようだ。彼の心遣いは本当に有り難かった。

「後で黒影と一緒にお前の部屋に行くよ。たまには三人で酒でも飲もう」

「ああ、そつだな……楽しみしておくよ」

俺は数名の部下にだけ指示を残し、素直にその場を後にした。

「理想のためには……非情になれ、か」

自室に戻った後、俺は心の中に込み上げたものを吐露する。内に抱えるには、感情は肥大しすぎていた。

今の方法で理想を達成するには、俺はあと何人殺せばいい？

あとどれだけの血を、この手に浴びればいい？

あと何人を不幸にすれば……あと何人、俺達のような存在を作ればいい？

そうして達成したものは、本当に俺の望む世界なのか？

……違う。

俺の望みは、俺のような存在が生まれない世界だ。それなのに、俺が戦えばまた不幸な存在が生まれていく。

だが、ならば他にどんな方法がある？ 何もしなければ、世界は

変わりはない。ただ傍観していても、好転などしないんだ。

俺はどうしたらいい？ 俺は、どうしたいんだ……？

「俺は……」

俺はしばらく問答を繰り返した。俺達の望む世界。それを現実のものとする為には。

「俺の望みは……」

俺達が……俺が望む世界は……

「そう……俺の望みは、ただ一つだ」

俺は独り……静かに決意を浮かべた。

その決断がもたらすもの……その重さを知りながら

1話 平凡な日々

早朝、目覚ましの音が私を起こした。

天歴1807年、9月27日。暑さはとうの昔に和らぎ、気候はすっかり秋模様。

時刻は7時。昨日は夜更かしもしてないし、特に眠気は感じない。カーテンの隙間から差し込んで来る朝日が、私に今日が晴れだと教えてくれる。こういつい天気の日、1日頑張ろうって気になれるよね。

「うーん……」

ベッドから体を起こし、大きく伸びをする。

体が目覚めるこの瞬間が気持ち良いと感じるのは、私だけじゃないはずだ。

ベッドの横に畳んであった制服に着替え、身支度を始める。これでも女だから、外見には気を遣っているほづだと思つ。

生まれつきである栗色の髪を、櫛で念入りに整えていく。中学時代、友達に伸ばしたほうが似合うと言われてからずっと長くしているけど、おかげで手入れはちょっと大変だ。

ちなみにうちの学校は、幸いにも髪の長さに制限が無かったりする。

……よし、準備はOK。

「さて……今日も頑張りますか！」

こうして今日も、私……綾瀬 あやせ・るな 瑠奈の日常がスタートした。

「おはよう、瑠奈」

部屋を出て、洗面所で顔を洗っていると、後ろから声をかけられる。

「うん、おはよう」

振り返って、私と同じく栗色の髪を持つ女性、綾瀬 あやせ・かえで 楓お母さんに挨拶を返す。

お母さんは、子供から見た鼻屑を除いても美人で若々しい。ひっそり私の憧れだ。

「お父さんとお兄ちゃんはもう出ちゃった？」

「ええ。慎吾はやらなきゃいけない仕事があるって言ってたし、暁斗も部活の朝練があるんだって」

「ふうん……」

顔をタオルで拭きながら、父と兄の不在を知る。まあ、いつもの事と言えばいつもの事なただけだ。

お母さんと一緒に居間まで歩いていくと、既に朝食がスタンバイしてあった。焼き魚に味噌汁。ごく一般的な朝食だ。

私はいつもの自分の定位置、全員揃ってる時には兄の隣である椅子に座る。

「でも、暁斗ったら、時間ギリギリに起きちゃってね。よほど慌ててたみたいで、弁当忘れて行っちゃったのよ」

「あー……ま、お兄ちゃんらしいけどね」

確か昨晚も部活でヘトヘトになってたから、寝坊も仕方ないだろう。本人は楽しんでやってるみたいだけど、私から見たらすごく大変そうだな。

「それなら、私が届けとくよ。どうせ同じ学校なんだし」

「本当？ そうしてくれると助かるわ」

「まあ、面白いから連絡は入れないけど」

「……それは……一応、そのほうが暁斗も反省するかもしれないけ

ど」

お母さんは味噌汁とご飯をよそいながら、微妙に困惑気味な笑いを返した。ちなみにうちの学校は携帯OKなので、連絡は取ろうと思えばすぐ取れる。

私はお母さんから味噌汁とご飯を受け取ると、両手を合わせる。

「あ、そうだお母さん。闘技用の服、まだ乾いてないかな？」

「ええ。でも、もう今週には授業は無いでしょっ？」

「うん、まあそうなんだけど、大会も近いから練習したいんだよね。制服でやるわけにもいかないし」

「ああ、成程ね。じゃあ、代わりの動きやすい服でも持っていく？」

「んー……そうだね」

そんな何気ない会話をしながら、箸を進める。自慢の一つとして、お母さんは料理が上手い。この味噌汁の味は、誰にも真似出来ないと思う。

思い出したようにリモコンを手にとって、テレビをつける。ちょうどニュースが流れる時間だ。

「……バスツールでUDBに男性が襲われ重傷……か」

「最近が多いわね、UDB関係の事件。この国ではまだ何もなければ……」

UDBとは、『規格外災害獣』の略称。普通の動物と比べて、正

しい生態系からズレた、人の生活を脅かす生き物の事。

最近はどうも、その活動が世界的に活発になってきているらしい。

「エルリアもいつまで平和か分からないよね。闘技の授業はしっかり受けておかないと」

「そうね……」

私達の国エルリアは、先進国にあたる。開発も進み、今ではUD Bの事件など全く聞かない。とは言え、油断は禁物だろう。いつ、何が起きるか分からないからね。

「とりあえず、今は冷める前に食べなさい。あまり話し込んでると遅くなっちゃうわよ」

「あ、そうだね。ごめん」

話題がちよっと暗くなっちゃったからか、お母さんが朝食を食べるのを促す。私も、食べ終わるまで箸を進めるのを優先する事にした。

「……にしても、この味はどうやったら出せるのかな……」

味噌汁を口に運びながら、私はほそつと呟く。よく家庭で味が受け継がれるとか言うけど、私は今のところこの味を出せる自信が無い。……って、いけないいけない。早く食べないとね。そろそろ来る時間だし……

私は間に合わせる為に、少し急いでご飯を詰め込む。そして、食べ終わるとほぼ同時に、家のインターフォンが鳴った。

「橘くんかしら？」

「多分ね。私が行くよ。……っと、ごちそうさま！」

「はい、お粗末様でした」

私は箸を置くと、少し駆け足で玄関に向かった。待たせても悪いしね。

玄関のドアを開くと、そこには予想通りの人物が立っていた。

同年代の子の中では割と良い体格のその少年は、白い毛並みの虎獣人。

頭頂部、髪にあたる部分の毛は茶色。鋭い猫科の瞳には、どこか悪ガキっぽい雰囲気がある。

うちの学校の男子制服を着たその少年は、私の姿を認めると、子供の時から見慣れた笑顔を見せた。

「よっ、ルナ！」

「うん。おはよう、「ウ！」

彼の名は橘 浩輝^{たははほ}。私の幼なじみ兼親友だ。

「今日はいつもより早かったね」

「まーな。兄貴も母さんもいつもより早く出なくちゃいけないらしくて、ちょっと早めに起こされたんだよ。で、一人でいてもヒマだから、早めに来ちまったんだ」

私の家はコウの通学路の途中にあるため、彼はいつも私をこつして迎えに来るのだ。

「とりあえず上がって待つてなよ。私、もう少し準備があるから」

「おう。じゃ、お邪魔します！」

ちなみに、コウの家とは昔から家族ぐるみの付き合いをしている。彼の顔は、我が家ではすっかりお馴染みだ。

「おはよう、橘くん」

簡単な挨拶を済ませた後、母さんに促され、コウも椅子に座る。今の短時間のうちに、テーブルの上はすっかり片付いていたし、さっき話した動きやすい服も置いてある。流石と言うか何というか。

「そう言えば、橘くんも大会に出るのよね？」

「あ、はい。ま、腕試しみたいなもんっすけどね」

「腕試し、ね。その割にかなり訓練してるじゃん」

「ま、やる以上は負けたくねえしよ。……あいつより上にはなりてえしな」

あいつ、ね……誰の事かは予想つくけど。昔っから負けず嫌いだからね、彼は。

「そう言えば、暁兄は今年も出るんだったっけ？」

「ええ。今年は凄く気合い入れてるみたいだね……陸上部の大会も終わったから、来月から週に何日かは部活も休みもらうんですって」

「ひゅう……あの暁兄が部活まで休むなんて、よっぽどマジなんっすね」

「去年の結果が悔しかったんだと思うよ。お兄ちゃんも負けず嫌いだし。そんだけ大きなイベントだからね……闘技大会は」

先ほどから私達が話している 大会。それは通称 闘技大会と呼ばれるものだ。

闘技つてのは、学校の授業の一つで、文字通りに戦闘訓練を行うもの。

ニュースで言ってたように、UDB関係の事件は世界中で起こっている。そして、誰がいつその被害者になるかなんて分からない。

そのため、この国ではそういった事態に各々が対処出来るように、教育の中で最低限の戦闘技術を学ぶシステムが生まれた。それが闘技という授業だ。

ただ、エルリアの治安の良さもあり、戦闘訓練と言ってもスポーツ的な意味合いが強かったりするんだけど。

「瑠奈も出るって言った時には、さすがに驚いたけどね……」

「ま、コウもカイもレンも出るんだし、私だけ出ないってのもね。

それに、男ばっかの大会で、女が優勝でもしたら面白いじゃない？」

そして、闘技大会は、全国から集まった学生が、その技術を競う大規模な武術大会。

年に一度開かれる、闘技選択者にとっては、自分の実力を示す絶好の機会だ。

その大会が開かれるのが、11月12日……今から約ひと月半後。そのため、私達は今、それに向けての練習に励んでいるのだ。

「ふふ。今年は誰を応援したら良いか分からなくなりそうね」

「直接当たったりしちゃう可能性もあるしね……お待たせ、用意出来たよ、コウ」

「うし。じゃ、行くか。それじゃ、お邪魔しました、おばさん」

「ええ、また明日。瑠奈、これがあなたの弁当で、こっちが暁斗のね」

「うん、任せといて。じゃ、行ってきますー！」

最後に二つの弁当を鞆に詰め込んでから、私とコウは我が家を出発した。

「……でき、私が大会出るって言ったら、暁斗が飛び上がったちゃって。1時間くらい延々と『考え直せ』って言ってたんだよ」

「ははっ、暁兄らしいな。そんだけお前が可愛いんだよ、あの人は」
「それは有り難いんだけど。私の事より、彼女の一人ぐらい作って欲しいんだよね、こっちは」

コウと他愛ない雑談をしていると、学校にはすぐに到着した。クラスには、もう半分くらいの生徒が集まっている。

私達は自分の机に荷物を置くと、クラスメイトの中から一人の少年を見付け、そちらの方へと歩いていった。

自分の机に座って、のんびりと読書をしていた、落ち着いた雰囲気を持つ獅子人の少年。

毛並みは普通のライオンに近い色で、鬣だけは鮮やかな朱色。少年は私達に気付くと、パタンと本を閉じて、その利発そうな瞳をこっちに向けた。

「おはよう、二人とも」

「うん。おはよう、レン」

彼は時村 蓮^{ときむらい・れん}。私と仲の良いグループの一人。

「何読んでたんだ？」

「ああ……参考書だよ。昨日、宿題が出ただろ？ ちょっと興味持ってた」

私とコウは本のタイトルを見る。そこには、
精神の発達とP S
と書かれている。

「真面目だよなあ、お前も。俺なんか適当に書いて終わらせたぜ？」

「終わらせた……？ あ、どうしようかな。今日、傘忘れちゃった」

「……どういう意味だっつーの！」

「はは。まあ、これ自体はカイに借りたんだけどな」

唸るコウを適当に宥めつつ、私はその本を手にとって、パラパラとめくってみる。

「二人のやつも見せてくれないか？ ちょっと煮詰めたいんでな」

「うん、良いよ。出来れば、カイも見たいところだけだね」

「……で、そう言えばカイは？」

思い出したようなコウの言葉に合わせて、私達は一斉に、ある一点を見やる。そこには、まだ荷物の置かれていない、一つの机があった。

「今は8時12分。時間はまだ十分にあるけど、どう思う？」

「……俺は寝てるに賭ける」

「俺は意識が無いに賭ける」

「じゃあ、私は意識が夢の世界を旅してるに賭ける」

「つまり、全員が寝てる方である。」

「……賭けにならないな」

「ま、前例が前例だし……」

「病気だしな、アレは」

私達は、顔を見合わせると、深々と溜め息をついた。

その後は、他のクラスメイトも混じりつつ、適当にダベりながら時間を潰す。

みんなの席は少しずつ埋まっていくが、私達が気にしている机の主は、一向に姿を見せる気配が無い。

「もう28分だね……」

「前は正座で説教だったから……今回はどこまで行くだろうな」

「とりあえず、そろそろ殺されるのは間違いねえと思っぜ」

私達は既に、担任の先生が如何にして彼を処刑するかの想像に入っていた。

そんな中、私は何気なく窓の外を見る。と。

「……あれ？」

「ん、どーしたルナ……あ」

ふと気が付くと、青空の中に、不自然な影が混じっていた。最初は鳥か何かと思ったが、そのシルエットは次第にこちらに迫り、そ

の形を明らかにしていく。

それが何かに気付くと、私達はさっと立ち上がる。

「さ、窓開けようか」

「そうだな」

他のクラスメイトも状況を察したようで、窓の近くにいた生徒の手で、全ての窓が開放される。そして、事故が起こらないように、一同、速やかに距離をとる。

そして、その十数秒後

「どおおりゃあああっ!!」

そんな掛け声と共に、一人の男が窓から教室に突撃してきた。…念の為に言っておくけど、この教室は二階にある。

当然の事ながら、勢いよく飛び込んできたその人物は簡単には止まれず、机をいくつかなぎ倒していくが、みんなは避難済みなので人的被害は無い。

その男は、教室の中ほどをさらに過ぎた辺りでようやく静止した。勢い余って派手に転倒し、尚且つ頭を打ったようで痛みに悶えているが、みんなは心配するよりも先に、倒れた机や散らばった荷物を片付ける作業に入っている。

むしろ、何人かは倒れた男に蹴りを入れている。恐らく机を倒さ

れたメンバーだろう。

「い、痛ってええ……てか、蹴るんじゃねえよ teme 工ら！」

側頭部をさすりながら、その人物は起き上がった。

全身を覆う青い鱗に、無造作な茶髪。鋭い角に、体格に見合った大きな翼。身体は同年代の中でも特に逞しく、筋骨隆々としている。竜人と呼ばれる種族のその少年は、衝撃でズレた眼鏡をかけ直しながら、少し不安げな表情で時計を伺った。

「……よし、ギリセーフだな！」

「常識的にはアウトにも程があるけどね……カイ」

一同の呆れた視線も意に介さずガッツポーズをする少年、如月海翔（かいと）に、私はもうどこから突っ込むべきなのか分からなかった。

「まあ、とりあえずいろんなもんひっくるめて聞くけど……何やってんだお前？」

「いやあ……昨日、夜中まで調べものしてたんだけどよ、気付いたら朝で……」

つまり寝落ちして、そのまま夜を越したらしい。で、目が覚めれば既に遅刻寸前だった、と。

「それはいつもの事だからだいたい予想通りだけど、どうしてこんな無茶したんだ？」

「それがな、聞いてくれよ！ あのアホ親父、起こしもせずに俺の

横に立ってやがったんだ。で、ニヤニヤしながら『今日も遅刻だったら、お前のパソコン処分な』とか言いやがるんだぜ!？」

レンの質問に、鬱憤を発散するような口調で答えるカイ。その内容は、まあ、何と言うか。何をやっているんだろっこの親子は、と言つのが正直なところである。

「で、走っても間に合わないから、死に物狂いで飛んできたと」

「そっいつこつたな。つたく、苦労すんぜ」

「……自業自得な上に、こっちも大迷惑だっつーの」

コウの言葉にクラス一同が頷くが、カイにはまったくこたえた様子はない。その凶太さは、ある意味羨ましいと言つべきか。

「第一、先生にバレたらパソコンの前にお前がスクラップにされんぞ」

「別に校則にはねえぜ? 『窓から教室に入っではいけない』とかな」

「……うん。校則以前の問題だからね……あ」

その時、私はあるものに気付いてしまった。私に続いてコウ達も声を上げるが、カイだけはまだ気付かない。

「ん、どうしたお前ら?」

「……いや、別に。ただ、ご愁傷様とだけ言っておく」

「来世は真面目になれよ」

「……何言ってるんだ？ 大丈夫だって、バレなきゃ何も起こらねえよ」

「そうだな。では、既にバレていたらどうするつもりだ？」

「そりゃまあ………え？」

私達の会話に対して、カイの真後ろから割り込んできた声。

カイはその声は何なのかに気付いた瞬間、動きを停止させた。ギチギチと、ロボットのよう不自然な動きで、少年はゆっくりと振り返っていく。

そこでは、私達のクラスの担任である獅子人、上村 かみむら・せいじ 誠司先生が、カイを見下ろしながら仁王立ちしていました。

「………お、おはようございます、センセイ………」

「ああ、おはよう。爽やかな朝だな」

そう言いつつ、先生の顔はちつとも爽やかではない。無表情ではあるが、その中には獅子の威厳がタップリである。

「ところで如月、俺は今日、連絡事項が多いので早めにこちらに上がってきたんだ。そうしたら、何かおかしなものが目に入ってな」

「え、えっと………」

「俺も年なのかな。何と、教室の窓から飛び込んでくると言う、信じられないほどアホな生徒が見えたんだ」

先生の声には抑揚が無い。私達にはそれが、死刑宣告をする裁判長の言葉のように聞こえた。

「そこで、お前の意見を聞きたいんだが、どう思う?」

「……その、何て言うか……大変、でしたね?」

「ああ、そうだな。いろいろと大変だよ、アホな生徒を受け持つと」

「……ま、全くですねえ……」

「……………」

先生は、大きな溜め息をつく……カイの肩を、がっしりと掴んだ。

「毎回毎回、時間をかけて注意していると言うのに……お前と言う奴は……」

「せ、先生! 痛っ、ち、力入りすぎ……お、落ち着いて下さい! ほら、結果的には遅刻してませんよ!？」

「ああ、そうだな。心配するな、当麻には遅刻はしていないと言ってやるよ。良かったな、これでお前のパソコンは無事だ」

「いや、今はパソコンよりも我が身の無事が……」

「まあとりあえず、その辺については二人で話し合おうか。じつくり、丁寧にな」

先生はそのままカイの身体を持ち上げると、教室の外に向かって歩き出した。

「ち、ちょっと待つ……い、嫌だ！ み、みんな、先生を止め……おい！ 一斉に目をそらすんじゃないわねえ！！ こ、この薄情者共……い、いや、嘘だ！ すまねえ、さっきの事含めて謝るから、助けてくれえええ……」

尾を引く叫びを残して、連れ去られるカイ。私達は無言のまま、それぞれの席に戻っていく。

数十秒後に聞こえてきた、一人の少年の断末魔に、一同は冥福を祈って、静かに合掌を送った。

その後、一人で戻ってきた先生により、いつも通りに今日の予定とかの伝達がされていった。

……うん。我らが天海高校は、今日も平和です。

2話 昼休み

その日の昼休み。私は包みを二つ持って、学校の3階……二年生のフロアを訪れていた。

「おっ、瑠奈ちゃんじゃねえか！」

「あ、ホントだ。久しぶりだねー」

目的のクラスの前には、ちょうど私の知り合いがいた。大柄なドーベルマンの犬獣人に、私と大して変わらないサイズの間。この二人は、暁斗の友人だ。

「久しぶりです、寺島先輩に北村先輩。お兄ちゃんはいますか？」

「アッキーなら、教室の中でふてくされてるよ。弁当も財布も忘れたー、とか言ってる」

……財布もなんだ。我が兄ながら、ウツカリしすぎである。

「お、ひょっとしてその包み、あいつの？」

「はい。良ければ呼んでもらえます？」

「うん。じゃ、ちょっと待っててね！」

そう言っ、北村先輩が教室の中に入って行く。

「しっかし、出来た妹だよな瑠奈ちゃん」

「いえ、そんな事ないですよ。でも、ありがとうございます」

お世辞だろうけど、お礼を返す。実際のところ、面白がって連絡入れなかったりとか、私はけっこうお兄ちゃんて遊んでたりするんだけどな。

「いや、本当にあいつには勿体ねえって！ 可愛いし、優しいしよー！」

「あはは……誉めて貰えて嬉しいですけど、私なんか全然ですよ」

「謙虚なところもまた良いぜ。どうだ？ あいつの妹辞めて、俺んちの子になるってのぐっ!？」

一応言っておくが、変な語尾は彼の望むところではない。言葉の最中、先輩の背後に現れた人影が、頭頂部に拳を喰らわせたせいで、勢い余って舌を嚙んだらしく、ドーベルマンは口を押さえて悶えている。

現れた男は、すらりとした体躯の狼人。毛色は全体的には黒で、前面は白い。髪は綺麗な金髪だ。

特徴と言えば、その額に付けてあるゴーグルだろう。本人曰わく、付けていないと落ち着かないらしく、今では彼のトレードマークとして認知されている。

狼人は、ちよつと不機嫌な視線を寺島先輩に向けている。

「俺のいないうちに、なんつー勧誘してんだ、てめえは……」

「あ、あやふえ……ふえめえ……」

「うるせえ。てめえが俺の妹に手を出すなんて、10年早いんだよ
バカ」

俺の妹。その言葉通り、この狼人こそが、綾瀬 あやせ・あきと 暁斗……私の、
まごうことなき実兄だ。

「ふえ……別に殴る事ねえだろ!？」

「いや、ムカついたから、思わず」

涙目の寺島先輩は、まだ上手く回らない呂律で暁斗に噛み付く。
ちなみに北村先輩は、そんなやり取りを楽しそうに眺めている。

「良いじゃねえか、お前と瑠奈ちゃん似てねえし!」

「異種族だから似てねえのは当たり前だ。お前の妹ってほうが無理
があるっての……悪いな瑠奈、待たせたせいで変な奴に絡ませちま
って」

「変な奴とは何だ、この超絶シスコン狼……」

シスコン、と言った辺りで暁斗の肘がキレイな形で鳩尾に入り、
寺島先輩はあえなく撃沈した。

「暁斗、友達は大事にしなよ……」

「気にすんな、いつもの事だ。えっと、弁当持ってきてくれたって
?」

「うん。はい、コレが暁斗のね」

「へへ、サンキュー！」

弁当を受け取ると、若干悪かった機嫌がもう回復したらしく、尻尾が犬のように左右に揺れている。もう、単純なんだから。

「で、お前は自分の弁当持って、どこに行くんだ？」

「ああ、私は最近、みんなと一緒に屋上で食べてるんだ」

みんなは既に屋上で待っている筈だ。私も急がないとね。

「ふうん……みんなって、カイ達だろ？」

「うん。ついでだし、暁斗も来る？」

「そうだな……」

暁斗はまだ悶絶している寺島先輩と、それをポンポンと叩いている北村先輩を見る。

「たまには良いんじゃない？ 竜ちゃんが回復したらつるさいし、多分。お昼の間に僕が宥めておくからさ」

「……わりいな、亮。じゃ、ちよっくら行ってくるぜ。それと竜、とつとと起きろよ。転がってたら通行の邪魔だぜ？」

「……あ、や、せえ……」

「……あはは。ごめんなさい、寺島先輩」

恨みがましい声を絞り出す寺島先輩を、完全にスルーして歩いていく暁斗。私は先輩達に頭を下げ、彼と一緒に屋上に向かった。

そして、屋上。予想通り、みんなは既に到着して私を待っていた。9月にもなると、人間にとって屋上の風は少し肌寒く感じたりする。みんなの体毛が羨ましい限りだ。

「あれ、暁兄？」

「久しぶりです、暁斗さん」

「おっ」

私の隣にいる暁斗に気付いたみんなは、彼と挨拶を交わしていく。カイだけが、少し機嫌悪そうにしている。

「カイ、どうしたんだ？」

「何でもねえよ。ちっ、いつてえ……あの体罰教師め……」

ちなみにカイは、あの後すぐに隣りの自習教室にて発見された。具体的に何をされたのかは不明だが、頑丈な彼が午前中ずっと屍と化していた事から、かなりキツイお仕置きをされたらしいのは想像に難くない。

さすがに今は復活しているが、まだ痛みが残っているらしい。

「お前が馬鹿な真似したからだろう」

「何だよ、また上村先生にしばかれたのか？ 何やったんだ」

「病気だよ、いつもの」

「病気って言うんじゃない！ 俺はただ研究熱心なだけだよ！」

「……それで遅刻の常習犯になってりゃ世話ねえぜ」

病気、と言われ、暁斗も事情を把握したらしい。本人の意志はともかく、私達の中ではその単語で認識されている。

カイはネットサーフィンが趣味のだが、この男、何か興味があるテーマを見つけると、すぐに時間を忘れてしまう悪癖を持っていた。

で、元々本人の寝起きが悪いのもあいまって、今朝のような事態になるのだ。

「ところで、遅刻してくるぐらいだから、何か成果はあったの？」

「ん？ いや、流石に今回のばっかは上手くまとまなくてな」

私達が話しているのは、今日が提出期限の課題の事だ。暁斗は意外そうにカイを見つめている。

「珍しいな、お前がそんな事言うなんて。どんな課題だったんだ？」

「パーソナルスキルPSについて、何でもいいから調べて纏める、ってやつだ」

「……成程。調べる余地が多くて、お前が好きそうな形式だな」

暁斗の言葉に、カイは苦笑する。一応、本人も自覚はしているらしい。

「でも、専門家達の間でも、PSについて詳しい事は分かってないんだろ？」

「ああ。だから本当は、そこまで難しいことは調べなくてもいいんだろっけどよ……せっかくの機会だから、いろいろ漁ってみたんだ」

カイは箸を止め、語り始める。

「知つての通り、PSは今の世界じゃ誰もが使える能力だ」

言いつつ、カイは掌を上に向ける。そして彼は、そこから炎を生み出してみせた。

「けど、暁斗の言った通り、この力については、学者でも詳しい事は分かってねえ。分かっているのは、こいつがその人物の心に深く影響されるって事」

カイはぱつと手を振って、炎を消す。

「PSは誰にも宿り、その内容は人によって違う。そいつの心や記憶を具現化した能力になるってのが一般的だけど、親から遺伝するケースもあったり、こいつもはつきりとは言えねえ」

次第に饒舌になっていくカイ。みんなも食事を続けながら、彼の語りを聞く。

「誰でも使えるくせして、誰にも原理が分からない超能力……それが一般的なPSの認識だ」

「学説だけならいろいろあるけどね」

「まあな。で、こつからが本番だけど……俺が調べたのは、PSの起源についてなんだ」

「起源？」

「そ。PSは、今の暦……天歴になる以前には存在していなかった。歴史上でPSの存在が確認され始めたのは、ある一点を境目にしてだ」

「…… 黒の時代、か」

レンが出した単語に、カイは頷く。コウだけがちょっと首を傾げていた。

「黒の時代……って、何だっけ？」

「旧世紀末期に起きたとされる世界大戦……その途中から終結までの記録が全く残ってねえ事からついた呼称だ。多分、大規模な情報操作が行われた結果だろうがな。じゃ、コウ。黒の時代の前と後、その大きな違いを三つ言ってみる」

「ふえ！？ え、えつと……」

いきなり振られ、素っ頓狂な声を上げて飛び上がるコウに、カイは溜め息をつく。この二人、性格はけっこう似ているのだが、この

一点だけは真逆だ。

カイは言動こそ荒っぽいために誤解されやすいが、見ての通り非常に知的探求心が強く、入学以来、学年1位をぶっちぎりでキープしているほど頭が良い。

反面コウは、昔から勉強が大嫌い。理数系教科だけは得意としているが、その他の教科は口に出せないほど悲惨な結果を残し続けている。

そんな二人が、この手の話題を話し合うのは、なかなか難しい訳で……

「ひ、一つはPSの有無だろ？ で、その……二つ目が……ゆ、UDBの存在。あと、三つ目が……えっと……」

「……歴史のテスト、赤点取る訳だな、これじゃ」

「うるせえっつーの！ ……そうだ、獣人の存在だ！」

「……まあ良い。もっとスラスラ言えるように教科書読んどけ」

一応は正解を答えたコウに、カイは何か言いたげではあったが、面倒だったのかそのまま流した。

「黒の時代が終わって作られた暦が天歴だが、大戦が何年続いたのか、それは現段階じゃ分かってねえ。が、何千、何万年と続いた訳じゃねえだろう。それなのに、世界には三つの変化が起こってる……この事について、学者は揉めてる訳だけどな」

人々に宿る超能力、PS。人類を脅かす獣、UDB。そして、新たなヒト、獣人。これらの全てが、黒の時代に発生したものとされている。

「どれもあまりに大きな変化すぎて、進化、の一言で考えるには短すぎるからな。進化説を推す意見は、過酷な環境に適應するために急速に進化せざるを得なかった、とか言うのが多かったけど」

「他にはどんな説があるんだっけ？」

「獣人には先祖返り説、PSには潜在開花説とか、いろいろあるぜ。面白いので行けば、生物兵器説とか、多元世界説とかだな」

「生物兵器に多元世界、ね……随分荒唐無稽な話だな」

「そんならい有り得ない事が山積みだった、黒の時代はな。それに、意外とこういう説の中に正解があったりするもんだぜ？」

議論は徐々にヒートアップしていく。それに伴い、コウの頭の上にクエスチョンが増えていく。

「じゃあ、カイはその説を支持してるの？」

「支持、とまでは行かねえけどな。生物兵器説とか、同時期に三つの変化が起こった説明もつくし、良い線行ってると思っぜ。ま、それを可能とする天才的な頭脳を持った奴がいたなら、の話だけだよ」

「いずれにせよ眉唾ものって事か」

「だな。簡単に答えが出ねえからこそ、学者達は苦戦してんだけど

……

「……………」

「コウ、無理に考えないほうがいいよ。湯気出てるから」

ほっといたら爆発しそうだったので私がそう言ってあげると、コウは髪をぐしゃぐしゃにかき乱した。

「お前って、ホントいつつも小難しい事考えてるよな」

「ま、誰かさんと違って、しっかり勉強してるんでな」

「……そのくせ、学習能力は全くねえけどな」

「……あ？」

からかうようなカイの言葉にコウが皮肉を返す。……あ、この流れ……

「毎回毎回、寝坊しては上村にしばかれてんじゃねえか。学習能力あんなら、そんな事にはなんねえだろ？」

「……こちらら、どっかの誰かみたいなの、何も知らねえバカにはなりたくねえんでな」

「へえ……？ 同じ失敗を繰り返す奴の事もバカって言うと思うけどな……？」

「……何だ、自分が脳みそねえからひがんでるのか？」

「おい、カイ、浩輝……？」

……この空気は、マズい。

「……誰が脳みそねえだって、コラ？」

「事実じゃねえか。この前の語学のテストだって、ビリから数えた
ほづが早いくせによ！」

「うるせえ、学校で習う語学なんて将来使わねえんだよ！」

「はっ、勉強出来ねえ奴は決まってそう言うよな！ こっちはなりた
くねえぜ」

「ふん。勉強しか出来ねえ、自分の知識をひけらかしてばっかのダ
メ男にもなりたかねえけどな！」

「おい、少し落ち着けお前ら……」

「ちよつと、二人とも！」

私とレンが制止しようとするが、二人は既に相手しか見えていな
かった。バチバチと火花が弾けている。

「何だ……やんのか？ このクソ青トカゲ……」

「上等だよ……アホ白ネコが……」

「おい、お前ら！」

「止めろ、馬鹿！」

今にも飛びかかろうとする二人に、レンがコウを、暁斗がカイを
押さえつける。

「邪魔すんじゃない、暁斗！ こいつとは一回、白黒はっきりさせ
なきゃなんねえんだよ！」

「そつだ！ 関係ねえんだからすつこんでろ、レン！」

「お前ら、とにかく落ち着け……！」

「邪魔すんなって……」

「言ってるんだろ……！」

「うわっ!?!」

罵声と共に、止めに入った二人が吹っ飛ばされたのを見た瞬間、
私も声を荒げた。

「ちよつと！ やりすぎだよ二人とも！」

「てめえもうるせえぞ、ルナ！」

「外野は大人しくしてやがれ！ 邪魔すんならてめえもぶっ飛ばす
ぞ!?!」

「いい加減にしてよ……！」

『うるせえ黙ってる、このサル女が……!』

その瞬間、私の頭の中に、プチン、という音が響いた。

「痛っ……お、おい、馬鹿かお前ら！」

「あっ!?!」

「し、しまった！」

レンの言葉に我に返って、恐る恐るこちらを振り向いた二人に、私は満面の笑みを向ける。頭に血を上らせていたはずの二人は、私を見た瞬間に硬直した。

「二人とも、元気が凄く有り余ってるみたいだね……」

「あ、あの……ルナ、さん？ 笑顔なのに、目が全然笑っていらっしやらないんですが……」

「笑えると思ってる？」

「……ご、ごもつともです……」

先程までの威勢はどこへやら、完全に身体を萎縮させてしまっている二人。

「ねえ、二人とも。喧嘩して、止めに入った友達に暴力振るって、楽しい？」

「い、いえ……先程のはですね、不可抗力と言いますか……」

「ぼ、僕が悪かったです……ご、ごめんなさい……申し訳ありません……」

何やら言い訳しているカイと、ひたすらに謝罪しているコウ。残念ながら、その内容までは私に届いていなかった。

「え、えつと……ルナさん？ 笑顔の向こうに死神が見えるのは僕の気のせ……」

「さあ？ とりあえず、私から二人に言う事は、一つだけだよ」

恐怖に震える二人に、私は最高の笑顔を返し、言い放つ。

「……三途の川辺りで反省して来いっ……！」

本日二度目の断末魔が二人分、爽やかな青空の下で響き渡った

十分後。

「本当に……死ぬかと思った……！」

「俺、何かすげえ綺麗な花畑が……見えた……」

「……いつまで泣いてるんだ、お前ら。気持ちは分かるけど」

「加減はちゃんとしたんだから、しっかり反省してよね」

「……アレで加減してたのかよ。てか、友達は大事にとかってなかつたか、お前」

「気にしないの、いつもの事だから」

「……いつもってお前……いや、何でもねえ……」

とりあえず、喧嘩も無事(?)終息したので、私達は気を取り直して昼食をとっている。

泣きじゃくりながらもご飯は普通に食べてるから問題はないだろうけど、正直、少しやりすぎたかな? とも思う。

「……もう。そろそろ泣き止んでよ。今度何か奢ってあげるから」

「……俺、焼き肉で……」

「俺は寿司……」

「……遠慮つてものを知りなさいよ。一人千ルーツまでだからね?」

お仕置きの後にも関わらず図太く要求する二人に内心呆れつつ、私にも罪悪感があったので条件付きで了承する。……財布の中身が寒くなりそうだ。

二人は涙を拭くと、ちよっと元気を取り戻したようだ。全く、現

金なんだから。

「そついや、ガラツと話は変わるけどよ。お前ら全員、闘技大会に出るんだよな？」

とりあえず二人が泣き止んだのを見て、暁斗がそつ切り出した。

「そう言えば、暁斗さんもまた出るんですよね」

「まあな。去年のリベンジもしてえし……」

「アレ、惜しかったもんね」

言葉通り、暁斗は去年も大会に出場している。一年生にしてはなかなかの結果を残したのだが、準決勝で惜しくも負けてしまったのだ。

「……瑠奈も、出るって心は変わってねえんだよな？」

「もちろんだよ」

「だよなあ。お前、言い出したら聞かねえし……はあ」

「相変わらず過保護だねえ、お前も」

「はは、大丈夫だって暁兄。ルナはクラスでも上位の実力者だから」

「いや、予選で生き残ってる段階で、弱くねえのは分かってるんだよ……でもなあ」

やはり私が大会に出るのを微妙に渋っている兄。私の事を心配してくれるのは嬉しいんだけど、カイの言う通り、過保護なのはたまに困る。

「第一、こういう所でしつかり実力を磨いてたほうが安心でしょ。いつUDB関連の事件とかあるか分かんないし」

「UDB関連……か。そっぴゃ、最近増えてるよな、ニユースも」

「今朝もバーストールでどうのって言ってたよ」

「ネットでもいろんな国で被害情報が出てたぜ。変化ねえのは、この国ぐらいだな」

この国エルリアは、非常に治安が良い。UDB関連の被害など、私を知る限りは全くと言っていいほどに聞いた事がないくらいに。

「ま、いつ何が起こるか分かんねえってのは確かだしな。今は心配なのは分かるけど、将来的には自分で戦えたほうが安心だぜ、暁斗」

「……分かってるよ」

暁斗も渋々と言った表情で頷いた。それが正しいのは彼だって分かっているのだろう。

「いつ、何が起こるか分からない、か……」

いつも通りの青空の下、私はカイの言葉をもう一度繰り返してみた。

平凡で、平和な毎日。いつか、これが破られる時が来るのだろう

か……？

「ところでお前ら。早く食わないと、あと五分で昼休み終わるぞ」

「あ、やべえ！ いつの間にこんな時間に!？」

「ちくしょう、ちょっと喋りすぎたか！」

「間違いなくお前らの喧嘩のせいだろ……」

そんな思索にふけたのも束の間、若干の騒がしさと共に、私はありきたりな日常の中へと戻っていった。

間幕1 動き始めた世界

どこか、薄暗い部屋の中。

今、この中には三人の男が集まっていた。

一人は虎人の青年。年齢は20歳程度であろうか、美しい青色の毛並みに、整った顔立ちをしている。

次に豹人の青年。年齢は虎人と同じ程度で、毛並みは漆黒。眼光は鋭く、冷徹に感じられる程の落ち着いた雰囲気を持っている。

そして最後の一人は、大人の少年。毛並みは薄茶色で、非常に小柄。顔付きも童顔で、少女と見間違えられそうな外見だ。

「はあ……いい加減退屈です……」

そうぼやいたのは大人の少年。彼らがここに集まってから、何もないうままに30分程度が経過していた。

「仕方ないだろう。まだメンバーが揃わないんだ」

青虎が少年をいさめるが、彼はやはり不満げだ。

「本ぐらい置いといてほしいですよね。こつ……何もしないでじつとじつとくって、苦手なんですよ」

「気持ちはこちらからでもない。が、それくらい我慢出来るようになるれ」

「むづ……これなら学校の教材でも持つてきとけば良かったかな。

何日か休む事になったから、自習しないと授業に遅れちゃうんです

よね」

「お前も苦勞しているようだな」

「昔と違って、抜け出すのは楽になりましたけどね。父さんとかに無理を言っつて、一人暮らしを認めてもらいましたから……まあ、あんまり頻繁に休んでると連絡されちゃうから、程々にしてもらいたいんですけどね、召集は」

犬人がそう言っつて溜め息をつくつと、今まで黙つていた豹人が口を開く。

「お前には悪いが、近いうちにそうも言っつていられなくなるだろう」

「近いうちに……では、そろそろ僕達も本格的に動く事になるのですか？」

「だから今回の召集がかけられたのだろう。今後、俺達がどう動くべきなのか、な」

「集まつた、と言っつても三人ですよ。他の方々はどうしてるんですか？」

犬人の質問に、青虎は首を横に振る。

「俺にも分からない。だが、銀月はすぐに来るはずだ」

「そう言えは、あの方もここで待機しているはずですよ。何かあったんですか？」

「大方、決意を固めているのだろう。これから先の任務は、あいつの性格にはより反する事になるだろうからな」

「……成程」

豹人の推測に、犬人も納得したように頷いた。

「この間、大きな任務があつてな……それ以来、少し沈みがちになっているようだ」

「……あの方は少し優しすぎる。必要と分かつていても、簡単には割り切れないでしょう」

犬人は心配そうな様子を見せている。

「俺達で様子を見てはいるが……あいつは昔から、悩み始めると思い詰める癖があるからな」

「……大丈夫なんでしょうか？　悩みすぎて潰れてしまわなければ良いんですが」

「心配ではあるが、奴は俺達に必要なだ。迷いは捨ててもらわないと困る」

「そうだな。しかし、それにしても遅い」

豹人の言葉は、凄まじい勢いで開いたドアの音に、かき消された。

「み、皆さん……大変です、シグルド様……」

「む……?」

入ってきた男の言葉に、虎人……シグルドは顔をしかめる。

この男はシグルドの部下であったが、普段は冷静な人物である事をシグルドは知っていた。その彼がここまで慌てているのだ、よほどの事があつたのだろう。

「落ち着け。何があつた?」

男は軽く呼吸を整えると、未だに信じられないと言つた様子で、言う。

「ぎ、銀月様が…… 謀反を起こしました!!」

「なっ……!!?」

予想を遥かに超えたあまりの衝撃に、シグルド達は言葉を失つた。

「どういう事だ……状況を説明しろ!」

「わ、私もまだ詳しい事は……しかし、既に外に逃亡しているそうです!」

「まさか……間違いないんですか!?」

「は、はい。捕獲しようとした兵が何人も倒され……命に別状のあるものはいないようですが、只今、追撃部隊の編成が行われています」

「そんな馬鹿な。いくら思い詰めていたと言え、あいつがそんな事を……！」

「　　ッ！！」

「シグルドさん!?!」

シグルドは傍らにあった自分の斧槍を手にすると、一人で駆け出す。

「待て、シグ!！」

制止する豹人の言葉すら、彼には届かなかった。

奴が……裏切った？

自分の目で、確かめなければ……信じられない。

だが……もしも真実ならば？

その時は……俺は

この日。

世界はひっそりと、しかし確実に動き始めた。

3話 出逢い

10月5日。今日もまた、清々しいまでの晴天。

今日は、私達一家にとっては少しだけ特別な日。とは言っても、朝の風景は変わらない。

「お兄ちゃん、入るよ？」

私は兄の部屋のドアをノックする。返事はない。が、それは予想の範囲内なので、かまわず中に入る。

暁斗の部屋は、いかにも男子高校生って感じの部屋だ。

それなりに片付いてはいるけど、隅っこには雑誌が無造作に重ねられてあり、二つある本棚のうち一つは、音楽CDやらDVDやらゲームやらが埋め尽くしている。

昨日はよほど疲れていたのだろう、鞆も床に投げ捨てられている。

そんな中、ベッドの上の暁斗は、幸せそうな寝息をたてていた。

「お兄ちゃん、もう時間だよ？ 遅刻しちゃっよ？」

「……………」

「お兄ちゃんったら」

「……………スー、スー」

……………駄目だ、完全に爆睡してる。私はとりあえず、少しずつ起こ

す声を大きくしてみる。

「暁斗、起きてっばー！」

体も揺さぶってみるが、微動だにしない。

暁斗は基本的には寝起きの悪いほうではないのだけど、時折……
と言つか、部活に熱を入れすぎた翌日には、大抵の場合には疲労から爆睡し、テコでも起きなくなってしまうのだ。

「見事に無反応だね。なら……」

仕方なく（もとい、仕方なさそうに見える動作で）、私は手に持っていた一本のピンを開ける。

暁斗はと言うと、真横に死神と化した妹がいるなどとはつゆ知らず、今だに深い夢の世界。

「ラストチャンスだよ。暁斗、起きて」

布団越しに叩いてみる。でも無反応。

……さすがにここまで来ると、ちょっとイラついてくる。てなわけ、私は彼の口を無理矢理開き

「いい加減……起きなさい、バカ暁斗お！」

ピンの中身を一気に流し込んだ。

「んぐっ……！！ うぐおああああー！！？」

朝の我が家に、兄の絶叫が響き渡った。

ビンの効果は抜群で、暁斗は文字通りにベッドから飛び起きる。最初は何が起こったか分からなかったようだけど、私の姿を見付けると誰が犯人か察したようで、涙目になりながら私を睨み付ける。

「ゴホっ、る、瑠奈、て、てめ、え……ゲホっ、ゴホっ！」

「おはよう、暁斗！」

「お、はよう、じゃ、ねえ、だろ！ ゴホっ……み、水！」

私が彼の口に流し込んだのは、お父さんが興味本位で買ってきた激辛ソース。パッケージにはドクロが描かれていて、いかにも強烈そうな代物だ。

それをダイレクトに注がれれば、辛いを通り越して激痛と熱さが襲ってきている事だろう。

暁斗は水を求め、部屋を飛び出そうとする……が。

「あ、足元……」

「いつ！？ がっ！ ……………ぐえっ！？」

床に投げ出した鞆に思いっ切り足を引っ掛けた暁斗は、勢い余ってドアノブに頭から突撃する。その痛み悶えていると、さらに臍をベッドに打ち付けてしまった。……うわ、痛そう。

「ちよつと……大丈夫？」

ピクピクと痙攣を始めた兄がさすがに心配になり、そう声をかける。

「……る、瑠奈……死ぬ前に、一言……『お兄ちゃんが世界で一番好き』って聞かせ……」

「……うん。死んでよし！」

何やら世迷い言が聞こえてきたので、尻尾を全力で踏みつけておく。暁斗は悲鳴を一つ上げると、そのまま微動だにしなくなった。

「……あ、綺麗な、花畑が……」

「もう。あんまり無駄な時間かけてると、本当に遅刻しちゃうよ！」

まあ、倒れてる元凶は私ではあるんだけど、そうも言ってもらえないので、瀕死の兄を無理やり起こす。このままでは埒があかないので、丁度よくそこら辺に置いてあったペットボトルのスポーツドリンクを飲ませる。

「……ゲホっ、ゲホっ……うっ……体の中が焼ける……」

「そこまで強力なんだ、アレ……使う時は気を付けよ」

「人の体で実験するんじゃないよ……ゴホっ」

疲れたような溜め息をつく、暁斗はようやく起き上がった。尻尾はだらりと垂れており、まだ痛むのか打ち付けた頭を押さえている。

「……ったく、お前って奴は。もうちょい普通に起こせねえのか？
……ゴホっ」

「暁斗が普通に起きないからでしょ。それに、暁斗のリアクションって楽しいし」

「楽しいのはお前だけだろ！ 俺はお前のオモチャじゃねえぞ……
ゲホっ。うっ……とりあえず、水だ水……」

反論しつつも、それ以上にダメージが大きいうつで、暁斗は憔悴しきった様子で部屋を出て行った。……少し強烈すぎたかな。今度、彼の好きなチョコクッキーでも作ってあげよう。

暁斗を追って部屋を出ると、彼は浴びるように水を飲んでいたりあえず、彼の朝ご飯の準備を始める事にする。

「……ふっ」

「ちょっとは回復した？」

「まだ舌がヒリヒリするけどな……そっいゃ、母さんは？」

「朝早くから出たよ。少し用事があるんだってさ」

「ふうん……」

何とか落ち着いたらしい暁斗は、テレビのスイッチを入れてから、いつもの定位置に座る。

「お兄ちゃん、今日の事は分かってるよね？」

「おお、放課後の事だろ？ 大丈夫、ちゃんと部活も休みもらってるぜ」

言いつつ、暁斗はご飯を口に運ぶ。顔をしかめたところを見るに、まだ味覚が戻っていないらしい。

「そついや、今日は浩輝の奴遅いな」

「あ、今日は来ないよ」

「え？ 珍しいな。何かあったのか？」

食べながらそんな質問を投げかけてくる暁斗。私は溜め息混じりにそれに返す。

「別に？ ただ、昨日あった歴史の小テストで、ある意味記録に残る結果を出したから、先生から朝一番に呼び出し食らっただけ」

「……成程な」

今頃は特別授業と言う名の、彼にとっては拷問に等しい時間を過ごしている事だろう。自業自得としか言えないけど。

暁斗はちよっと呆れ顔になりながら、ご飯を一気にかきこんだ。

「あんま慌てると詰まらせちゃうよ?」

「ゴタゴタしたから、ちょっと急がねえと遅刻しちゃうしな……」

口の中のものを流し込むようにお茶を飲む。あまり行儀が良いとは言えないが、時間があまり無いのは事実だ。

「……んぐつ。ふう、ごちそうさま」

彼は両手を合わせると、素早く立ち上がった。

「片付けは私がやっとかから、早く準備してきなよ」

「お、悪いな。じゃ、ちょっと待っててくれよ」

駆け足に部屋へと戻っていく兄を見送ってから、私は食器を運び始める。

「さ……今日はどうしようかな」

兄が戻ってくるまでの間、私は放課後の事についての予定をいろいろと考えていた。

学校。朝、教室で虎が死んでいたが、みんな特に気にする事も無く、この日も普通に授業は進んでいった。

そして、今日の授業もラスト。担任の上村先生による歴史の授業だ。

「では、1701年に発生した 真創教 と呼ばれる宗教は、どのような内容だ？」

「え……えーっと、ですねえ……」

現在、授業の場を借りた公開処刑が行われている。裁かれているのが誰かは言うまでもない。

先生は頭痛がしてきたのか、片手を額に添えている。

「……如月」

「人間を絶対として、他種族を排斥する宗教です。種族差別的な考え方は即座に全世界から批判を浴びましたが、一部の地域では現在も陰ながら信仰されているようですね」

カイは当然のように即答する。コウを眺める視線は凄く楽しそうだ。

「さすがだな、完璧だ。思い出したか、橘？」

「……あー……そ、そうでした、ね……」

……どう見ても思い出したようには見えない、と言うより最初か

ら知らなかったという顔をしている。先生も間違いなく気付いているだろうが。

「ちなみにこれは、朝の個別授業でやった範囲なんだがな……」

「……スミマセン」

先生は怒る気力も失せているようだ。教えた事を半日も経たないうちに抹消されているのだから、心労は想像に難くない。

「橘……俺だって、理解はしているんだ。教科によって得意不得意はあるものだという事はな。だから本当は、こんなやり方はしたくない」

「えー……と」

「だが、物には限度と言うものがある。さすがにテスト用紙をキレイな白紙で返されたら、俺も放置する訳にはいかない」

「うぐ……」

反論など出来る筈もなく、コウは尻尾をだらりとさせている。少しかわいいかも、と思ったのは内緒だ。

「……と、そろそろ時間か。よし、ならば今日の授業はここまでだ。『みんなには』宿題は出さないが、しっかり復習しろよ」

「あ、あの、先生？ 何か微妙にひっかかるんですけど……」

「心配するな。お前にはプリントを10枚ほど用意してある。明日

以降も、じっくりと個別指導してやるからな」

「は、はあああぁ!?!」

コウの悲鳴は、教室内に虚しく反響していった。

「よし、じゃあ明日も遅刻などが無いようにな」

帰りのショートホームルームも終わり、クラスメイト達が思い思いに解散していく。

そんな中、コウは先生から受け取ったプリントを手に、机に突っ伏していた。

「横暴だ……鼻真だ、差別だあぁ……」

「ぼやく暇があったら帰ろうぜ。せつかく放課後は自由なんだしよ」

「俺は全く自由じゃねえっつーの！ てめえ、それ嫌味かコラ！」

私はプリントを覗き込んでみる。さすがに簡単な問題ばかりが集められているようだが、歴史はコウが最も苦手とする教科。恐らく、これを彼がまともにやれば数時間はかかるだろう。

「……なあ、みんな？ ちょっと相談があるんだけどよ……」

『却下』

「早!?! せめて内容ぐらい聞けよ!」

「聞かなくても簡単に想像がつくからな。教えろ、って事だろ?」

例えば、これをカイがやれば10分で終わるだろう。ちなみに、私とレンの成績は中の上といったところだ。

「なあ、お願いだって! 助け合ってこそその友達だろ? カイ!」

「俺、今日は家事担当だからムリ。サボると親父がうるせえからな」

「……ルナ?」

「悪いけど、私は暁斗と出掛ける予定なの。お父さんの事があるからね」

「……じゃあ、レン」

「俺は兄貴と組み手の約束してる」

断られる毎にコウのテンションが下がっていく。全員に却下された彼の表情には、絶望がありありと表れている。

「そ、そんな……なら、俺はどうすりゃいいんだよ!?!」

「たまには一人で悩めって事だろ。それか、慧さんに聞けばどうだ?」

「兄貴も最近は委員会だか何だかで帰り遅いんだよ……」

「じゃ、自分で解くしかねえな。努力したほうが頭に入るぜ？」

「教科書眺めてたら寝ちまうんだよ！」

「……お前な。っと、いけない、そろそろ約束の時間だから、今日は先に帰るぞ。じゃあ、また明日な」

「あ、俺も。今日の晩飯何にすっかな……ま、せいぜい頑張れよ」

「ち、ちょっと待て！ お前ら……」

呆れ顔のレンがその場を後にすると、カイも彼を追うように駆け足で教室を離れた。

そして、私もまた、教室の外に黒い狼がいるのを見付ける。

「暁斗も来たし、私も行くね。じゃあ頑張つて、コウ」

「待つて！ ホント待つて！ 俺一人じゃ無理だつて！ 頼む、何でもするから……頼むから見捨てないでくれえええ……」

軽く泣きが入っているコウを見ると何だか哀れになってきたので、私は変に同情しないうちに、教室を出る事にした。

外で待つていた暁斗も、私が向かってきているのに気付いて、よっ、と手を上げる。

「ごめん、待たせちゃったかな？」

「いや、俺も今来たばかりか。……ところで、何か後ろで死んでるのがいるけど……」

「気のせいだと思うよ」

「そ、そうか……」

だいたいの雰囲気は感じ取ったのか、暁斗もそれ以上突っ込んでほこなかった。まあ、コウもたまには痛い目を見たほうが良いだろう。いつも宿題を私達の丸写しばかりかしてるから、成績が落ちていくのよ……

「じゃ、行こっか?」

「そうだな。何買うかは決めてんのか?」

「大まかに、だけどね。お父さんの好みなら、男の暁斗のが分かるんじゃないかな、と思って、決めてはないけど。一緒に見ながら考えようよ」

「ん……ま、そうだな。時間もまだあるし」

私達が今日出掛ける理由　それは、お父さんへの誕生日プレゼントを用意するためだった。

本当は前日までに用意したかったんだけど、暁斗と私の予定が合う日がなかなか無くて、結局は当日である今日に準備する事になったのだ。

「とりあえず、いくつか目星つけてる店あるから、近場から順に回

っていこう」

「だな」

私達は学校を出て、街を巡る事にする。……考えてみたら、兄と買い物に行くのも久しぶりだった。

「暁斗、最近は部活の調子、どうなの？」

「ん？ おお、かなり良い感じだぜ。この前ベストタイムも出たしな」

「へえ、凄いじゃん。良かったの、休んじゃって？」

「まあ、元々、闘技大会の為に休みも貰い始めたしな。しばらくはイベントもねえし、構わないさ」

部活について話しているとき、暁斗は凄く生き生きしていると思う。

彼は本当に陸上が好きだ。本人曰わく、走っていれば嫌な事が全部吹っ飛んでしまうらしい。もちろんキツイ時もあるらしいけど、楽しんでいるから全力で取り組めるのだろう。

「今年は夏の大会も優勝だったしね」

「へへ。この勢いに乗って、闘技大会も優勝しちまうかな！」

「あれ、そう簡単に行くと思ってる？」

「……っ」

私の言葉で、私が出る事を思い出したらしい暁斗は、少したじろいだ。

「言つとくけど、私に負ける気は無いよ？ それに、コウ達だって強いんだからね」

「……そりゃまあ、不安がねえって言えば嘘になるけどよ。俺だって、お前達にはまだ負けねえぜ」

「ふうん。じゃ、私を躊躇いなく撃つんだ？」

「うぐ!?!」

少しからかってみると、予想通りに暁斗は言葉を詰まらせた。その様子はどこか可愛らしくも感じる。

「なんて、もちろん冗談だよ。逆に、手を抜いたりしたほうが許さないよ?」

「……許さないって?」

「一生口聞いてあげない」

「何い!?! そりゃ厳しすぎだろ! せめて一ヶ月……いや、一週間程度に……」

「手を抜かなきゃ良いだけの話でしょ。それとも、抜く気だったの?」

「……いや、まあ……何て言うかな……」

暁斗は困ったように頭をかく。

「お前には分かんねえかもしれないけど、女子と戦うってただでさえやりにくいんだぜ？　それが実の妹ともなりや……」

「まあ、みんなも似たような事は言ってたけどさ。こっちだって手加減ありで勝っても嬉しくないからね」

「それは分かってるよ。けど……なあ」

やりにくい、か。

女の私にはよく分からないけど、男の子からしたらそういう部分があるのだろうか。

でも、私は女である事を武器にはしたくない。やるからには、ちゃんと実力で勝ちたいと思う。

「ま、良いや。でも、本番で当たったらちゃんと覚悟決めてよね」

「分かったよ。お前に負けたらそれこそ立つ瀬ねえしな」

「本気でも負ける気は無いんだけどね」

「……言いやがるなお前も」

苦笑いしながら、暁斗は鞆からスポーツドリンクを取り出した。

「そう言えば、一年からは他に出る奴いるのか？」

「あ、ルツカ君も出るよ」

「お、そうなのか。て事は……一年から5人か。多いな」

「まあね。大抵の一年は地区予選で落ちるから珍しい事だ、って言うてたよ、先生が」

事実、先月に開かれた地区予選大会では、私達以外は大抵が三年、ちらほら二年って感じだった。

ちなみに、過去に実績がある人は予選免除されるため、暁斗は今年
の予選を受けていない。だから、私が出る事を予選が終わるまで
知らなかったんだけど。

「……ふう。とりあえず、お前らに負けないように、しっかり訓練
しとかないな。みんなの前でカッコ悪いところも見せらんねえし」

「あれ、彼女でも来るの？」

「違いよ。クラスメイトも見にくる奴はいるだろ？」

彼女、と言う単語に、暁斗は困ったように笑う。

「第一、俺はまだ彼女いねえんだよ」

「ふうん……この間ラブレター貰ってたって、寺島先輩に聞いたけ
ど」

「……竜二の野郎。あれなら断ったよ、相手には悪いけどな」

意外と言ったら悪いけど、暁斗はけっこうモテるほうだ。

スポーツも得意だし、性格も明るく人当たりが良い。そして、妹の私が言うのも何だけど、顔立ちもカッコいい部類に入るだろう。先輩達の情報によると、ちよくちよく告白とかもされているらしい。だけど……本人の言う通り、彼女が出来た事はまだ一度も無い。

「まだ部活のほうに集中したいの？」

「ん……まあ、それもあるけどよ。前も言っただろ？ 自分が本当に好きって思えない限り……中途半端な想いじゃ付き合いたくねえんだ」

試しに付き合ってみるって手もあるのかもしれないけど、同情で付き合ってもしも好きになれなかったら、相手をもっと傷付けるから嫌だ、と言うのが彼の理論だ。

まあ、本当に好きな相手と、って気持ちは私にも分かる。

「で、俺の心配する前に、お前はどんなんだよ」

「私？ 私も今のところ好きな人いないしね」

「浩輝達とかは？」

「コウ達の事は確かに好きだけど……恋愛感情じゃないよ。向こうだってそうだと思うよ？」

コウも、カイも、レンも、私にとって大切な人だ。けどそれは親友としてであり、それと違う種類の感情を抱いた事はない。第一、私が意識したら向こうが迷惑だろう。

「……もしも、だ。あいつらのうち、誰かに告白されたらどうする

「？」

「ええ？ うーん……その時になってみないと分からないよ。第一、そんなの絶対無いって。有り得ない」

「……可哀想にな、あいつも」

「え、何か言った？」

「いや、別に……」

微妙に言葉を濁しながら、暁斗はスポーツドリンクを口にする。何かはぐらかされた気がするんだけど……

「お前は俺の心配してるみたいだけど……俺はお前のが心配だぞ、切実に」

「む。そりゃ私は暁斗みたいにモテないけどさ」

「いや、そういう意味じゃなくてだな……」

暁斗はゴージャルのズレを直している。何だか疲れた表情をしているのは気のせいだろうか。

余談だけど、彼のトレードマークであるあのゴージャルは、私がプレゼントしたものである。私の予想以上に気に入ったらしく、あげてから数日は寝る時も外さなかったくらいだ。

「……ところでさ、私達って、周りから見たらどうなんだろうね？」

「どっ、って？」

聞き返しながら、暁斗はスポーツドリンクを口に含む。私はそんな兄に笑顔を向け……

「……カップルに見えるんじゃない、私達って？」

「ふっ！？」

私の一言を聞いた暁斗は、ドリンクを盛大に吹き出した。プラス、どうやら気管にも入ったらしく、派手にむせかえっている。

「……ゴホッ、ゴホッ……い、いったい何を……」

「いや、異種族兄弟って珍しいしさ。兄弟だって知らない人からしたらそう見えるかな、と思って」

「……止めてくれ。周りが気になっちまうだろ……」

何とか呼吸を整えつつ、暁斗は周りを見渡す。多分、彼が人間なら顔は真っ赤の筈だ。

慌てふためく暁斗の姿は、こう言ったらなんだけど可愛い。

「何を照れてるのよ……シスコン暁斗」

「……お前が言ってどうすんだ！」

「あはは。相変わらずからかいがあるよね、暁斗って」

「……お前はもう少し兄に敬意を持って」

溜め息混じりにそう言うと、空っぽになったジューズを見て顔をしかめる。

「まったく……新しいの買ってくるわ。お前は何かいるか？」

「じゃ、オレンジ系のやつお願い。無かったら何でもいいよ」

たぶん一人になって落ち着きたいのだろう、私が小銭を渡すと、暁斗は逃げるようにその場を離れた。

暁斗の姿が見えなくなり、戻ってくるまでどう時間を潰そうかな、などと考えてみる。まあ、そこまで時間はかからないだろうけど……

その時。

私は突然、強い耳鳴りを感じた。

「……………？」

何だかおかしかった。ただの耳鳴りにしては、どこか不思議な感覚があるのだ。

この感覚は……どこかで。そうだ、誰かが空間系の能力を使った時に似ている。周りの空気が歪んでいるような、そんな感じだ。

周りを見渡してみるが、ちょうど辺りには人通りが無かった。だけど、この感覚が気のせいだとは思えない。

「……………あつちから？」

私は好奇心の赴くままに、この感覚の大元を辿って、人気の無い脇道へと向かっていった。

そこは路地裏……と言うのもお粗末な場所。普通、人が通ることはまずないだろう。

だけど、間違いなくここから感じる。おかしい何かを。先に進んでいくうちに、その感覚は強くなってきた。

好奇心と恐怖の両方が強まり、私は動けなくなっていく。いったい、何が起こっているんだろう。

決定的な異変は、唐突に起こる。

私の目の前の空間が、はつきりと『歪んだ』のだ。

「……………っ！」

そこでは本来の風景と、ここじゃないどこかの風景とが混じりあっていた。流石に、こんな物は今まで見た事が無い。

逃げ出したい、とも思った。だけど、それ以上に、好奇心と言う名の鎖が、私を縛り付けて離さない。

よく見ると、歪みの中に、明らかな『違和感』があった。

『それ』は、最初はただの点だった。だけど次第に大きくなり、その形が現れてくる。

「…………えっ…………!？」

『それ』が何かに気付いた私は、思わず声を漏らす。驚愕で動けない私をよそに、歪みはどんどん加速していく。

「何？ どうなってるの!？」

私には、目の前の状況が全く理解出来ない。だが、そうこうしているうちに、耳鳴りが収まってきた事に気付く。どうやら、異変が最後の段階に入ったようだ。

歪みが一際大きくなったかと思うと、それが一気に収束して、元の何もない空間に戻り始める。

だけど……………それでも『それ』は消えること無く

「……………!!」

やがて、その現象が全て終わった時。私の前には、『それ』……………

いや、『彼』が残された。

銀色の美しい毛並みに、流れるような金髪を持った……………

狼人の、青年が。

それが……私と彼の『出逢い』だった。

4話 銀の孤狼

暗い。

黒、黒、黒。辺り一面を埋め尽くしているのは、深い闇。

此処は、何処だ？

何故、俺は此処にいる？

俺は、いったい 俺は……誰だ？

駄目だ、頭が痛い……意識がはっきりしない……

「……ル……ア……」

声が、聞こえる。

この声は……俺を呼んでいる……？

「……が……を……事は……ない。……が、俺には……お前を……事など……ない」

何だ……何を言っている？ 聞き取れない。
だが、俺はこの声を知っている。聞き慣れた……とてもよく親しんだ声。

「何処に……れるかは……が、しばらくは……せる……だ」

その声は、淡々としているがどこか哀しみを帯びていて。何故だか分からないが、俺も……とても哀しい。

「……ここでお前を……した事、いつか……するのかも知れない。それでも今の俺には、……の為に前を……事など、考えられないんだ」

次第に、意識がはっきりとしてくる……纏わりつく闇が、晴れてくる。

俺は……俺は

「……生きる、ガル。例え俺を忘れようが、俺の敵になろうが……な」

声の聞こえた方向に手を伸ばした瞬間 辺りが、明るい光に包まれていった。

目を開くと、先ほどとは逆に、辺りは白く染まっていた。どうやら俺はベッドに寝かされていたらしい。清潔感のあるベッドは、再びまどろんでしまいそうな程に心地良い。

「ここは……病室か？」

「今のは、夢だったのか……？」

「……くっ」

頭痛がする。まだ頭がはつきりしない。それに、何だか全身が重い。

「気がついたか？」

「！」

不意に聞こえた声に、俺は体を起こしてそちらを向いた。そこにいたのは、虎人の男性だった。

「あなたは……」

「私は橘 たちばな・ゆづき 優樹。ここで働く医者だ」

優樹と名乗った男性は、軽く頭を下げる。白い毛並みの上に白衣を着ているため、虎特有の縞模様が目立って見えた。

「大丈夫か？ 一応の手当ては済ませてあるが、酷くうなされてい
たからな」

「……ああ。まだ頭がぼんやりとしているが、何とか平気なようだ。俺は、いつたい？」

「息子の友人が、倒れていた君を見つけたらしくてな。そのままこの病院に担ぎ込んでもらったんだ」

倒れていた……？ くそ、思考が上手く回らない。何があつたんだつた？

優樹は、そんな俺の様子を眺めている。彼からしてみれば俺は不審な人物であるのだから当然だろうが。

「……目覚めたばかりに悪いんだが、確かめたい事がある」

「何だ？」

「君はどこから来た？ 名前や出身、身分や職業、その他、自分の事が……『分かるか？』」

俺はその質問に順番に答えようとして 頭の中が真っ白になつた。

名前。出身。身分。職業。それは、俺自身ならば簡単に分かる筈の情報。それなのに、俺は口を開いたところでその動きを止めてしまった。返答をする事が、出来なかつた。

優樹は俺の答えが返ってこない事を確かめると、表情を険しくした。

「やはり、予想通りか……」

「っ……俺は……」

俺の混乱を見透かすような優樹の視線。彼は、深い溜め息をついた。

「俺の質問の答えが……『思い出せない』んだな？」

俺が、俺であった事を示すもの。俺の記憶が 無くなっていた。

「……く、うっ……！」

「！ 大丈夫か？」

激しい頭痛が襲いかかり、思考が更に掻き乱される。

「何故だ……何故、何も分からない。俺は、いつたい……！？」

「……落ち着くんだ。息をゆっくりと吸い込め」

「うっ……くそ……俺は……」

「一度だけ目を閉じて、ゆっくりと開け。そして、自分がここにいる事を意識するんだ」

かろつじて頭に届いた言葉に従って呼吸を整えると、少しずつ冷静さが戻ってくる。頭痛も収まっていった。

「少しは落ち着いたか？」

「……ああ。済まない、取り乱してしまったな」

「いや、謝るのはこちらの方だ。残酷な事を聞いてしまった」

内心では、到底落ち着ける筈もない。思考を回転させようとすると、頭痛がまた悪化する。

「予想通り、と言ったな。どういう事だ？」

「君が気を失っている間に、精密検査を行わせてもらったんだ。その際……精神に、多大な負荷がかかっているのが見つかった」

「負荷？」

「ああ……外傷はそこまで重いものではなかったのですが、気を失っていたのもそのせいだろうと思うがな。とにかく、何らかの精神的な障害が出ている事を危惧していたんだ」

……成程な。そして、俺は記憶を失っていた、と言う訳か。

「……自分の事がまるで分からないとは、な。おかしい感覚だ」

「……………」

受け入れたくはないが、受け入れざるを得ない状況。夢であれば覚めて欲しかったが、それが叶わぬ願望である事も理解してしまっていた。

「一口に記憶喪失と言っても、症状の重さには違いがある。一日だ

けを忘れる事もあれば、全てを忘れるケースもある」

「……俺は」

「今は思考が混乱している部分もあるだろうが……何でも良い、覚えていない事は無いか？」

覚えている事……

「……………」

俺は上着の内ポケットに手を入れ、その中にあったものを取り出した。

「それは？」

何かに導かれるように手にしたそれは、翼を象ったペンダントだった。ただし、チェーンの部分が引きちぎれて、無惨な状態になっていたが。

これを持っているのに気付いたのは、記憶の残滓のためだろうか。それを見つめていると、何だか心が静まっていくのを感じた。

（ 生きる、ガル ）

頭の中に浮かんできたのは、先ほどの夢……ああ、そつだ。俺は

……

「……………ガルフレア「クロスフィール」」

「何だつて？」

「それが、俺の名だ。俺は確かに、そう呼ばれていた」

あの夢は、恐らく俺の記憶の一部。相手が誰なのかを思い出す事は出来ないが。

「名前を思い出したならば……完全に忘れた訳では無いようだな」

「ああ、そのようだ……非常に断片的な記憶ばかりだが、な」

欠けている部分が圧倒的に多く、僅かに残ったものも、はっきりとした情景を思い浮かべる事は出来ない。名前を思い出せたのは、不幸中の幸いなのだろう。

「断片的にでも思い出せるならば、何も思い出せないのとは大きな違いだ。その記憶が呼び水となって、別の事を思い出していける可能性もあるからな」

「俺は、記憶を取り戻す事が可能なのか？」

「それは、私にもはっきりとは言えない。だが、君の場合、記憶喪失の原因は、先程も言った通りに精神へのダメージだ。それさえ回復すれば、全て思い出せる見込みは十分にある」

優樹の言葉に、俺は少しだけ安堵した。無論、当面の問題が解決した訳ではないが。

俺はペンダントを再びポケットにしまう。これは、大切にせねばならない。何故だか、そんな気がした。

「ひとまず、他に覚えている事を纏めてみよう。何か手掛かりが見付かるかもしれないからな」

「分かった……ん？」

部屋に響いたノック音に、俺と優樹は同時にドアの方を向いた。

「誰だ？」

「あの……私達です、優樹おじさん。入っても大丈夫ですか？」

「……瑠奈さん、か。構わない、ちょうど彼も目覚めたところだ」

優樹の許可が出ると、ゆっくりと病室の扉が開かれた。続けて、数名の子供達が入ってくる。先頭で入ってきた人間の少女が、俺の姿を見て笑顔を浮かべる。

「気が付いたんですね、良かった。全然目を覚まさないから心配してたんですよ？」

「君は……？」

「君は彼女に感謝しなければいけないぞ、ガルフレア。君を見つけたのは、彼女だからな」

そう言えば、彼の息子の友人が俺を見つけた、と言っていたな。子供達の中には優樹に似た虎人もいるので、彼が優樹の息子だろう。

「それならば、君は俺の恩人だな。ありがとう」

「いえ、大した事はしてませんよ。私はただ、あなたが……現れた所に行くわしたただけですから」

……現れた？ 少しひっかかる言い方だ。俺は、気を失って倒れていたのではないのか。

「あ、少し遅れましたけど、私は綾瀬 瑠奈って言います。よろしくお願いしますね」

瑠奈と名乗った少女は優しい微笑みを浮かべつつ頭を下げる。服装からして、彼らはみんな学生のようなようだな。

「俺はガルフレア「クロスフィールだ。ガル、と呼んでくれればいい」

夢で呼ばれていたその呼称が、俺自身も一番慣れているようだった。

「それと……敬語は使わなくていい」

「え？」

「あまり敬語で呼ばれるのは得意じゃないらしいのでな、俺は……気軽に呼んでもらえたほうが楽だ」

自分の事を仮定で言うのもおかしな話だが、仕方ない。瑠奈は少し考えるような素振りを見せてから、口を開いた。

「分かったわ。よろしくね、ガル。……こんな感じで良いかな？」

「ああ、そうしてくれ。よろしく頼む」

少女は俺に手を差し出して来る。俺は少し経ってからその意図を察し、それをゆっくりと握り返した。

「ここで出逢ったのも何かの縁、と言うやつだ。全員、自己紹介しておけ」

優樹の言葉に思い思いの返事を返しつつ、今度は少年達が俺の周りに集まる。

「俺は橘 浩輝。分かると思うけど、その優樹先生とは親子だ。よろしくな」

「で、俺は如月 海翔。いろいろと良く分かんねえ状況だけど、よろしく頼むぜ」

「時村 蓮です。……と、敬語は駄目なんだったな。これからよろしく頼む」

「綾瀬 暁斗。瑠奈とは兄妹だ。よろしくな、ガル」

名乗った順番に握手を交わしていく。初対面の、それも得体の知れない俺に対して手を差し伸べてくれるのには少し戸惑いがあったが。親切心か、好奇心か……いずれにせよ、好意的に接してくれるのは有り難い事だが。

それにしても、白虎の少年……浩輝と優樹が親子なのともかく、黒狼人である暁斗が瑠奈と兄妹だとは思わなかった。

「それで、大丈夫なのか？ 何か、親父もいろいろと心配してたし」

「……身体のほうは、何とか大丈夫だ。だが……」

俺は思わず溜め息をつく。

「身体は、か……じゃあ、それ以外は？」

「……………」

青竜の少年、海翔の少し躊躇いがちな質問に、俺は数秒ほど押し黙る。彼も何となく、まずい状態にある事を察してはいるようだ。

「すまねえ、答え辛いか？ 嫌なら無理に言わなくても……」

「いや、構わない。……自分の事が、殆ど思い出せないんだ」

「え……！」

さすがに予想以上だったのか、子供達が目を丸くする。

「記憶喪失、と言う事になるのだろうか……今は丁度、覚えている事を整理しているところだった」

記憶喪失。自分自身でその言葉を発した後、俺は言いようのない孤独感が湧き上がってくるのを感じた。自分が世界に独りで取り残されているような、そんな感覚。

途方に暮れる、とはまさしく今の心境の事を言うのだろうか。

「わりい、無神経な事聞いちまって……」

「いや、気にしないでくれ。俺に対して疑問があるのは当然の事だからな」

彼らにとって、俺は不審人物。その正体を探ろうとするのは当たり前だ。記憶喪失が嘘だと疑われても文句は言えない立場なのだから、それを信じて貰えただけでも有り難い。

「では、ガル。辛い部分もあるだろうが、覚えている事を教えてもらっていいか？」

「ああ……」

俺は、俺の中に残された、朧気な記憶をかき集めていく。

「名前の他には……年は確か、21になる。生まれは……分からない。だが、幼い頃は……路上で暮らしていたようだ。俺は……孤児だったらしい」

「孤児……」

疑問系なのは、その情景がぼんやりとしすぎて、自分の事だと言う理解は出来ても、実感があまり湧かないからだ。

「何年か独りで生き延び……どうやら、孤児院に拾われたみたいだな……そこで、同じ境遇の子供達と過ごし……それから……うっ……」

思考を集中させていると、再び激しい頭痛が襲いかかってくる。俺は思わずつめき声をもらした。

頭を押さえて顔をしかめた俺に、みんなが心配そうにしてくれる。

「大丈夫、ガル？」

「……ああ。ありがとう」

深く息を吸い、気持ちを落ち着ける。

「……済まない。今はこれ以上思い出せないようだ」

何とか思い出そうとすると、頭が酷く痛む。

「謝る必要は無い。無理をして思い出せるものでもないだろうからな」

「……分かっている」

続けて、俺は瑠奈の方を向く。

「俺を見つけたのは君だったな。俺は、どんな状態だったんだ？」

「あ……うん。私にも上手く説明出来るか分からないけど……」

瑠奈は少し戸惑ったような様子を見せながら話し始める。

「あなたは、何もない場所からいきなり現れたの」

「……何だと？」

「あれは多分、空間系のPS……転移の一種だと思う。あんなのは

初めて見たから、はつきりとは言えないけど」

PS……空間転移……？

「心当たりはねえのか？ お前自身のPSとか」

「……いや。何か引つかかるものはあるが、少なくとも、俺の力では無い……答だ」

俺の曖昧な言い方に一同が少し訝しげになり……少しして、その意味が伝わったらしい。

「まさか、PSも使えなくなってるのか？」

「……そのようだ。使おうにも、どのような力かすら覚えていないからな……ただ、空間転移とは違う。それは、何となく分かる」

「PSが使えないって……そんな事あるのか？ 親父」

「知つての通り、PSはその人物の精神と結び付いたものだ。精神に異常が出れば、そちらに影響が出ても不思議ではない」

そう言う優樹の表情は、少し険しかった。

「不安、だろうな。ガル」

「……ああ」

自分の事なのに何も分からない。それがどれほど耐え難い状態なのか、俺は身を持って体験している。

「医療技術では、身体の傷を治せても、精神の傷はどつにもならない。済まないが、私に出来るのは、手助けだけだ」

「そんな事……あなたには、いや、あなた達には感謝している。こうして、得体の知れない俺を助けてくれたのだから」

何をされても文句は言えなかったのに、こうして善意を向けてくれた彼ら。語弊はあるが、彼らに出逢えた俺は運が良かったのだらう。

「……なに、あまり思い詰めるな。心配しなくても、手は打ってあるぞ」

「……………?」

手は打ってある? どういう意味だ。

「どうするつもりなんですか、優樹おじさん?」

「正直、私一人の手には余る事態なのでな。こういう時に適任の奴を呼んだ」

「それって……」

「そろそろ来る筈だ。あいつはいつも狙いすましたようなタイミングで現れるからな」

誰かを呼んでいるらしいが、いったいどんな人物を? 今の状況に適任とは……

本当に狙いすましたように、病室の扉が開かれたのは、その瞬間だった。

5話 提案

「……お前は、本当にタイミングが絶妙だな、慎吾。外で機会を伺っていたんじゃないか？」

「ふ。俺は紛れもなく今ここに着いたばかりさ。入るタイミングを伺うくらいなら、仕事を終わらせてから来ている」

入ってきたのは、人間の青年。少し癖のある髪は明るめの茶色。眼光是鋭く、顔立ちは端正。その佇まいからは、どこことなく知的な雰囲気を感じる。年は、俺より少し上といったところだろうか。

「全く、俺にも事情があるのだぞ？ また誠司にどやされてしまう」

「悪い。だが、事は急を要するからな」

この青年が、優樹の言っていた『手』なのか？ 見たところ、普通の青年だが。

『……父さん！』

「……何？」

同時に声を上げたのは、瑠奈と暁斗。俺はその言葉に、彼らと青年の顔を見比べた。

「君が、話にあった男だな」

「あなたは……」

「俺は綾瀬 慎吾あやせ ことむね。そこにいる暁斗と瑠奈の父で、教師をやっている。よろしく」

……聞き間違いではなかったらしい。二人の父？ どう見ても、そんな年齢には見えない。兄と言われたほうがしっくり来るぐらいだ。

「驚いているな。見慣れたりアクションだが」

「あ……も、申し訳ない。あなたが、あまりに若く見えたので……俺はガルフレアックロスフィールだ」

「ふむ。まあ、若いと言われて悪い気はしないがな」

くく、と笑ってから、彼は俺の観察を始める。

「優樹、彼の状態は？」

「残念ながら、悪い予感が当たった。記憶喪失の症状が出ている」

「そうか……」

あらかたの事は、優樹から話を聞いていたのだろう。

「大変な事になったな……と言うのも無責任かもしれないが。あまり気を落とすなよ」

「ああ……」

俺の中でも、少しずつ整理がついてきた。まだ、この現実を受け入れたくないと考えている部分があるのは、否定出来ないが。

「だが、名前を覚えていると言う事は、少しは残っている記憶もあるようだな」

「ああ。名前と、年と……幼少期の事だけだが」

「幼少期、か」

俺が孤児だった事。そして、当時にどんな暮らしをしていたか……臆気ではあるが、それは思い出す事が出来ている。……だが。

「つまり、『今』の自分が何者かを思い出す事は出来ないのか」

「……………」

彼の言う通りだった。覚えている事があると言えば、そこまで悪くない状況に聞こえるが、現在の俺に通じる記憶……それは、微塵も残っていないかった。

慎吾は俺の無言を肯定と受け取ったようだ。

「では、これからどうすれば良いかは分からないし、当ても全く無いという事だな」

「父さん、そんな言い方は……」

「いや、いい。はっきり言ってもらったほうが楽だ」

ストレートな指摘にショックを受けないと言えば嘘になるが、変

に気を遣われるよりはマシだ。

「あなたの言う通り……俺には、これからどうすればいいか、全く検討もつかない。俺には、何も残されていないからな」

記憶を求めるにしても、手がかりは無い。それ以前に、明日を生きる術すら失ってしまっているのだから。

「済まないな、意地の悪い事を言って。まずは現状をはっきりさせておきたかったんでな。許してくれ」

「いや……」

元々、怒るほうが筋違いだ。一番現状を見なければいけないのは、俺自身なのだから。

「心配するな。君のこれからをどうにかするために俺が来たんだ」

どうにか、か。確かに優樹は、俺の為に彼を呼んだらしいが。

「残念ながら、元々の君と言う男を知らない以上、記憶を戻す手助けにはならないだろうがな。明日の暮らしの手伝いは出来る」

「どついう事だ？」

「なに、俺はこう見えて人脈が広くてね。君の記憶が戻るまでの住む場所や仕事……それを提供しようと考えているんだ」

「！」

驚く俺に対して、慎吾は不敵に笑った。

「無論、君の意志を尊重するつもりではあるがな。記憶の手がかりを探すにしても、生活の場や金は必要だろうか？」

「そんな、そこまで迷惑をかける気は……」

「迷惑？ そんな事はない。むしろ……いや、何でもない」

……今の含みは何だろうか。

「第一、迷惑などと気にしている場合か。君だって、このままでは生きていくのもままならないのは、分かっているだろうか？」

「……確かに、その通りだが……」

慎吾の物言いはやはり直球で、俺は反論に詰まってしまふ。俺だって、自分が何者かすら分からないままに、野垂れ死にするのは御免だ。

「仕事のほうは……まあ、後ほどでいいだろう。今は、住む場所について話しておきたい」

半ば強引に話を進める慎吾。俺は流されるままに、彼の提案を聞く事になった。

「君には、とある家に居候してもらおう事を考えている」

「居候、だと？」

困惑を込めて聞き返すと、慎吾は俺の心境を知ってか知らずか、平然と頷く。

「一人暮らしの家を手配しても良いんだが、君の状態を考えると、それだといろいろと不便だろうからな」

「だ、だが……それだと、その家庭に負担がかかってしまうだろう」

一人増えればそれだけ金もかかる。それに、見ず知らずの男が割り込んでしまえば、家庭の調和が崩れてしまいかねない。

「なに、金銭的な面はどうにかなる。それに、そんな事を気にする余裕などあるのか？」

「……余裕は無いが、だからと言って他者の生活に、無理やり割り込むような真似はしたくない。そもそも、俺のような存在を受け入れてくれる場所など、そうそう見付かる筈がない」

記憶喪失の、得体の知れない男など、誰が好き好んで受け入れたがるだろうか。

「そのぐらい、いくらでもあるぞ」

「簡単に言うが、どこに？」

「そうだな……例えば俺の家だ。と言うか、うちに来い」

……………何だと？

「うちならば経済的な問題も無ければ、君の事情も把握している。過^ぎじつらい事も無いと思うがな」

「な……………」

あまりに簡単に言われたので、最初は聞き間違いかと思った。が、どうにもそう^い訳ではなさそうだった。

「父さん……………始めからそのつもりだっただろ？」

「まあな。実は楓にも、それを見越して既に連絡してある」

「じゃあ、回りくどい言い方しないで、最初からそう言えば良いのにさ……………」

「ち、ちょっと待ってくれ……………」

俺はある意味で、記憶喪失が発覚した以上に混乱していた。どうい^う事だ。慎吾の……………瑠奈や暁斗の家に、居候？

第一、瑠奈や暁斗は、どうして平然と受け入れているんだ。まるで、俺が慌^てているのがおかしいかのような空気だった。

「ああ、ガル。先に言っておくが、返事はイエスかオーケーで頼むぞ」

……………どちらも一緒じゃないか。俺の意志を尊重すると言っていた

のは気のせいか。

「どうしても嫌、と言うならば、仕方ないが一人暮らし出来る環境を作ってやるがな。俺としてはオススメしないぞ」

「……………」

「それとも君は、全ての提案を断り、俺に薄情者のレッテルを貼る気では無いな？ 勘弁してくれ。記憶喪失の男をただ一人で送り出すなど、そんな事をすれば目覚めが悪くなる」

「…………ぐ。し、しかし……………」

短時間の会話で、俺の性格をよく捉えているようだ。的確に、俺が反論出来ない言い方をしてくる。

「そうだな、精神的に迷惑だと言い換えておこうか。君は迷惑をかけるのは嫌いなのだろうか？」

…………滅茶苦茶だ。

俺は今、脅迫されている…………だが、その脅迫を受け入れれば、得をするのは俺のほうなのだ。

「…………何故だ」

「うん？」

「何故、あなた達は俺をこつも気遣ってくれる。俺はどこの誰かも分からない、赤の他人だぞ」

本気で、分からなかった。俺を助けても、彼らには何の得も無いと言っのに。

どうして、ここまでの手助けをしてくれるんだ。感謝は勿論あるが、それより先に疑問が先立った。

そんな俺の疑問に答えたのは、慎吾ではなく……傍らにいた瑠奈だった。

「ガル……難しく考えすぎてないかな？」

「何……？」

彼女は穏やかな視線を俺に向ける。

「ねえ、ガル。ガルは今、困ってるんでしょ？」

「……あ、ああ。困っているのは確かだが……」

「だから、だよ。ガルが困っているから助ける……それだけの事じゃないのかな？」

……俺が、困っているから、助けるだけ？

「私は思うんだけど、困っている人に優しくするのは当たり前じゃないかな」

「……当たり前？」

「うん。自分だって、困った時には誰かに助けられている……だから

ら、誰かが助けを必要としているんなら、自分の出来る事をしてあげなきゃいけないと思ってる」

「……………」

困っている人に優しくするのは当たり前……………か。

「……………なんて、偉そうに言っても、私はガルに大した事してないけどね。ただ、私はこう思うっただけ」

「……………瑠奈は。俺が共に暮らすと言う提案に、何も思わないのか？」

「ん？ そうだね……………驚かなかったって言ったら嘘になるけど、やっぱり、とも思ったかな。父さんって、そういう人だし」

「……………嫌ではないのか？ 余所者が家庭に割り込む事が」

「別にそんなの思わないよ。前にホームステイの子が来た事あるんだけど、そんな感覚かな？ 私はむしろ楽しみかも。暁斗は？」

「俺は賑やかなほうが好きだしな。そりゃ、最初はちよつと違和感もあるかもしれねえけど、嫌なんかじゃねえぞ」

二人の口調や表情から、嫌悪のようなものは感じられなかった。

「ガルの気持ちも分かるよ。状況が飲み込めないのも、遠慮しちゃうのも。けど、こんな時に遠慮なんかしないで良いんだよ」

「……………俺は」

「まあ、ガルのほうが嫌だつて言うなら、無理強いは出来ないんだけどね。ただ、ガルが構わないのなら、私はあなたを歓迎するよ」

「あ、俺も一緒だぜ」

兄妹はそう言って、俺の顔を見て笑った。

「ついでに言うておくが、これは私も賛成している事だ」

先ほどから黙っていた優樹が、その言葉を発した。

「一人でいるよりも、他者と接していたほうが、記憶への刺激にもなるだろう。無論、私だって君を放置するつもりは無かったからな」

「……………」

優樹の言葉を聞きながら、俺は先ほど瑠奈が言った事を考えていた。

困っている人に優しくするのは当たり前。彼女は俺にそう言った。それは、とても綺麗な言葉。

そして…………俺の心の一部は、それを嘲笑っている。

優しくするのは当たり前？ そんなのは、甘ったれた奴が見る、幻想だ。満たされた奴だけが抱ける、馬鹿らしい夢だ。

無論、今の俺には僅かな記憶しかない。それでも、俺は見てきた。

孤児として生きた、幼い暮らしの中で。

俺は知っている。困っている相手から、さらに糞りとする奴らを。そうしなければ生きていけない奴らを。

他者を気遣う心。それは確かに素晴らしいものであるだろう。だが、そのような心を持っていた、非情になりきれない奴らは、みんな早死にしていっただ。

他者の助けなど、期待してはいけない。独りで生き延びられなければいけない。俺は……孤児としての生活で、そう学んでいた。

それなのに……彼女の言葉をこつも否定している筈なのに。どうして、俺はこんなに、心地良さを感じているのだろう。

「俺の存在は……あなた達にどんな迷惑をかけるか分からない」

「先の事など、気にするもんじゃない。何が起こるか分からないのは、誰だっけ一緒だ。大事なのは、君の意志だ」

俺の、意志……

「……俺は、記憶を取り戻したい。例えそれが、どんなに悲惨なものであつたとしても」

「そうか。ならば、その為に最善の道が何なのか、君ならば分かるな？」

最善の道。全てを無くした今の俺が、生き延びる為の道。それは。

「ガル」

瑠奈がそっと、俺に向かって手を差し出した。俺は目を閉じて、もう一度だけ考えた。そして……

「よ……よろしく、頼む……みんな……」

俺は、彼女の手をそっと握り返した。

甘すぎる程に甘い、彼女の優しい言葉を頭の中に浮かべながら。

6話 家族

「本当はいろいろと手続きも必要なんだが……今回は構わないだろう」

俺の意志が決定したところで、俺は慎吾の家に向かう準備を済ませた。と言っても、今の俺には我が身一つしか無いのだが。

正直、体はまだ重かったが、起き上がって動くだけならば特に問題なさそうだ。頭痛は殆ど回復している。

「身体のほうは大丈夫だと思うが、もしも異常が出たら遠慮なく言ってくるといい。治療費はサービスしてやるから心配するな」

「ありがとう、優樹。あなたにも本当に世話になったな」

「はは。まあ、しばらくは付き合いも続きそうだからな。この馬鹿息子共々、よろしく頼むよ、ガル」

「ああ。こちらこそ、な」

「誰が馬鹿だつっの……っと、そうだ」

優樹に髪をかき乱され、若干不満げに唸っていた浩輝だが、何かを思い出したように、笑顔で瑠奈に向き直った。

「ルナ。困ってる奴には優しくするもん、なんだよな？」

「……うん、そうだね。で？」

「いや、何だ。困ってる俺の、歴史の宿題を今から手伝うって優しさは……」

「さて、ガルが来るって決まった以上、早く帰っているいろいろと準備しなきゃ！　そういう訳で、じゃあね、みんな！」

浩輝の言葉を遮るようにそう言うと、瑠奈はさっさと部屋を出て行った。

「……おい、そういう訳で、じゃねえだろ！　鬼！　裏切り者おお！！」

浩輝の悲痛な叫びが彼女に届いたかは定かではない。
続いて彼は、振り返って海翔と蓮を見た。

「……なあ、お前ら。ここに来る為に用事すっぱかしたんだろ？　なら、すっぱかしついでに少し手伝……」

「あ、いけねえ！　早く帰っているいろいろ終わらせねえと、親父に何て言われるか分かったもんじゃねえ！　って訳で、俺もお先に失礼します、っと！　あ、明日からよろしくな、ガル！」

「さて、帰ってから親父とトレーニングだったな。じゃあ、俺も帰ります。ガル、また今度な」

「おい、お前ら！？　ちよっ……ふざけんな！　お前ら絶対めんどいだけだろうが！！　明日、覚えてやがれよおお！！」

そう叫んで、彼はがっくりとうなだれた。かと思えば、次は慎吾を見た……事情は知らないが、かなり必死だな。

「……慎吾先生、暁兄？ 分からないプリントが……」

「さて、瑠奈を待たせてもいけない。行こう、暁斗、ガル」

「オーケー」

が、その必死さは、慎吾に完全にスルーされる。浩輝に完全に背を向けたその表情は、楽しげな笑顔だった。

「おい待てコラ！ あんたそれでも教師かああ！？」

「誠司から事情は聞いているからな。自分で努力する事の大切さを教えるのも教師の務めだ」

もっともらしい事を言っているが……ただ単に、浩輝の反応で遊んでいるようにしか感じないのは、気のせいだろうか。

「ちくしょう、どいつもこいつも……そうだ！」

頼る相手が次々と逃げ出し、半泣きになっていた浩輝の視線が、今度は俺に向けられる……最後の望みにすぎるように。

「なあ、ガル。あんた、歴史って……得……意……」

語尾が小さくなった理由……それは、優樹が彼の肩をがっしりと掴んだからだ。

「これ以上の恥をさらす前に、息の根を止めておいたほうが良いよ
うだな？」

「……や、やだなあお父さん……ホラ、記憶が無くなっちゃったか
ら、知識のほうはどうなってるかを調べよう」と……ね？」

……背後から慎吾の呼び声が聞こえたので、俺はそそくさと部屋
を出て行った。

……扉を閉める直前、浩輝の身体を青白い電流が包んだのは……
気のせいという事にしておこう。

慎吾の車に乗り、綾瀬家に迎えられた俺。季節的に日が短いのも
あるが、既に辺りはすっかり暗くなっている。

「ガルフレアさん、遠慮しないで沢山食べて下さいね」

「……ありがとうございます。しかし……」

楓と名乗った女性は、やはり親子だけあって瑠奈に似ていた。彼

女をそのまま大人にすれば、恐らく瓜二つになるのだろう。

……ふと、暁斗だけが種族が違うのは何故だろう、と言う疑問が頭をかすめたが、さすがにそれを聞く事は出来なかった。

そして、俺達を出迎えたのは、彼女の料理。正直な所、俺はかなり空腹を感じていたので、彼女の言葉に甘えて、みんなで食事をする事になった。

彼女の料理はとても素晴らしく、空腹だった事もあり、気が付くと俺もかなりのペースで箸を進めていた。ただ一つ、問題があるとすれば……

「これは……些か、作りすぎではないのですか？」

俺のみならず、みんなで食べているにも関わらず、テーブル上の料理は一向に底をつく気配を見せない。これを食べきれるか、と言われれば、かなり苦しいところであろう。

「ガルフレアさんは大人の男性だって聞いたから、沢山召し上がるかな、と思っ、少し多めに準備しておいたんですよ」

「……それはもちろん有り難い事なのですが」

「少し、ね……どんな大男を想像してたんだよ」

暁斗が小声で突っ込みを入れる。しかし……俺の為に用意されたと言うならば、食べきらなければ失礼だろうな……非常に厳しいが。

「ところで、俺と優樹には普通の口調で、楓には敬語なのは何故だ

「？」

「あ、いや、それは……何となく、だが」

「ふふ、私にも楽に話して下さい。これから一緒に暮らすんですから」

「……分かりま……分かった。では、あなたも俺に敬語は使わないでくれ」

楓の落ち着いた雰囲気には、どうにも畏まった態度をとってしま
いそうになる。早めに慣れないとな……

「みんな、食べ終わったらケーキもあるからね」

「まず、これを食べ終える事が難しいと思うんだけど……」

「食べきれなければ無理しなくていいわよ。ガルフレアさん……ガ
ルって呼べば良いのかしら？ あなたの分もあるから、甘いものが
好きならどうぞぞ」

「ああ、ありがとう。……ところで、何か祝い事でもあるのか？」

ケーキなど、そこまで頻繁に食べるものではないだろう。

「今日は父さんの誕生日なんだよ」

「何？ そうだったのか……」

瑠奈の言葉に、俺は目を丸くして慎吾を見る。つまり俺は、家族

の祝い事に乱入してしまったという事か。

「すまなかつた……そんな日に、厄介事を持ち込んでしまつて」

「なに、気にするな。それに、俺も賑やかなほうが好きなんだな。そんなに畏まるな」

「……しかし」

「じゃあ、こうしない？ お父さんの誕生日祝いと兼ねて、新しい家族の歓迎会」

……家族？

「そいつは良いな。それならばガルも主役だ」

そつだ。俺はこれから、彼らの一員となるんだ。

それはきつと、俺が記憶を取り戻すまでの一時的なもの。だが、そつだとしても、それは確かに『家族』と呼べるのかもれない。

ふと、思う。

俺には、家族と呼べる存在がいたのだろうか。もしいたのだとしたら、その人は俺の事を心配しているのだろうか、と。

俺はふと、夢の声を思い出す。彼は俺にとって……どのような存在だったのだろうか。

俺にいつか記憶が戻れば、その答えも分かるのだろうか。

だが、今は。

数時間前まで赤の他人だった俺を、こんなにも暖かく迎えてくれる、彼らの優しさが、ただ、嬉しい。

今だけでもいいから、この優しさに包まれていたい……そんな我ながら甘えた感情を抱きつつも、今はそれを悪いものではないと思えた。

「改めて……みんな。これから、よろしく……お願いします」

その言葉に、精一杯の感謝を込めて。

「はい。こちらこそよろしくお願いします！」

少女の明るい笑顔は……俺には、とても眩しく見えた。

瑠奈が先ほど言ったように、綾瀬家はホームステイの子供を受け入れた事があるらしい。ちょうどその部屋がそのまま空き部屋になっているとの事で、俺はそこを使わせてもらう事になった。

「じゃあ、俺達でちょっと片付けてくるから、お前はここでくつろいでろよ」

「いや、俺の事だから、俺が自分で……」

「気にしなくていいって。身体だってまだ本調子じゃないんでしょ？」

「そついう事だ。今回はこいつらに甘えておけ」

「……む」

そこまで言われると、食い下がるのも少しはばかられる。身体が重いのも事実なので、ここは素直に甘えるべきなのだろう。

俺が納得したのを見て、瑠奈と暁斗は上の階へと向かっていった。

「……………」

目覚めてからそれ程経っていない筈だが、いろいろな事が決まっていた。

例えば、彼らと出逢えていなければ、俺は今頃どうしていたのだろう。そう考えると、寒気がした。

「大丈夫か？ 気分が悪そうだぞ」

「あ、いや……特に問題は無い。心配しないでくれ」

「そうか。だが、無理はするなよ。辛い思いは抱えるな。不安も誰かにぶちまけたほうが楽になるぞ」

俺の内面を見透かしたような言葉に、溜め息をつく。彼らのおかげで、当面の生活に対する危惧が消え去り、少しは楽になったが……記憶が無いと言う事実は、言いようのない不安を俺にもたらす。

「焦るな、と言うのは難しいかもしれないが……時間はあるんだ。思い出せるまで、ここでゆっくりと暮らせばいい」

「……ああ」

今は、信じるしかないな。いつか思い出せるという事を。

「さて、ガル。話は変わるが、君に聞いておきたい事がある」

「何だ？」

「君に、暁斗と瑠奈を任せられるか？」

「……二人を？」

慎吾の表情は、先ほどまでの気さくなものでは無く、真剣だった。

「君は明日から、俺達の家族になる。つまり、二人にとっては、君は兄のようなものになる」

「兄……」

「もちろん、それは喜ばしい事だ。だが、俺と君が出逢ってから、まだ一日も経っていないからな。俺には、君と言う男がどのような人物なのか、まだ良く分かっていない」

「……………」

「だから、君に問おう。俺の子供達を君に預けて、俺は後悔しないで済むのか？」

それは、二人の父としての言葉。俺を試す為の質問。

「……俺は、瑠奈に見つかっていないければ、今頃はとうなっていたか分からない。彼女が、俺を救ってくれた」

考えた答えではなく、心に浮かんだものを、俺は少しずつ口に出していく。

「そして、みんなは、得体の知れない俺を受け入れてくれた。俺に手を差し出してくれた」

みんなが助けしてくれたから、俺は今、ここにいる事が出来る。だから。

「俺は、それに応えたい。俺を助けしてくれたみんなの、力になりたい。そう、思っている」

「……ふむ。ならば、仮に何があるつと、彼らを護る事を誓えるのか？」

「ありきたりな言葉だが……俺の命に代えても」

俺がそう答えると、慎吾は俺の目をじっと覗き込んできた。しばし、俺と慎吾の視線が交差する。

「……良い目だ。本気なようだな」

「この場だけの取り繕いで言っているつもりは無い。もしも護れなければ、俺を殺してくれても構わない」

「……ふ」

慎吾の口元が、すっと上がる。

「君も酔狂なものだな。今日出逢ったばかりの相手に、命を賭けるとまで言えるのだから」

「俺のような男を家族として迎え入れると言えるほうも、十分に酔狂だと思つがな」

「はは………違うない」

慎吾は愉快そうに笑っていた。黙って話を聞いていた楓も、くすくすと笑つ。

「済まないな、試すような質問をしてしまつて。俺はこれでも、人を見る目はあるつもりだ………君を不誠実な男と思つているならば、家族として迎え入れたりしないさ」

慎吾はひとしきり笑つた後、もう一度真面目な顔になる。

「だが、命に代えても、と言つのは間違いだ」

「何?」

「護り抜くと言つならば、君自身も生き延びねばなるまい。死んでしまえば、その後は誰も護れないだろう? 第一、自分自身すら護れない奴が、どうして他者を護れるんだ」

護る為には、自分も生き延びねばならない……か。

「それに、俺は君にも死んでほしくはない。君自身を軽く扱う事は許さない。君はもう俺の家族なのだから……忘れるな」

「……覚えておこう」

その言葉は、素直に嬉しかった。

「まあ、そこまで真剣に考える事は無いさ。今のこの国は平和だ……命の危険など、そうそうあるもんじゃない。あくまでも仮定の話さ」

慎吾は再び笑顔を浮かべる。初めて出逢った時の、不敵なほどの笑み。

「だが……ふふふ、やはり君は向いているかもしれないな」

「……………?」

「君のように、真面目で、かつ、面白そ……有能そうな人材を探していたんだ」

「……いや、今、面白そうと言わなかったか？ わざと言い直した気がしてならないが。」

「慎吾、ガルの意志が優先なのは分かっているわよね？」

「ああ、勿論……ガル。君に先ほど、仕事の話をしていたのを覚えているな？」

何だ。慎吾の笑顔を見てみると、急に嫌な予感がしてきたぞ。

「丁度、人手不足の仕事があったんだ。君には、それをやってもらおうと思っている」

「あ、ああ……」

選り好みをするつもりは無い。だが……何でそんなに楽しそうなんだ、慎吾。

「なに、心配するな。変な仕事では無い……向き不向きはあるだろうが、君は恐らく適任だろうと思っている」

「……」一応聞いておくが。それは、どんな仕事なんだ？」

「ああ、それは」

この後、俺は十分に思い知る事になる。

綾瀬 慎吾と言う男……それが、どういう人物であるのかを。

7話 新たな日常（前書き）

世界観の解説って、難しいもんですよね……スマートに纏める文章
力が欲しい。

7話 新たな日常

私達とガルが出逢ってから、二日後。

昨日は、目覚めた時には既に、ガルはお父さんに連れられて出掛けていた。お父さんも学校を休んだ訳だけど、仕事の話でもしてたんだろうか？ 結局、私が起きてる時間には帰ってこなかったけど、ともかく、昨日は一日中ガルと顔を合わせていないので、私は何ら変わらない生活を送っていた。

一昨日の事を考えると、本当にとんでもない出来事だったと思う。突然現れたガルを見つけた時、得体の知れない相手に対する怖さが無かったと言えは嘘になる。だけど、意識を失い倒れた彼を放っておく気にもなれなかった。

お父さんがうちに彼を招き入れようとした時、私は自分でも不思議なほどに、何の反感も抱かなかった。あの時彼に言った言葉は、遠慮や気遣い無し私の本心だ。

それは、直接話してみた彼が、良い人に感じたからでもある。だけど、それ以上に……記憶を無くした彼の姿が、全てを失い途方に暮れているように見えたから。

自分の道が分からなくなる辛さ……私には、ほんの少しだけ、その苦しみが『分かる』気がしたから……

まあ、ガルと暮らすようになったからと言って、学校生活が変わる訳じゃない。私は今日もまた、いつも通りに登校した訳だけど……

「コウ、生きてる?」

「……ナントカ」

頭から煙を出して机に突っ伏しているコウは、微妙にカタコトな発音でそう返した。

「見事にオーバーヒートしてるな、お前……」

「ま、いつつも授業中に寝てたり落書きしてたり奴からすりゃ、一時間も苦行だろ」

コウに対する先生の特別授業も、今日で三日目。勉強すると吐き気がする（本人の弁）らしい彼にとっては、既に限界が近いようだ。

「課題も、答えが全然違うつつって、新しいプリント大量に渡された……」

「……歴史の問題って、教科書見ながら間違った答え書くの、逆に難しくねえか?」

「うるせえ……第一、お前らが手伝ってくれねえからだろうが!」

「逆切れ以外の何物でもないでしょ……」

ちなみに、昨日もいろいろと理由をつけてみんな帰った。彼はこ
こいらで痛い目を見といたほうがいい、と言うのが三人の結論であ
る。

「ま、こいつの事はどーでもいいとして」

「俺にはどうでもよくないっつーの!」

「お前ら、知ってるか？ 今日から闘技の新しい教員が来てるって
噂」

コウの叫びをスルーしたカイの情報に、みんなが彼のほうを向く。

「私は初耳だな、それ」

「俺はさっき聞いた。けど、本当なのか？」

「どうも、今朝にマジでいたらしいぜ。上村先生とか慎吾先生と話
してたらしいけど」

それはまた、随分と急な話だ。時期としても新任教師が来るには
微妙である。

「何でも、腕を見込んで学校のほうからスカウトしたらしいぜ。ホ
ラ、闘技専門の教員ってなかなかいねえから、一部の先生の負担に
なってるじゃん」

カイの言うとおり、闘技を専門にしている教員はあまりいない。
大体は他の科目の先生が兼任で受け持つ。

また、いろいろと監視が大変な科目でもあるので、一つの授業に二人がつかなければいけないのも相俟って、闘技用の教員を雇うべきって意見が出る、とお父さんも言っていた。

ちなみに、うちのクラスの担当は上村先生。暁斗のクラスはお父さんだったりする。

「で、どうやらその人、今日の一限からさっそく入るらしいんだよ」
「へえ？」

そう言えば、私達の一限は闘技だった。つまり、その噂の先生と顔を合わせる事になる。

「それはちょっと興味あるな。強ければ手合わせもしてもらいたいし」

「だな。へへ、楽しみだぜ」

「スカウトするぐらいなら実力者だろ。大会まで鍛えてもらわねえとな」

三人は本当に楽しみそうだ。男の子にはこういうところがあるからね。まあ、私も楽しみではあるんだけど。

……で、これだけで終われば良かったんだけど……

「お前は闘技の前に、脳みそ鍛えてもらう必要があるんじゃないか？」

「……あ？ 何だとコラ」

「全然鍛えてねえから、そんな貧弱なんだろ。中身もビー玉ぐらいしか無いんじゃないか」

「……ほう。成程、よく分かったぜ。てめえ、一限では覚悟しとけよクソトカゲ……？」

「へっ、頭の弱いアホ猫如きに俺が負けるかよ！」

「……はあ」

「お前らは、全く……」

そんな不安になるやり取りの中、朝休みの終わりを告げるチャイムが鳴り響いた。

闘技の授業は、体育館とは別に作られた建物……通称 闘技場で行われる。

造りは名前通り、旧世紀に存在していた闘技場と似ていて、中央に試合のための巨大なリングがあり、上から観戦が可能と言うシンブルなものだ。

うちの学校は割と闘技にお金をかけていて、リングの大きさはグラウンド並み。複数のグループで同時に試合しても困らない。

基本的に危険が多い教科なので、担当の先生は二人以上。うちのクラスは担任の上村先生と、後は体育の先生が一人ずつ、日替わり

で入る。

武器の使用は、殺傷力がないように加工されたものだけ。

例えば私の弓などは、矢を加工して刺さらないようにしてある（でも、当たるとそれなりに痛いらしい）

PSも使用OKだけど、能力の中には危険なものも多い。そのため、色々制約をつけられる人もいる。

と言っても、その他はほとんど何でもありで、自由に戦える。

まあ、戦闘訓練ではあるんだけど、名前から連想されるような厳しいものではなく、格闘技の一種という感覚が強い。

ケガ人だって、少なくとも私達のクラスじゃまだ出てない……今日、ケンカを通り越した血みどろの事件が起こる危険はあるけど。

「今日は授業を始める前に連絡がある。今日から、新しい先生がこの授業を受け持つ事になった」

上村先生の言葉に、クラスが期待を持ったざわめきを起こす。噂は本当だったようだ。

「どんな人なんだろうな？」

「んー、闘技の教員なんだし、いかついオッサンじゃね？ な、コウ」

「……グルルルル……」

ああ、もう。コウ、完全に変なスイッチ入っちゃってるよ……頼むから授業中に物騒な事件は起こさないでね……

「静かに。間もなく先生がいらっしやる筈だから、失礼の無いようにな、お前たち」

上村先生の指示に生返事を返し、まだ小声で周りと話し合っている一同。先生もみんなの期待は理解しているようで、溜め息は一つ漏らしたが、それ以上の注意は別にしなかった。

そんなざわついた空気の中、闘技場に一人の青年が入ってきた。

「先生、こちらです。どうぞ」

「……は、はい」

上村先生が声をかけると、その青年は緊張した返事を返してから、ゆっくりとみんなのもとに歩いてくる。

「うわ……カッコ良くない？ あの人」

「本当……スラッとしてるし、イケメンだし……毛並みも綺麗。モデルみたい……」

女子の間で、そんな歓声が湧き上がっていく。そんな中、私達は先生を見た瞬間から動きを止めていた。

……その人は、すらっとした体躯の狼人。

どこか困っているようにも見える無愛想な表情。だが、その顔立ちは他の女子が言つとおり、異種族の私が見てもそれと分かるほど端正だ。

よく見れば、その細身には無駄無く洗練された筋肉がついている事が分かる。

短めに整えてある金髪が、銀色の毛並みとのコントラストを生み出し、光を受けて輝いている。

つまり……その青年は、私達の知る人物であった。

「……ガル？」

「だな、ガルだ」

「ああ、つまりガルが新しい先生って事が」

「そうだな。そして先生がガルって事で……」

……

「ええええええ！？」

「はああああ!?!」

「何iiiiiii!?!」

「何だつてええええ!?!」

私達の絶叫は混ざり合い、闘技場の中で反響していった。

8話 新米教師

「……瑠奈。それにみんな……このクラスだったのか。慎吾が楽しそうだった理由が分かった気がする……」

私達の存在に気付いたガルは、肩を竦ませてそんな事を呟いている。先ほどの絶叫と合わせて、クラス中が私達に注目を集めるが、私達にそれを気にする余裕は無かった。

「な……何で、どうして、どうやって!？」

「……それは、俺が一番聞きたい事だ……」

ガルの声には、どこか諦めに似た響きが混じっている。

「一つだけ言えるのは……特例、だそうだ」

「と……特例？」

「ああ。仕事が必要だった俺の事情と、闘技の教員が不足していた学校の事情から、急遽、採用してくれた……」

「……いや、確かにガルには仕事が必要だろうし、教員不足も事実なんだけど、そういう問題じゃなくて。」

「そ、そもそもお前、教員免許なんて持ってねえだろ!？」

「今は、な」

「今は、って……」

「……昨日、俺は慎吾に連れられて、色々なテストを受けさせられた。基本的な学力と、戦闘技術のな……慎吾によると、闘技の教員試験と同じものらしいが」

彼自身もあまり状況を飲み込めていないらしく、言葉の端々に自信が感じられない。

「そ、それで……？」

「結果は合格、だそうだ。……俺にも良く分からないが、すぐに働いても問題は無く、近日中に正式な教員免許も発行される、と慎吾が言っていた」

……お父さんって……何者なんだろう……

「コホン。クロスフィール先生、そろそろ良いでしょうか」

上村先生の咳払いで、私達は今が授業中である事を思い出す。ガルは慌てて先生に頭を下げた。

「も、申し訳ありません」

「いえ、事情は私も知っていますから……あなたも災難ですね」

上村先生の溜め息は、誰に向けられたものだろうか。

「綾瀬達も、気持ちは分かるが後にしろ。他のみんなは何も知らないんだからな」

「で、でも。先生……」

「疑問なら、後で綾瀬先生に問い詰めればいい。ひとまず、今だけは納得してくれ」

「……………」

恐らく、ここで何を言っても、何も変わらないのだろう。周りのみんなも、状況が飲み込めずに騒いでいる。

「……………分かりました。今だけ、何も言いません」

「そうか。助かるぞ」

納得した訳じゃない。でも、私達の事情で授業を邪魔する訳にもいかない。とりあえずはこの時間だけ、ガルが教師だと置いておこうと決める。コウ達も戸惑いながら、私に続いて頷いた。

……………うん。この順応の早さは、確実にお父さんのせいだ。

「では、クロスフィール先生。改めて、自己紹介をお願いします」

「はい。……………俺はガルフレアIIクロスフィールです。本日よりこの天海高校に新任となり、皆さんの闘技を担当させていただく事になりました。未熟者ではありますが……………よろしくお願いします」

意外なほどに流暢な敬語。本人は敬語を使われるのが苦手と言っていたけど、使うぶんには問題ないらしい。

挨拶が終わると、女子から再び歓声が上がった。当の本人は自覚

が無いのか、きょとんとしているけど。

それに合わせて、私達にも好奇の視線は注がれ続ける。もしも上村先生がいなかったら、質問ラッシュが始まりそうだ。

「先生には、今日から早速組み手に入っていたたくつもりです。今日の相手は……」

先生が言い終わる前に、あちこちからアピールの声が上がった。噂の新任教師の力が知りたいのはみんな一緒だろう。

ちなみに、私も例外では無かったりする。彼が教師云々は置いて、その実力を見てみたい。

「……ならば、今日は綾瀬にやってもらおうか。先生も知り合いのほうがりやすいだろう」

その決定に、手を上げていたメンバーがガツカリした、或いは抗議の声を出す、上村先生の「元気が有り余っているメンバーは、良ければ俺が相手するぞ？」との一言により静かになった。

「今日は自由組み手だ。相手を見つけた順に俺に言ってこい。いつも通り、10組までが最初のグループだぞ……ああ、それと。先生への質問は授業が終わってからにしろよ」

上村先生の号令に、みんなが思い思いに散っていく。私達は少し不安げな目でこっちを見ていたガルのもとに向かった。

「瑠奈……」

「何か事情は分からないけど、仕方ないでしょ。しっかり相手してよね、ガル？」

「……………ああ」

微笑んであげると、彼は少し安心したようだ。私だって、彼が一番困惑している事は分かっている。

「しっかし、凄え人だよなあ、慎吾先生も。どんな裏技使ったんだか」

「全くだよ……………予想の斜め上どころじゃないぞ」

「あの人は昔っからこうだけだな……………それよりも。分かってるよなあ、カイ？」

驚愕が通り過ぎ、さっきの事を思い出したのが、コウが黒い笑顔と共に、カイの肩をがっしりと掴む。

「ふう……………まあいいさ。気が済むまで相手してやろっじゃないか」

口では鬱陶しげに言いながら、カイも乗り気らしい。まあ、この二人はライバルだからね。

「さて……………なら俺はどうするかな？」

あ、そうか。レンが余っちゃうんだ。と言っても、レンの相手になる人なんてそうそういないし……………

「なら、僕がお相手しますよ、蓮」

不意に、後ろからかけられた声。

その主は犬人の青年で、クラスメートの一人。毛並みは明るいブラウン、少し長めの髪を後ろで結んでいる。

特徴と言えば、その160センチにも満たない身長。優しげな顔とあいまって、小学生や女の子と間違えられる事だつてあるらしい。

「……ルツカ。そうだな、そうするか」

彼の名前は、ルツカ。ファルクラム君。彼はレンの幼なじみであり、私達とも昔から面識がある。

誰にでも敬語を使う礼儀正しい性格で、その可愛らしい外見も含めて、クラスのマスコットの存在な子だ。

だけど、彼はこう見えて、私達と一緒に闘技大会の予選を通過した実力者でもある。

ルツカ君は、にこにこしながらガルの方を向く。

「クロスフィール先生、でしたよね？ 僕はルツカと言います。これからよろしくお願いしますね」

「ああ、よろしく」

ルツカ君の人懐っこい笑顔に、ガルも微笑みを返す。……あ。笑った顔、初めて見たかも。

「じゃあ、相手も決まった事だし、先生のところに行こうか」

「おう。さあ、今日こそ息の根を止めてやるぜ、カイ！」

「ひゅう、おつかねえの。けど、寝言は寝て言えよ。残念ながら、お前如きに負ける俺じゃねえぜ」

「お前には負け越しているからな。今日は勝たせてもらおう」

「こちらこそ、負ける気はありませんよ？」

それぞれが様々な思いを持ちつつ、私達は組み合わせを上村先生に伝えに向かった。

気のせいだろうか。

ルツカ君の、ガルを見る視線。私は、それが一瞬だけ……鋭くなつたのを、見た気がした。

9話 理の刃（前書き）

初戦闘シーン。模擬戦だけ。

弓とヒロインの能力の描写の難しさを思い知ったシーン………**修正版**
ですが、大して成長してなかったり。

9話 理の刃

早速ステージに降りた私達は、他のみんな（特にコウ達）と十分に距離をとってから、互いに向かい合う。

心なしか、クラス中の視線が集まっている気がする……まあ、ガルの事はみんな気になってるだろうし、仕方ないだろう。

私の装備は、動きを邪魔しない軽装の防具と弓。対するガルは、防具は同じく軽装だが、武器は何も持っていない。

「ガルって、格闘技を使うの？」

「昨日、色々な武器を使ってみたんだが、手に馴染むものが無かったんだ。どれも使えない事はなかったが、慣れない武器よりはこちらの方がしっくりくる。素手は戦いの基本だからな」

弓と格闘術。リーチでは圧倒的にこちらが有利。だけど、獣人は基本的に身体能力で人間に勝るから、油断は出来ない。懐に入られればそれで終わりだ。

「今後の為にも、今回は君の実力を確かめたい。最初は俺からは攻撃しないから、好きなだけ攻めてこい」

「ハンデって訳？ 私は構わないけど……こっちは最初から倒すつもりで行くよ？」

「俺は教員だからな。それに、そう簡単に倒せると思っているのか？」

ガルは不敵な笑みを浮かべてみせた。滅茶苦茶な手段とは言え、彼は闘技の教員試験に受かったのだ。弱いとは思えない。私は気を引き締め、弓を構えた。

「それじゃ、準備は良い？ ガル」

「ああ、いつでも大丈夫だ。好きなタイミングで始めてくれ」

ガルの表情は、真剣そのものだ。言葉通り、私の実力を見定めるつもりらしい。

私は息を吐くと、矢を弓につがえた。私だって……彼がそのつもりならば、本気を見せるだけだ。

「じゃあ……行くよ！」

その宣言と同時に、私はゴング代わりの矢を放った。

矢は、真っ直ぐにガルへと向かう。こう見えて、狙いの正確さには自信がある。だけど。

「甘いぞ！」

ガルはステップでそれを回避する。もちろん私だって、こんな簡単に終わってくれるとは思っていない。

間髪入れずに新たな矢を手にとると、立て続けに三発。狙いは完璧だったが、ガルは俊敏な身のこなしで難なく矢を受け流していく。

「狙いは正確だ。だが、攻めが素直すぎるぞ」

「しつ忠告どうも。でも、まだまだ！」

私はバックステップで距離をとりながら、連射する。素直に狙うだけじゃなく、フェイントを絡めたり、回避地点を予測したりして攻撃していく。

「そう、その調子だ。相手の動きを読み、回避しきれないような攻めを維持するんだ」

「けど、ガルはその全てを回避、或いは正確無比に叩き落としていく。……さすがに、強い！」

「なかなかの腕前だな。予想以上だ」

「全部避けながらそんな事言っても、嫌味にしか聞こえない……よ！」

私は攻め続けるが、ガルは全く当たってくれる気配が無い。それどころか、どう見てもまだ余裕が残っている。

駄目……このまま普通に攻めるだけじゃ、埒があかない。

……仕方ない。

彼が記憶を失ってて使えないんだから、ちょっとフェアじゃない気もするけど。実力差を認めるしか無い以上……

「……ガル。ここからは、全力で行くわ」

「！」

……使っただけだよ。私の『力』を。

私は精神を集中させる。自分の手に、この弓に、力が満ちるイメージを浮かべる。

ガルも私の雰囲気が変わった事を感じたのか、表情を変えた。

「見せてあげる……私の『本気』を！」

私は、強く矢を引き絞ると、彼目掛けて放つ。彼は警戒を強めながら、それを回避した。

そして、その矢は……ガルの背後で急に動きを変え、彼に再び襲いかかった。

「む……!?!」

さすがにこれには驚いたのか、ガルが声を上げる。でも、素直に当たってくれはせず、簡単に叩き落とされた。

「さすが。でも、まだ計算のうちだよ！」

次の攻撃は、二発。勿論、ただの攻撃ではない。

最初の一発を回避したガル目掛けて放たれた矢は、今までの矢の二倍近いスピードを持っていた。それも避けられてしまうが、ガルは初めて動揺を見せている。

私の力……私のPS。そのスキルネームは エンチャント・ウエボン 理の刃だ。

その効果は、媒体となる物質……基本的には武器に、私が念じた

さまざまな『現象』を宿す事。

例えば、『追跡』と言う現象を矢に宿せば、私が狙った相手に当たるまで、その矢は対象を追いかけられるようになる。

そのように、武器そのものに効果を発現させる事も出来るし、触れたら炎上など、当たった瞬間、相手に対して効果を及ぼす事も可能だ。

もちろん、強力なものほど難しいし、負担も大きいけど……私の鍛錬次第で、いくらでも応用の幅は広がるだろう、と言われていた。我ながら、凄くデタラメな力だ。だけど、これのおかげで、私はコウ達とも互角に戦ってきた。

「さあ、続けて行くよ！」

矢に宿す効果は、一本ごとに変える事が出来る。私はたたみかけのように矢を放ち続けた。

ガルに放った矢は、多種多様な軌道で彼に迫る。『追跡』の他、『高速』や、『フェイント』として、『減速』など。私は能力をフル活用して、強気の攻めを続けた。

正直、ここで決めるつもりだった。反撃の隙を与えるつもりは無かった。

………だけだ。

「成程な。随分と面白い能力だ」

最初は驚いていた様子のガルの動きが、徐々に冷静なものになっていく。攻撃が、当たらない。

………もう、この能力に対応されてきている………!?

「くっ……それなら！」

私は、矢をつがえずに弓を引いた。そして、能力の対象を矢から弓に移す。

この力で何を出来るかは、私の想像力次第。応用を利かせれば……

「こんなのは、どう!?!」

私が念じたのは『風』。それに応えるように、圧縮された空気が私の手に集う。

私はそれを、矢を撃ち出す要領で、ガルに放った。空気の矢は、拡散しながら彼に襲いかかる。

威力はそこまで高い訳じゃないけど、元が空気だけに見えないし、範囲も広い。これは回避出来ない筈……足を止めたところを一気に

「え……!?!」

そんな私の思考は、ガルがとった行動で見事に断ち切られた。

「能力の活用も、その年にしては上出来だな」

ガルは……跳んだ。

それも、3メートル近く、軽々と。

私は少しの間だけ、思わぬ回避方法に呆けてしまった。正気に戻り、慌てて空中の彼に矢を射るが、狙いが定まらずに、矢は彼を大きく外してしまった。

「だが、不測の事態には弱いな。……そろそろ、行かせてもらおうぞ」

「！」

着地したガルは、姿勢を低くすると……一気に駆け出した。

「くっ……ええいつ！」

私は何とか距離を空けようとバックステップをしつつ、迎撃の矢を放つ。だけど、ガルはそれを巧みに受け流しつつ、一気に接近してくる。速い……！

距離はあっという間に詰められていく。そして……ガルの姿が、私の目の前から消えた。

「……！！」

一瞬の混乱。そして、半ば反射的に、私の右側に回り込んでいたガルに向けて矢を放つ。至近距離ではあったけど、能力を使うどころか、狙いを定める事も出来ずに放った一撃。

「自棄の一撃など、喰らいはしない」

気が付いた時には、私の眼前に、ガルの拳が寸止めされていた。

私は数秒遅れて今の状況を理解する……負けちゃった、か。

「あーあ、いけると思ったのにな……」

残念そうに装ってみるが、本当は完敗すぎて悔しいという感覚もない。言ってみたのは何となく、だ。

「悪いが、そう簡単に負けてやる訳にもいかないからな」

ガルの表情は、どこか嬉しそうでもあった。

「それにしても、驚いたよ。まさか、ここまで強いなんてさ」

「驚いたのはこちらだ。学生だと思って油断していたぞ。一步違えば、俺の負けだったかもしれない」

「ふふ、ありがとう」

それはお世辞だったのかもしれないけど、実力を認めてくれた言葉が素直に嬉しくて、私は彼に微笑んだ。

「……さて、みんなはどうなったかな？」

私達は周りを見渡してみる。どうやら、コウ達とレン達の試合は終わっているようだ。

レン達は少し遠かったなので、私はとりあえずコウ達のもとへ向かう。コウがしょげているみたいだから、カイが勝ったみたいだ。

「ちつくしょう……これで負け越しかよ……」

「頭に血を上らせてっからだ。いつも以上に動きが単調だったぜ」

どうやら、意気込みが裏目に出ちゃったみたいだね。

「ほら、そんなにへこむんじゃないよ。疲れたし、授業終わったら飲み物でも買いに行こうぜ。特別に奢ってやるからよ」

「……おう。見てろよ、次は俺が勝つからな」

カイの声音は珍しく優しくげだ。この二人の場合、喧嘩するほど何とやらってところだろう。

一方のレン達の方に向かうと、レンは槍を杖替わりに、肩で息をしていた。フラフラで、立っているのも辛そうだ。

「ちょっと、レン……大丈夫？」

「……ああ、一応な……くっ……」

レンは頷いてみせたが、どう見ても大丈夫そうではない。今にも倒れそうな程に弱っている。

「何かあったの、ルツカ君？」

「僕がやりすぎた訳じゃありませんよ？ ……PSの使い過ぎですよ。僕は注意したんですけどね」

ルツカ君は苦笑と共に答える。彼はピンピンしている事から、試合に勝ったのはどうやら彼らしい。

「この位やらないと……お前には、勝てないと思ったからな……結局、負けてしまったけど……」

「だからって、体力を使い果たす事はないでしょう……ほら、掴まっつて」

「……悪い……」

ルツカ君はレンに肩を貸す。二人の身長差は20センチ以上あるので、少しアンバランスだ。

レンはルツカ君にもたれかかりながら、観戦席の方に戻っていった。大丈夫かな……？

「それにしても、レンがあそこまでやっても負けた、なんてね……」

「あのルツカという少年、外見によらず、かなりの使い手のようだな」

「うん。見た目は可愛らしいけど、多分、私達の中じゃ一番強いと思う」

レンだって、クラスじゃトップクラスの実力者だ。そんな彼の全力にも、ルツカ君は勝ったんだから。

大会では、強敵になるだろうな……

「あ、でも、外見の事は本人には言わないほうが良いよ。何だかんだで気にしてるみたいだし」

「……そうか、気を付けておく。……それにしても、あの少年は……」

「どっつかしたの？」

「……いや、何でもない。俺達も戻ろう、瑠奈」

「? うん……」

ガルには何か気になった事があるようだったが、本人から話さない以上、何となく聞かないほうがいい気がした。

「あ、それと……教員云々の話は、後でじっくりさせてもらおうよ?」

「う……」

ガルが尻尾を垂らした。その話題は辛いらしい。
クールな彼にはミスマッチなそんな姿に、私は思わず笑いをもらす。

「まあ、それはともかく……ガル!」

「何だ?」

「次は、絶対負けないからね」

ガルはその言葉に、一瞬だけ不意をつかれたような表情をしたが、やがて静かに微笑んだ。

「……臨むところだ」

あ、ガルの笑顔って、凄くかっこいいかも……なんて。

二限目の教室。

「……………」

「……………」

私は、目の前の状況に言葉を失っていた。

コウとカイも唾然としている（レンは保健室）……………何でなの？

何で……………

「つまり、ここにこの値が代入されるから、解は……………どうした、瑠奈？」

いや、どうした？　じゃなくて……………

「何でガルが数学教えてるのよ！？」

……………しかも、意外に分かりやすい……………って、問題なのはそこじゃなくて。

「……………数学の松井先生が出張になったらしく、代わりを頼まれた」

「いや、ガルの担当は闘技でしょ！？ 誰に頼まれたのよ！」

「……慎吾だ」

「……………」

お父さん……ガルを使って楽しんでない？ て言うか、ガルも遊ばれてる事に気付くって？

お父さん……きっちり説明してもらわないと、ね。

10話 届かない想い

昼休み。

私は職員室に向かう前に、保健室で休んでいるレンに顔を見せる事にした。

「大丈夫？ レン」

「何とかな。次の授業には戻ろうかなって思ってる……悪いな、心配かけたみたいで」

レンは笑顔を見せながら答える。ある程度は回復しているみたいだけど、実際はまだ少し辛そうだ。

あれだけフラフラだったんだから、仕方ないだろうけど。

「どうして倒れるまで無理したの？ 消耗が激しいのは自分が一番知ってるでしょ？」

「ああ……ただ、大会でもしこいつと当たったらって思うと、負けたくなくてさ。少し気負いすぎたみたいだ」

負けたくなかった、か。

「そういう負けず嫌いなところは、やっぱりレンも男の子だよな」

「やっぱりって何だよ……いいだろ？ 男として、強くありたいと思っただけさ」

「それはそうだけど、それで倒れちゃ意味ないでしょ？ 自分の限

界ぐらい把握しとかないと」

「う……今度から気を付けるよ」

さすがに返す言葉が無かったようで、きまり悪そうに鬘を弄るレ
ン。恥ずかしがってる時の、彼の癖だ。

「……なあ、ルナ。せっかくだし、聞きたい事があるんだけど」

「どうしたの？」

「ルナって、どうして大会に出ようと思ったんだ？」

「え？」

「いや……女子で大会への参加を目指すやつって、あんまりいない
だろ？ だから、ちょっと気になってさ」

大会に出る理由、か。確かに、ちゃんと話した事は無かったかも
しれない。

「そうだね……単純に、力試しだよ」

「力試し、か」

「うん。女だから戦えない、なんて事はないって証明したいし。私
だって……強くなりたいからね」

私は強くなりたい。武術だけじゃなく、心も。自分の力で、何と
でも戦えるくらいに。

何か困難があつた時、誰かに頼りつきりは嫌だ。女だからって理由で、男の人に甘えたくはない。

……そう。

私は、強くなるうって、あの時に決めただから……

「ルナ、どうした？」

「……え？ ああ、ごめん。少し、考え事しちゃってさ」

いけないいけない。これは、今考える事じゃないよね。

「ところで、そういうレンの理由は？」

「俺か？ 俺はまあ……お前と同じかな。自分の力を知り、上を目指す。大会は良い機会になるって、兄貴も言ってたしな」

「へえ。そう言えば修さんって、大会で優勝した事があるんだっけ？」

「ああ。兄貴はああ見えて、うんと小さな時から親父に武術を習ってたからな」

槍術の達人であるレンのお父さんは、武術は健全な青少年を育てるとの理念のもと、自分の道場を開いている。

道場はレンの家のすぐ近くにあり、レンと、彼の兄である修さんも、当然の如くその道場に通っている。

「レンだってそうじゃないの?」

「いや、俺は……小さい頃は、あまり道場に行ってなかったんだ」

「え、そうだったの?」

「ああ。まあ、体を動かすのはそこそこ好きだったし、たまに気晴らしに行っただけだけど、本格的に習ってた訳じゃなかった。親父も特に強制するような人じゃないからな」

「そうなんだ……何か、意外。昔から真剣にやってるイメージがあったから」

「はは。ちょうど、お前と知り合って少し経った頃から、真面目にやり始めたからな」

私と知り合った頃と言えば、確か、小学校四年生の時だ。

「どうして武術を習おうって思い始めたの?」

「単純に、もっと強くなりたいって思い始めたんだ。何かあった時、誰かを護れるようになりたかったからな」

「ふうん……でも、何かそう思うきっかけはあったんじゃないの?」

「……ま、まあ、一応な」

何だか微妙に口ごもったレン。私、何かおかしな事言ったかな?

「うーん……誰かを護りたいって思ったって事は、初恋の人でも出

来たとか？」

「！……！」

私が適当にそう言ってみると、レンは尻尾を逆立てて目を見開いた……どうやら、当たりだったらしい。

「……レンって、けっこう純情だよな」

「……いいい、いや、べ、別に、そんな事は……」

あたふたと、分かりやすいほどに慌てる獅子。彼に悪いと思いな
がらも、私はその姿に軽く吹き出してしまった。

「そこまで焦らなくてもいいじゃない。私は素敵な理由だと思うよ」
「……」

レンは気持ちを落ち着ける為か、軽く咳払いをする。もしも彼に
毛皮が無ければ、顔が真っ赤なのは想像に難くない。

よく考えたら、みんなの恋愛事情について聞く事は滅多に無い。
私は好奇心が強くなるのを感じた。

「今でも好きだったりするの、その子？」

「……まあ、な」

レンは観念したようにそう答える。右手はせわしなく鬣を弄って
いる。

「と言っても……俺はそいつに好きだと言った事は無いんだけどな」
「そうなの？」

「ああ。どうしても言えなくて……向こうは全く気付いてないみたいだからな。多分、俺の事はただの友達と考えるとと思う」

意外と素直に答えてくれるのは、半ば自棄になっているからだろ
うか。

「うーん……私はそういう経験があまり無いから何とも言えないけど、それなら言ったほうが良いんじゃないの？」

「簡単に言えたら苦労はしないさ。もし駄目だったら、友達としての関係もギクシャクしちゃうだろ？」

俺は臆病なんだよ、と彼は力無く笑う。

「それに、俺は正直、友達の間でも良いかと思っててもいるんだ。そいつが本当に好きになった人と一緒になったほうが良いんじゃないかってな」

「……でも、偉そうな事言っちゃうと、それって私には『逃げ』に感じるな。それに、それだと後で後悔するんじゃないかな」

「そうかもな。だけど、俺は本気であいつが好きだ。好きな奴がよ
り幸せになるのを願ってもいいだろう？」

本当に純愛ね。レンに好かれた人が羨ましいな……私もこのぐら
い誰かに好きになってほしい、なんてね。

「まあ、私かとやかく言う事じゃないけど……あ、ごめん。私、そろそろ行かないと。お父さんにいろいろ聞かないといけないから」

「……ああ、そうだったな。後で俺にも聞かせてくれよ?」

「うん、しっかり聞き出しておくから。じゃあ、レン。また後でね」

私はレンに手を振ると、保健室を後にした。

「11の……鈍感」

蓮の呟きが、瑠奈に届く事は無かった。

11話 明日から

職員室に着くと、目当ての人物はすぐに見つかった。

「……綾瀬先生、少し良いですか？」

さすがに学校ではお父さんと呼びづらいので、一応は敬語で、相手はと言つと、デスクワークをしながら、何一ついつもと変わらない様子で答える。

「どうした、瑠奈」

「どうしたもこうしたもありません……ガルフレア先生のことです」

横にある（昨日までの空白に無理矢理割り込んだ）机に座っていた銀狼は、びくつと肩をすくめた。

「ああ、その事か。なに、ちょうど闘技の担当を増やすべきだと話していた所だったし、ガルの仕事も出来る。一石二鳥だろう？」

「……本気で言ってるんですか、先生？」

「ああ、もちろん」

さも当たり前のように返す相手。若干声のトーンを落としながら、私は質問を続ける。

「……ねえ、綾瀬先生。教師になるにはどうしたらいいか、知ってます？」

「当然だ。なぜそんな事を聞く？」

「なら質問です。21歳で学歴不明の人は教師になれます？」

「なれないな」

「……じゃあもう一つ。それなら何でガルが教師になれるの？」

次第に私の口調は素に戻っていく。お父さんかというと、考えているようなポーズをしばらくとった後（たぶん何も考えてない）、こう答えた。

「大人には、いろんな手段があるんだ」

「……………」

朝からの一連の出来事でパンク寸前の頭に、その言葉がトドメをさした。

私は睨みをきかせると、お父さんの机に思いつ切り手を叩きつける。凄くいい音が辺りに響いた。

「……ねえ、真面目に答えて。いろんな手段ってどついついこと？」

「溜……溜奈？」

私の様子にガルはうるたえている。が、肝心のお父さんは全くこたえていない。

「何を怒ってるんだ。別に違法な事はしてない、安心しろ」

「じゃあ、何をしたらこんな常識では考えられない事が可能なの！？」

「瑠奈。常識にとらわれていては見えないものもあるぞ」

「何でちょっとかつこよく決めようとしてるの！？ お父さんはむしろもっと常識にとらわれて！」

「あー、クロスフィール先生。六限の全校集会でのごとお話があるので、こちらに……」

「……分かりました」

私達のやりとりを可哀想なぐらい小さくなって見ていたガルに、その様子を不憫に思ったのか、上村先生が助け舟を出した。それでも私達のバトルは続く。

「一万歩譲っても、研修生辺りからのスタートでしょ！？ どんなショートカットをしたら、いきなり教師になれるのよ！」

「研修生では金にならんだろう」

「いや、確かにそうだし、ガルにはお金が必要なのもわかるけど！ それなら、何で教師なんて無茶をするの！？」

「そのほうが面白……俺が近くにいられたほうがいいだろう？」

「ねえ、今チラッと本音出たよね！？ 遊びで法律を犯すつもり！？」

「失敬な。違法ではないと言っているだろう」

「それなら、それをちゃんと説明しろって言ってるの！」

「答えているだろう。大人にはいろんな手段があると」

「答えになってない！」

そんないつまで続くか分からない不毛な争いを、他の先生たちは苦笑いで見ていた。そんな時……

「おい、何やってんだよ、瑠奈に父さ……綾瀬先生」

私の後ろから、第三者の声が割り込んだ。振り返ると、そこには怪訝な表情の黒狼が立っていた。

「暁斗……ちょうど良かった、手伝って！」

「暁斗、瑠奈を連れていってくれないか？ 小遣い上げてやるぞ」

「あつ、ズルい！」

高校生にとって、小遣いアップの魅力は大きい。暁斗は一瞬だけその誘惑に負けそうになっていたが、首を振って欲望を鎮めている。

「ちよつと待てよ！ いきなり何のことだ？ 全く状況が飲み込めねえんだけど」

突然巻き込まれた暁斗は、当然ながらあたふたしている。でも、

私にも説明できる余裕はなかった。

「私だって飲み込めてないのよ……」

「はあ？」

「一つだけ言えるのは、全ての元凶はこの人ってこと！」

私は机に座って面倒そうにしている父を指差す。

「元凶とは人聞きが悪い。彼の扱いがそんなに不満か？」

「いや、不満って言うか……何度も言うけど、常識的にありえないでしょ!？」

「人を巻き込んでいて二人だけで話を進めんなよ！ 分かりやすく説明しろ！」

学校なのに家族喧嘩が始まりかけたその時。

「……すまない。俺のせいなんだ」

安全圏に避難していたものの、さすがに自分のことから逃げる訳にはいかないと判断したのか、ガルが戻ってきた。

「ガル？ 何で学校にいるんだよ……」

暁斗は本格的に怪訝な表情だ。どうやら彼は、まだ何も聞いていないらしい。真実を知らない暁斗にとって、ガルが学校にいること自体が謎だろう。

「ガルは悪くないよ……て言うか、一番の被害者じゃないの」

「しかし、慎吾は俺の為に……」

「違うわ。絶対違う。100%ありえない。この人はただ楽しんでるだけ」

私は全力で首を横に振る。

「お前は父親を何だと思っているんだ、瑠奈」

「とりあえず、非常識だとは思ってるよ」

私達のやりとりが進めば進むほど、暁斗は混乱していつているよ
うだ。

「結局、何があっただよ？」

「そつだな……暁斗には前もって紹介しておこう」

カミングアウトを前に、ガルの表情は強張り、お父さんは明らかに面白がっている。

「彼、ガルフレアックロスフィールは、本日をもって我が天海高校の『教師』となった」

瞬間、暁斗の動きがフリーズした。

まるで壊れたビデオのように、数秒ほど彼は微動だにしなかった。

そして……

「何だとおおおおッ!?!」

フリーズ解除と同時に、黒狼の凄まじい絶叫が職員室に響いた。

「……うん、それが正常なアクションだね。私達の反応が正しいんだよね」

ずっとお父さんと話していたせいか、自分の常識に自信を失いかけていた私は、仲間を得た安堵を覚える。

無論、暁斗の冷静さは世界の果てまで吹き飛んでいる。

「な、何で、どうして、どうやって!?!」

「……先程も同じ事を言われたが……特例、らしい」

「特例って何だよ! 第一、教員免許とかは!?!」

「……近日中に発行される」

「何だよ!?! 偽造か、偽造なのか!?!」

暁斗の勢いにさすがのガルもしどろもどろになってしまっているので、お父さんが割り込む。

「ああ、それなら心配するな。俺が然るべき手段で本物を発行させるようにしてやった」

「然るべき手段って何!?!」

「合法じゃねえだろ絶対！ 嫌だぞ、身内から犯罪者が出るのは！」

「安心しろ、警察にもコネはある」

『安心できるかあッ！！』

私と暁斗のツツコミが見事に重なった。

「最後のは冗談だ。先ほどから言うように、違法なことはしていない。法の隙間を突くことなど、楽勝だ」

「……ねえ、お父さん。お願いだから、捕まる時は周りを巻き込まないでね」

「……左に同じ」

そういえば、他の先生も事情は知ってるんだっけ。学校ぐるみの犯罪？ ……まさか、ね。

「まあ、遊ぶのはこのぐらいにしておくか」

お父さんは満足げに言う……我が親ながら、人としてどうなんだろう、この人？

「誤解してもらっても困るが、いくら俺でも遊び心だけで人を教師に仕立てようとは思わない。色々と面倒だからな」

「……色々突っ込みたい所があるんだけど」

「瑠奈、お前なら分かるはずだ。ガルには教師としての適性がなかったか？」

「……そう言われると、否定は出来ないけど……」

戦闘技術にしても凄い腕だし、学力にも問題はなさそうだった。生徒への気配りもしていた。

何より、ガルは思っていた以上にカリスマ性がある。生徒の支持を集められると言うのは、ある意味では教師として最も重要な力だと思う。

それだけを置けば、確かに教師としての適性があると言っていいかもしれない。

一方、暁斗は「はつきり言って、全く想像できねえ」と言っている。それも当然だと思っけど。

「そもそも、記憶ねえ奴が人に教えられるもんなのか？ ……あ…

…」

そう口にした暁斗の表情が強張った。たぶん軽率だったと思ったのだろう、その証拠に、他の人が口を開く前に彼は頭を下げた。

「……悪い」

「気にするな。当然の疑問だ」

ガルは本気で気にしてないようだけど、だからこそ暁斗は居心地悪そうにしている。でも、考えてみれば確かに疑問だ。

「俺には確かに『記憶』は無い。だが、『知識』はほとんど消えて

いないんだ」

「……どういう事？」

「そうだな……例えば俺が雪について忘れていたとしよう。その場合、俺の中には『雪は白く冷たい氷の粒』という『知識』はある。しかし、実際に触れ合った『記憶』が残されていないから、あくまでも雪について『知っている』だけなんだ」

さっきの数学から思っていたが、説明も割と上手い。

「つまり、本とかテレビで見たことある、ってのと同じってことが」

「感覚的には似ているな。まあ、どちらかと言うと映像が入らない分、本のほうが近い」

「つまり、勉強とかそっちのほうは、記憶を失う前そのままって事？」

「ああ……と言っても、記憶を失う前の自分がどんなものか分からない以上、憶測の域は出ないがな」

なるほどね……数学をちゃんと教えられる訳だ。

ともかく、学力とかに関して、ガルは確かに問題ない……それは認めてもいい。

「でも、だからと言っていきなり授業に来られても困るよ……普通、最初は全校集会とかで紹介するでしょ？」

まあ、それだったら困らない、と言う訳ではないけど。いろいろ

と飛び越えすぎだ。

「あ、まさか今日の六限の集会って……」

「ああ、彼の紹介だ。まあ、1-3（私のクラス）に行かせたのは遊び……もとい、研修のようなものだ」

「……今更だけど、あんたよくクビにならないな」

我が親ながら、この人の底は全く知れない。

と、気が付くと昼休みも残り僅かとなっていた。

「さて、そろそろ時間だ。行くぞガル」

「……分かった」

「待って。何でガルを連れて行くの？」

「研修は一時間では足りんだろう」

二時間でも足りない……じゃなくて、つまり他のクラスでも遊ぶつもりだ、と。

まあ、他のクラスにはガルを知っている人いないし、問題は起こらないだろうけど……

……あ。

「ねえ、ガル……次はどのクラスの授業？」

「確か……2・1だと聞いている」

『……………』

予想通りの返答に、私と暁斗は顔を見合わせる。

2・1はお父さんのクラスである。そして……暁斗のクラスでもある。

「遅れないようにしろよ、暁斗。ガルの相手はお前にしてもらったもりだからな」

「何!？」

「…………マジかよ」

状況を把握したらしいガルも声を上げる。

「では、行くぞ。また後でな、暁斗。ふふふ…………」

「ま、待て、慎吾! ……ふう。すまない、暁斗…………」

やたら楽しそうなお父さんが去っていくと、ガルも慌ててそれを追う。最後に残した溜め息は、凄く疲れた響きを持っていた。

…………あ、何だろう。この果てしない脱力感は…………

「…………ねえ、暁斗。状況飲み込めた?」

「…………悪い。俺には到底理解出来そうにねえ」

「教師って……一日でなれるものなのかな？」

「考えるな……あの人を常識で考えるのは無理だ」

「常識って……何なんだろうね？」

「自分を見失うな瑠奈……俺達のほうが正しい。そう信じる……」

今日は何だか、お父さんに振り回されまくった気がする……

「……ふう」

晩ご飯を食べ終わった後、私の部屋には暁斗とガルが集まっていた。

「だいぶ疲れてるみたいだな」

「だろうね。集会の後とか、みんなに囲まれてたし」

予想はしてたけど、女生徒からの反応は凄まじく、質問攻めに遭

った彼は、見ての通りに疲れ果てている。

「騒がしいのは……嫌いじゃないが、苦手だ」

ガルはそう言って、もう一つ溜め息。

「すまなかったな、お前達。こんな事になってしまって、迷惑だっただろう」

「あ、いや……ガルが謝る事無いって。むしろ大変なのはガルのほうでしょ？」

お父さんの遊び心のせいで、教師なんて仕事をさせられる事になったんだから。

「それに、さつきは騒いだけど、別にガルが先生になったから困って訳じゃないんだよ？　ただ、私達はガルの事情を知ってるから、いろいろと心配なだけでさ」

「……そうか」

もちろん、家に帰ってきたお父さんには更にいろいろ問い詰めてみたが、「大人にはいろいろな手段が（以下略）」でひたすらに逃げるし……とりあえず、本人の言葉通り、法には触れてない事を祈ろう。

「いずれにせよ、こうなった以上、しばらくは教師としてやってくしかねえんだろ？　だったら、いっそ割り切っちゃったほうが良いぜ。お前には今日のリベンジもしなきゃいけないしな」

「あ、そう言えば、暁斗も戦ったんだよね」

「おう。ま、ボロ負けだったけどよ」

「ふ。瑠奈も暁斗も、リベンジはいつでも受け付けてやるさ」

暁斗の強さは知ってるけど、彼でも負けたんだ。さすがと言っ
かないだろう。

「けど、ガルって意外と教師としてハマってたよね」

「だよな。案外、天職なんじゃねえか？」

「……そうだな。少なくとも、俺自身はそれなりにやりがいを感じ
ていた。記憶が戻っても、ここで働き続けるのも良いかもしれな
い」

「ふふ。私は、そうなってくれたら嬉しいかな」

「俺も。目標があったほうが張り合いがあるしな」

「……真剣に考えておくよ」

ガルは静かに微笑む。出逢った初日の固さは、だいぶ取れてきた
気がする。

「そうだ、瑠奈、暁斗。お前達には、ちゃんと礼を言っていなかつ
たな」

「礼？」

「そうだ。見ず知らずの俺に、手を差し伸べてくれた礼だ」

「ああ、そんな事？ 気にしないでいいよ。実際にいろいろやったのはお父さんなんだし」

私がそう言うと、ガルは少しだけ目を伏せた。

「そんな事、か。この国ではそうかもしれない。だが……俺が生きてきた世界では、そうではなかったんだ」

……確か、ガルは孤児だったって言ってたっけ。

「俺に残る微かな記憶……そのほとんどは、地獄の思い出だ。はつきりと思い出す事は出来ないが、それこそ、いつその記憶も捨て去ってしまいたい程に」

「ガル……」

「自分一人で生き延びなければならぬ世界……もつとも、途中で孤児院に拾われたようだから、俺はまだ幸せなんだろうが、な」

辛い時も優しさに触れる事が出来ない世界。彼は、そんな世界で生きてきたというのだろうか。

「つまり、その……お前達が俺に優しくしてくれた事は、俺には凄く嬉しかったんだ。例え、お前達には当たり前前の行動だったとしても」

「ガル、お前……」

「だから、言わせてくれ……ありがとう」

深々と頭を下げるガル。その一言に込められた気持ちは、凄く重い。

「そして……改めて、これからもよろしく、瑠奈、暁斗」

彼は再び笑顔を浮かべた。彼と出逢ってから、一番柔らかく、とても優しい笑み。

優しさとは無縁な世界で生きてきた彼。それでも、そんな彼はとても優しくて。

「……うん。明日からもよろしく、ガルフレア！」

「思った以上に深い付き合いになりそうだな……よろしくな、ガル」

私達は、この時……本当の意味で打ち解けられた気がした。

この後、私達の話し声はとても遅くまで続いた。

不思議な出逢いから始まった、明日からの新しい日常への期待を抱いて……

間幕2 重なる歯車

昼過ぎの街中を、黒豹人、そして青虎人が歩いていた。

二人とも武装をしている事から、この二人がこの国の住民でない事は容易に想像出来た。治安の良いエルリアでは、武器の携帯は禁じられてはいないものの、こうして実際に武装した人物は極めて稀なのだ。

「……………良い国だな」

辺りの街中を眺め、黒豹がぼつりと呟く。青虎もそれに頷いた。

「ああ。全ての人の平穏と平等……………この国にはそれがある」

「まさしく、この国は俺達の理想に近いと言えるな」

俺達の理想。その言葉を聞いた青虎は、どこか悲しげな顔をする。

「俺達の理想……………何故『奴』は、あんな事を……………」

「……………さて、な」

しばし、二人は沈黙する。そして

「……………シグルド」

「どうした？」

「奴を逃がしたのは……お前だろうか？」

黒豹の試すような質問に、青虎人……シグルドの表情が僅かに険しくなる。

「もし、そうだとしたらどうするつもりだ？ フェリオ」

「別にどうもしない。そういきり立つな……お前ならそうする事ぐらい、予想していたからな」

フェリオと呼ばれた黒豹は肩をすくめてみせた。

「バレる事は分かっていた。極刑も覚悟していたんだがな……」

実際のところ、シグルドには何の罰も無かった。それは安堵する事なのかもしれないが、本人は肩すかしを喰らったような気分であった。

「はつきりとした証拠が無いからだろう。お前が自分から報告しない限り、刑を受ける事は無い筈だ」

「……つまり、上は分かっている揉み消している、と言う事が」

「そういう事だ。今、お前にまで抜けられる訳にはいかないからな。それに、奴一人ではどうすることも出来んだろう、と言うのが上の判断らしい」

「……付け加えて言うなら、あの装置の欠点のせいだろうな。今の奴には文字通り、何も無い」

「だからこそ、組織も奴を躍起になって探す気は無いのだろう。それにしても……『銀月を見つけた場合、各々の判断に任せる』と来たものだ」

フェリオは自らが受けた指令に、少し疑問がある様子だった。

「本来なら、裏切り者は見つけ次第に排除すべき……だが、これではまるで、奴を泳がせると言わんばかりだ」

「さて、な。我らの指導者には、どんな企みがあるのか……」

「……………」

再びの沈黙。そして、今度はシグルドがそれを破った。

「フェル……お前は、もし奴を見つけたらどうするつもりだ？」

「……邪魔になるようなら、消す。奴の為に俺達の理想を終わらせるつもりは無い」

フェリオの言葉に偽りがない事を、シグルドは知っている。障害になるのならば、昨日までの友を殺す事もやっつてのけるほど彼の『理想』への執着心は強い事を。

「ならば、お前はどうかんだ？ シグ」

シグルドは暫く目を閉じた。思い浮かべるのは、一人の男の顔。つい先日まで、友と呼んでいた筈の。

「……二度は迷わない。奴が障害となったその時には……」

その言葉は、フェリオには無く、自分に言い聞かせるような響きを持っていた。

「その時は、俺はシグルドでは無く、蒼天として……奴を、殺す。この手で、な」

「……そうか」

フェリオも、それ以上の追求をしようとはしなかった。

「では、俺はこのまま目的地に向かうが、シグはどうする？」

「俺は、少し奴の学校に寄っていこう。奴と合流して、その後に向かう」

「……そうか、この近くだったな。あまり遅れるなよ」

「……フェル！」

立ち去ろうとしたフェリオを、シグルドが呼び止める。

「全ては……理想の実現の為。俺のその思いには、偽りは無い……それだけは信じてくれ」

「……分かっている。俺だって、奴を殺すことなど、できる限り避けたいと思うからな」

組織への忠誠心が本物であっても、決してためらいが無い訳では

ない。

「だから心配するな。俺は、お前の忠誠心を疑ってなどいない」

「……すまない」

「そんな顔をするな。友を信頼するのは……当然だ」

感情論を好まない友人の慰め。その珍しい言葉が、シグルドの表情を緩ませた。

「それでいい。では、また後でな……遅れるなよ」

そう言い残すと、フェリオは人混みの中へ消えていった。

彼の言葉が思っていた以上に支えとなったようで、シグルドの表情は少しだけ明るくなっていった。もっとも、素の表情が素の表情なので、実際はかなり仏頂面に映るのだが。

「やて……ん？」

目的地に向かおうとした彼は、目当ての人物が向こうから走ってくるのを見て、足を止める。

「やっぱり……シグルドさん！」

前方から聞こえてくる元気な声。それは間違いなく、あの時にいた少年だった。

「もう終わったのか？」

「ええ、少しいろいろとイベントがあったせいで、課外も中止になったから……ラッキーですよ、今日は」

「そうか……ふふ」

少年はピコピコと尻尾を揺らす。まるで玩具のような可愛らしい動きに、シグルドの口元もほころんだ。が。

「うわ……シグルドさんが笑うなんて。もしかして、明日大雪でも降るんじゃない？」

少年が一言多かったので、一瞬でシグルドの眉間に力が入った。

「……お望みなら降らしてやるが？」

「う。だ、ダメですよ。あなたがやったら猛吹雪になるでしょう？」

「心配するな、お前だけ巻き込む事など簡単だ」

「ち、ちよっと……怒らないで下さいよ、冗談ですって。シャレになりませんから、あなたの場合」

必死に弁解する少年に、シグルドは溜め息をついた。

「……全く。お前が俺と同じ立場だと誰が思う？」

「あ、酷いなあ。これでも、今日だって闘技の授業で勝ったんですよ？」

「それは当然だ。お前の実力は俺と同等なんだぞ……ルツカ」

薄茶色の毛並みを持ち、少女のように小柄な体格の少年。

彼は、紛れもなくルツカⅡファルクラムであった。

「それは言い過ぎですよ。僕とシグルドさんが模擬戦をやって、僕が勝った事は無いじゃないですか」

「それはあくまで経験の差だ。お前と俺が同じ年なら、お前のほうが強かっただろう」

「もう、将来のハードル上げないで下さいよ。それに、僕だって同級生に負けちゃう事もあるんですよ」

「そうなのか？」

「ええ。もちろん、多少は手を抜いてますがね……そうだ、闘技で思い出した。シグルドさんにお願ひがあるんです」

「何だ、藪から棒に」

「いえ、ね。ちょうど良かった……シグルドさんだけに頼みたい事でしたから」

訝しげな表情をするシグルドに、ニコニコしながらルツカは告げた。

「来月の闘技大会に、来てくれませんか？」

運命の歯車は、当人達の知らない所で複雑に重なり、動き始めていた。

12話 前日 〈少女と銀狼〉

私達とガルが出逢い、約一ヶ月が過ぎた。

最初はどうなることかと思っただけど、意外にも何のトラブルも起きず、ガルは普通に私達の先生をしている。

学校で、そして家で一緒に生活するうち、私達はどんどん仲良くなっていた。残念なことに、記憶は全く戻っていないらしいけど。

そして今、私達は

「……………瑠奈」

「ん、なに？」

「そろそろ止めたほうが良い。明日に影響が出るぞ」

「そんなこと言って、勝ち逃げするつもり？ 今日こそ勝ってみせるんだから！」

私とガルは、特別に開放された闘技場で試合をしていた。土曜日だから、時間はたっぷりある。

……………戦績？ 10戦10敗だけど？

「気持ちは分からないでもないが……………明日は大会だ。ベストコンディションを維持しないといけないだろう」

そう、明日はついに闘技大会。今日、闘技場が開放されているのもそのためだ。

「分かったよ……勝って景気付けしたかったのに」

あれ以来、ガルとは何回も戦ったけど、一度も勝った事は無い。と言うか、ガルが誰かに負けたのを見た事が無い。

「だが、始めて試合をしてからひと月……俺の動きにも、だいぶついて来るようになったな」

「そりゃまあ、私だって負けっぱなしは癪だし。……まあ、あなたが私に合わせてくれてるから、つてのが大きいけどね」

「ふ。それが分かっているなら、上出来だ」

ガルは相手に合わせてしっかりと手加減してくれる。次に何をすべきなのか、言葉にせずに導いてくれるような試合をするのだ。ガルのおかげで、私はかなり成長出来たと思う。

「さて……でも、今から帰っても、時間が余っちゃうね」

「そうだな。何かやりたい事があるならば、今日は付き合っても良いぞ」

明日に備えて体を休めるのも良いんだけど、せっかくガルも休みなんだし、何だかもつたない気がした。

「んー……よし！ なら、とりあえず街に出ようよー！」

「買い物か？」

「うん。実は、前から欲しいものがあったさ。景気付けに買おうか
なってる」

それは半分は建て前だった。私の目的は、ガルを連れ出す事。実は、今日は最初から彼と街に出るつもりだったのだ。彼から切り出してきた事で、少し予定が早まったけど。

「分かった。ならば、早速行くとするか」

「うん！」

私は秘めた思惑を隠しつつ、元気良く彼に返事をした。

と、言う訳で。

私達は、学校の近くの商店街にやって来ていた。辺りには多種多様な店が建ち並び、週末という事もあって、活気に溢れている。

余談だけど、闘技大会の時は、商店街も稼ぎ時だと、この辺で働

いている知り合いが言っていた。明日以降は更に活気で溢れる事だろう。

「考えてみたら、こうして二人っきりで出かけるのって、初めてだね」

今日は仕事では無かったので、ガルは普通にラフな格好だ。

「そうだな……慎吾がフォローしてくれてはいるが、俺にはあまり自由時間を作る余裕など無いからな」

「……ま、元を辿ればお父さんのせいなんだけど」

もうひと月が経ったわけで、今さら突っ込む気はないけど、まだ完璧に納得した訳ではない。

「ところで、買いたい物とは何なんだ？」

「んー、それよりも、ガルはどこに行きたい？」

「俺が……？」

「すぐにその店に行っておしまい、じゃつまんないし。せっかくだから、ガルも欲しい物を買ったりしなよ」

「……そうか。ならば……」

しばらく考えてから、少しためらいがちにガルは言う。

「本屋に……行ってもいいか？」

「本屋？」

「ああ。家にあった本は、あらかた読んでしまったからな」

そういえばガル、家にいる時は、よく本を読んでいた気がする。

「ガル、本好きなの？」

「ああ……どうも俺は、孤児院にいた時から本ばかり読んでいたらしい。他に娯楽と言う娯楽も無かったからな……うっすらと、そんな記憶がある」

……孤児院、か。

ガルの記憶は戻ってないけど、彼が覚えている範囲の事だけで、彼が辛い境遇にあった事は何となく感じる。

もしも私だったら……親の力無しで、生きていけたのだろうか？

私には、想像も出来ない。

「……他の子供達と遊んだりもしていたようだがな。孤児院で暮らした日々には、嫌な思い出が無いみたいなんだ」

私の様子を見てか、ガルがそう付け足す。

「俺の知識の大半は本で身につけたものだ。孤児院に数学の本などもあつたみたいだからな」

「ああ、だから頭いいんだ。確か、知識はそのまま残ってるのよね？」

「ああ。と言つても、記憶のある段階……つまり、孤児院にいた段階で基礎レベルの数学なら理解していたようだが」

「……わあ。恐るべし、読書家軍団」

「……軍団？」

私の批評に首を傾げるガル。カイも小学校の時から高校レベルの問題解いてたんだよね……

「まあ、それはさておき……とにかく本屋でいいのね？」

「ああ……すまないな」

「いちいち謝らないの。私も本は好きだし」

「それなら良いが……」

ガルの謝罪癖は、恐らく自分が周りに迷惑ばかりかけていると思つているからだろう。

「それでも最初よりは減つただけだね。まだガルの中にはどこか『壁』がある。たぶん、本人の無意識のうちに。」

だから、私は今日、それを砕くつもり。

「ね、ガル。右手伸ばしてみて？」

「……なぜだ？」

私の唐突な提案に、訝しげな顔になるガル。

「特に理由はないわ。いいから、ね？」

「……分かった」

一瞬だけ迷ったようだが、それほど間をおかずに私の言う通りに手を伸ばすガル。

「これでいいか？」

「うん。それじゃ……」

「ん……？」

私は飛びつきりの笑顔のままガルに近づき……おもむろにその手を握った。

ガルはまだどういう事なのか理解していないようで、首を傾げている。

「何を……」

「手をつないで歩こうって事」

「……なぜ？」

「デートなんだから当然でしょ？」

「……！」

その言葉を聞いたガルの反応は凄まじいもので、全身を硬直させ

て目を見開き、加えて尻尾は直立している。この前のレンみたいだ。

「デ、デ……な、何を言い出すんだ、いきなり！」

ガルは柄にもなく慌て、声を荒げている。

「うわあ……本当に免疫ないのね」

この手の話、苦手そうとは思ってたけど……予想以上みたい。

「間違ってるじゃないでしょ？若い男女と一緒に街を歩くんだから」

「うっ！？い、いや、しかしだな……」

普段の冷静沈着さはどこへやら、完全にしどろもどろになっていく銀狼。ごめん、ガル。恥ずかしいんだろうけど……凄く可愛い。

「せっかくなんだから、今日はしっかり付き合ってよ？ガル」

「む、むっ……」

押されると弱いみたいで、ガルはそれ以上の反論を諦めたようだ。私はここぞとばかりに体を寄せる。

「意識しすぎないでね？初めて会った時の握手と同じと試してみ
て」

「……誰が意識させたんだ！」

結局、本屋に着くまで、ガルはずっとガチガチだった。

で、本屋に入って一時間後。

「ガル、随分買ったね……」

「すまない。だが、次はいつ来れるか分からないからな」

そう言う彼の顔は満足げだ……まあ、10冊近く買えば満足もするだろう。

その内容はでたらめで、エッセイから小説、雑学本にマンガまである。

「ガルってマンガ読むんだ……」

「おかしいか？ 暁斗のものを借りて面白かったからな」

なんかイメージ的には哲学とかしか読まないかなって思ってたから、意外だ。カイと気が合いそうね。

「じゃ、次は私の買い物に付き合ってもらおうよ？」

「ああ、もちろん……ただ、その……手をつなぐのは……」

「えー、ガルの反応、面白いのに」

「……勘弁してくれ」

本気で恥ずかしいみたいだ。ウブにもほどがあるなあ……

「ま、いいか。じゃ、行きましょ？」

「……ああ」

嫌がるのを無理強いする気もないので、私達はそのまま次の目的地へと向かう。

と言つても、目当ての店は、丁度良く本屋のすぐそばだ。私はあの店の前で足を止めた。

「瑠奈、ここは？」

「アクセサリーショップだよ」

「……やはり瑠奈も女の子だったん」

「やはりって何？」

「！？ ……い、いや、深い意味はない……すまない（な、何だ？
今、死神が……）」

「ま、いいや。さっさと入ろう？」

「あ、ああ……（……瑠奈を怒らせてはいけないようだ）」

命の危険を感じ取り、ガルは尻尾を丸くしたままついてくる。

自動ドアの機械的な音と共に開かれた先には、これでもかというほど、びっしりとさまざまなアクセサリーが置かれていた。

「うーん、やっぱりデパートの小物屋とはワケが違うね」

「そうだな」

ガルも多少は興味があるようで、辺りを見渡している。

「欲しいものは決まっているんだらう?」

「うん。でも、いろいろ見て回らう?」

「ああ」

私達は店の中を回り始める。指輪、ネックレス、ブローチ……中には大量の宝石があしらわれた、目が飛び出しそうな値段のものもある……こんなの、誰が買うのよ。

「……………目がチカチカする」

「本当だよね」

適当に見ながら店内を歩いていく私達。そして、ある地点で私は足を止める。

「あつた。これこれ」

私は商品の中から一つを取り出す。

「月長石の……首飾りか」

「うん。丁度いいかなって思って。私の名前って、月にちなんだものだし」

私を取り出したものは、チェーンの先にムーンストーンが取り付けてある首飾りだ。

「金は足りてるのか？」

「うん。コツコツ貯めてたからね」

比較的安価なものが使われているらしく、私の小遣いでも普通に届く額だ。

「すまないな。こう言う時は俺が買ってやるのが筋なんだろうが…

…」

「気にしないの。初任給も降りてないんだから……少しの小遣いぐらい、自分のために使いなよ」

「……すまない」

「だから謝らないでって……」

「こういうところ、変に律儀だよね……教養があるって言うか。

……それと、謝罪癖は元からの性格なのかもしれない。

店を出ると、すでに空は暗くなり始めていた。

「だいぶ遅くなったな……」

「そうだね」

「では、そろそろ帰るか？」

ガルの言葉に、私は首を横に降る。

「それなんだけど……もう一ヶ所寄ってもいいかな？」

「……まだ買う物があるのか？」

「違うよ。ただ、どうしても行きたい場所があるんだ」

そう。どうしても、ガルを連れて行きたい場所が。

「俺は別に構わない。ただ、連絡はしておけよ」

「うん」

こうして私達は、今日の本当の目的地……街外れのとある場所へ向かった。

そこに着いた時には、時刻は夜の6時半を過ぎていた。時期が時期ってのもあるけど、空は既に真っ暗だ。

「変わらないね、ここだけは」

「瑠奈、ここは？」

「私達の秘密基地」

「秘密基地？」

「そ。まあ、子供の時の、だけどね」

私は生い茂る木々の間を、ガルと並んで歩く。

「コウト、カイと、レンと、暁斗と私……みんなでいつもここを隠れ家にしてた。って言っても、お父さん達も知ってたんだけどね、この事は」

私の説明を聞きながら、ガルは辺りを見渡している。

「ここは自然が残ってるから、子供の隠れ家にはうってつけでしょっ」

「……そうだな」

微かに笑っているガルには、あの時の私達の姿が想像出来ているのだろう。

「さすがにここで遊んだのは小学生までだけど、今でもたまに来るんだ。自然を感じたくなった時とか……夜空を見たくなった時に」

私達は空を見上げる。都会から見るとは違う、満天の星空がそこにあった。

「……月が綺麗だな」

「そうね」

ちょうどよく、今日の空は澄み切っていた。

「ここは、私の原点なの」

「原点……か」

「だから、明日の願掛けをしたかったんだ。ガルにこの空を見せたかったのもあるしね」

「……瑠奈」

私とガルは互いに見つめ合い、笑う。

「瑠奈はやれる。俺が保証してやるさ」

「ありがと。コーチにそう言ってもらえたら、自信がつくわ」

ガルの言葉には、不思議な説得力がある。それは、彼の純粹さ故だろう。

そんな彼をここに呼んだのは、彼にこの景色を見てもらいたかったのと、それから……

「……ね、ガル。頭を近づけて？」

「む………今度は何だ？」

さっきの事があるためだろう、彼は若干身構える。

「今度は何もしないって。ね？」

「……分かった」

しびしびといった感じだが、言われた通りにするガル。

「うん、それじゃ……」

私の手が彼へと伸ばされ、彼は一瞬だけ硬直する。だが、すぐに何をされたか理解したのか、その緊張が解ける。

「これは……」

「うん、やっぱり似合ってるわ」

ガルの首には、先ほど買ったペンダントがかけられている。

「これは、お前が欲しかったんじゃないのか？」

「うん、最初は自分のためだったんだけど、ガルのほうが似合ってるってね」

「そうか……？」

「そうよ……ふふ」

ガルはじつと淡青色の月長石を見つめている。

そんなガルに、私は問う。ずっと聞きたかった事を。

「……ねえ、ガル。今、ガルは幸せ？」

突然の質問。ガルは訝しげにこちらを見る。

「何故そんな事を？ 俺は幸せだ。教師としても充実しているし、みんなも俺によくしてくれる」

「本当に？」

「本当だ。どうしたんだ、瑠奈」

「なら、何で……」

これこそが、私がガルを連れ出した一番の理由。

「いつも……あんな悲しそうな顔で空を見てるの？」

ガルの動きが、止まった。

「……見ていたのか」

「……うん」

「誰にも見られてないだろうと思っていたんだが……」

ガルは自嘲気味に言う。

「やっぱり、記憶が無いのが辛い？ 本当は、手がかりを探しに行きたいんでしょう？」

「……最初はそうだった。それは否定しない」

「じゃあ、今は？」

ガルは暫く目を閉じていた。が、やがて意を決したように口を開く。

「記憶が戻るのが……怖い」

「え……？」

それは予想外の答えだった。

「今の暮らしは幸せだ。毎日が楽しい。だが……記憶が戻ってしまえば、俺はもうここにはいられないかもしれない」

「ガル……」

「だから……怖い。幸せになるほど余計に。俺の記憶が、過去が、幸せを壊してしまいそうで」

それは、恐らく彼が初めて自分から晒した弱さ。

自分の過去が今の幸せを奪うかもしれない恐怖。それは多分、彼にしか分からない恐怖。彼はずっと、それと戦っていたんだ。

だけど、私にも分かる事があった。

「大丈夫だよ」

私がそう言うと、ガルは少しだけ怖い目をした。

「何がだ？　もしかしたら、俺は狂人だったかもしれないんだぞ？」

「……かもね」

怒りと言うより、怯えのこもった彼の瞳。私はそれを覗き込み、笑った。

「でも、そうだとしても……ガルはガル、でしょ？」

「！」

「たとえばあなたが過去にどんな罪を犯しているようが、私はガルを嫌いになんてならないよ。ガルは……私にとって、私の家族のガルフレアでしかないからね」

……我ながら、夢見がちなお姫様みたいな言葉だなんて思う。
ちよつと恥ずかしくもあるけど……私がガルを信じているのは本
当だから。

「……少なくとも、ガルには何かある。それは私にだって分かつて
るんだ」

初めて出逢った時が出逢った時だ。突如として空間を越えてきた
男を、元々は平凡な暮らしをしていた人だと思っほど、私はお気楽
じゃない。

「だけど、そんなことで嫌いになるくらいなら、そもそも一緒に暮
らすことをOKしてないよ」

私だって、無償で人を受け入れる訳じゃない。
困っていれば優しくはするだろう。だけど、一緒に暮らそうとま
で思ったのは、ガルだからだ。

「あなたを初めて見た時……この人と話してみたいと思った」

「……何故？」

「一つはやっぱり、好奇心かな。空間を越えて現れた男との出逢い……
……何だか物語みたいで、ワクワクするじゃない？」

「……もう一つは？」

「何となく、かな」

「何となく？」

「私だって普通なら、厄介な事とは関わりたくないと思うよ。どんな危険人物か分からないんだし。だけど……あの時、あなたは悪い人には見えなかった」

「……それだけか？」

「直感って大切だよ？　そして、少し話してみて、感じた。あなたが信頼出来る人だって」

「……」

ホントは、もう一つ。でも、それは私自身の問題だ。

「何か話の趣旨がずれてきちゃったね。えっと……つまり、私はガルフレアって男を大切な家族だと思ってるってことだよ」

「大切な……家族……」

私の言葉を繰り返すガル。

その後はしばらく、二人で黙って空を見上げていた。街灯もない場所なので、月の光だけが私たちを照らしている。

「……俺は、馬鹿だな」

ガルがぼつりと言う。

「俺はお前達を信頼出来ていなかった。お前が俺の事を、ただの同

情で受け入れてるんじゃないかって思っていた」

「馬鹿だったって思うなら、今度から変わればいいんだよ」

「ふ……そうだな」

ガルは静かに微笑んだ。どこか安堵したような、穏やかな笑い。

「さあて！ 明日は大会だし、そろそろ戻って寝るとしますか！」

「ああ」

私達は立ち上がり、元来た道を歩きだす。二人並んで歩いていると、本当に恋人同士みたいだ。

本当にガルみたいな人が恋人だったら嬉しいけど……なんて、ね。

「……瑠奈」

「ん、何？」

「ありがとう」

そのありがとうには、いろんな意味が込められているのが分かった。

「どづいたしまして。ガルこそ、付き合ってくれてありがとうね」

星空の下で、私達は笑いながら歩く。

「ガルフレア……また来ようね、いつか。そして、もう一度星を見よう」

「ああ……いつでも来れるさ。俺達は、大切な、家族なんだから……」

月明かりは、私達の行く道を照らし続けた。

13話 前日2 〈少年達の集い・前編〉

時村家・道場。

朝の道場で、武器と武器がぶつかり合っていた。俺と相手の槍が重なるたびに、鋭い音が道場に響く。

互いの動きはほぼ同じ。二人とも同じ型を繰り返しているのだから当然なのだが。

だが、延々と続く打ち合いの中、次第に俺の動きが鈍り始める。

そして……一際高い音が響いた。

「ッ……！」

俺の槍が宙を舞い、遙か後方に落ちる。

「決まりだな」

その一瞬で、相手の槍は、俺の喉元に突きつけられていた。

「……ふう。やっぱり兄貴には勝てないか」

「それでもねえさ。腕上げたな」

笑いながら槍を下ろす兄貴、時村^{ときむら}修^{しゅう}。ちなみに俺とは4歳差、
大学生だ。

「これなら明日の大会もバツチりだろ。瑠奈ちゃんに、いい所しっ
かり見せてこいよ」

「あ、兄貴……」

兄弟だからか、俺の考えは兄貴には筒抜けだ。……いや、別にそ
れだけで大会を志願したと言う意味じゃなく、それもちょっとは考
えたっただけだ。

「第一、ルナとは戦うかもしれないんだ。そんなこと考えてて負け
たら、かっこつかないだろ？」

「バーカ。そこで勝って、告白するんだよ。完璧だろ？」

「……そう簡単に勝てる相手じゃないんだよ、あいつは」

そもそもその単純恋愛方程式に対する自信が、彼女いない歴三年
の兄貴のどこから出てくるかが疑問だ。

「ふーん。ま、いいや。戻ろうぜ？ 飯も出来てんだろ」

「そうだな。付き合ってくれてありがとう、兄貴」

「別にいいって。お前は瑠奈ちゃんと付き合う方法でも考えてな」

「……兄貴も彼女を見つけないな」

ささやかな復讐は、頭を槍で小突かれて終わった。

食事を終え、俺は自室で本を読んでいた。
と言うのも、当日に疲れを残してしまえば本末転倒だと、親父に
午後の道場使用を止められたからだ。

……と、俺の携帯が鳴り始めた。

余談だが、道場があるだけで堅苦しいイメージがあるらしいが、
うちは至って普通の家庭だ。

初めてみんだが家に来た時、親父がゲームをしていたのを見た奴
らがオーバーに驚いたのをよく覚えている。

電話の相手は、カイだった。

『よっ、レン。ヒマか？』

「ああ。どうした？」

『いや、今日コウの家に行くんだけどさ、良かったらお前も来ない
？』

予定がない俺にとって、それは願ってもないことだ。

「そつだな、行くよ。今からいいのか？」

『おう。あ、ゲームとか、適当に持ってきてくれってや』

「分かった。じゃ、また後でな」

電話を切ると、俺はすぐに支度を済ませて家を出た。何だかんだで、あいつらといるのが一番楽しいんだよな、俺にとって。

綾瀬家・暁斗の部屋。

「ふあゝあ……」

俺は部屋で寝転がって大あくびをしていた。明日が大会、ということ、先生が今日は部活を休みにしてくれたんだ。

……が。

「いざ時間があると、やる事も特にねーなあ……」

いつもは時間が欲しい、とかぼやいているが、実際は時間があってもただボーっとするぐらいしかない。まあ、それはそれで幸せなんだろうけど。

父さん達はいないし、瑠奈とガルも出かけている。そのため、ぶっちゃけて言えば、サイコーに暇だった。

「新しい本も最近買ってねえし、ゲームも全部クリアしてっからな……」

人は暇になると独り言が増えると言っ話を聞いたが、どうやらそれは正しいみたいだ。

「んー……出かけるにしても金もねえしな……みんなは部活らしいし」

明日のために体力温存、と言っても、このままじゃ暇すぎて死にそうだ……

と、俺のポケットで携帯が震える。

「んん？ 誰だ……カイ？」

電話を開いて出てきた名前は、海翔のものだった。

「もしもーし。どーした？」

『よう、暁斗。ヒマでヒマで死にそうって感じだな』

ちなみに、1つ下のこいつが俺にタメ口なのは、昔の名残だ。俺としても、そっちのが気が楽でいい。

「あー。よく分かったな」

『随分と間延びした喋り方してっからな……ヒマなら、今から遊ば

「ねえか？」

「…………お？」

「これは…………天の助けか？」

「イヤならムリしなくていいぜ？」

「いや、喜んで！ で、どこで？」

「浩輝ん家だ。慧の野郎が会いたがってたぞ」

「慧か…………確かにしばらく会ってねえな」

「慧と言つのは浩輝の兄貴。俺と同年だ。」

「つーか、あいつがお前も呼びたいって言ってたから、俺がこうして電話してんだけどな」

「…………慧、言わせてくれ。ありがとう！ 俺はお前が大好きだ！！」

（語弊アリ）

「にしても、お前って相変わらず、部活が無かったら何もやる事ねえんだな」

「ほっとけ」

「ま、とにかく…………何だよ親父！ 人が話してる時に割り込んでくんな…………年上への言葉使い？ あんたにだけは言われたくねえ！」

……電話の向こうでは愉快なことになっているようだ。相変わらず仲良いな、この親子も……当人たちは断固否定するんだろうけど。

『……ったく。あ、時間はいつでもいいよ』

「んじゃ、今から行くわ。何かいるか？」

『テキトーでいいぜ。レンにも頼んでっからな』

「分かった。じゃあな！」

電話の間、俺の尻尾が揺れていたのは内緒だ。

橘家。

「
」

みんなを待っている間、俺は菓子やら何やらを準備していた。ルナが来れないってのは残念だけど、たまには男だけってのもいい。

「親父、ジューズか何かねえか？」

親父も今日は珍しく休みだ。最近は人手が多く、病人も少ないので、少しのんびり出来るらしい。

「んん？ 冷蔵庫の下のほうに入れてなかったか？」

「あ……悪い、コウ。俺が友達と全部飲んだんだ……」

「ええ？ 何やってんだよ、兄貴」

申し訳なさそうに頭をかいている兄貴、橘たちはな・けい 慧。
兄の毛の色は母さんの遺伝らしく、オーソドックスな虎の色。髪は俺と同じで茶色だ。

「みんなが来る前に買ってこねえとな……慧兄？」

「……分かってるよ、俺が行ってくる」

しびしび、といった感じで金を取りに部屋に戻る慧兄。

「今日は誰が来るんだ？」

「えっと……カイと、レンと、暁兄だつてさ」

「璫奈さんは？」

「ガルとデート、だよ。最近仲良いんだよな、あの二人」

「そうか……残念だな。俺としては、将来はお前とくっついてもら

いたかったんだが」

「……さらりとんでもねえ事言うんじゃないっつーの」

ルナは俺の親友だ。お互いの事は、誰よりも知ってる自信がある。けど、今んとこお互いに恋愛感情には発展していないし、する気配もない。

それはカイも同じらしい。どっちかと言うと妹って感じだ。

……ま、仮に俺が惚れたとしても、向こうは気づかないんだろう。
……レンを見てるとよく分かる。

「それにしても……お前の話だと、ガルもうまくやってるみたいだな」

「ん？ ああ……意外とまともに先生なんだよ。人気も高いし」

教え方も上手いし、ルックスもあれだ。男の俺から見てもほれほれするほどの美形だからな……変な意味じゃねえぞ、断じて。

「まあ、慎吾の見込みが正しかったって事だな」

そついや、親父は最初から綾瀬先生の企みを聞いてたんだよな。

「見込んだっていつでも楽しそうって意味じゃ……」

「はは、あいつもそこまでトチ狂っちゃいなさ。あれでもあいつなりにしっかりと考えて出した結論だ……多分」

「自信無えんじゃねえか……」

この人は昔から、白衣を脱ぐと性格がテキトーになる。今の親父は、何から何まで普通のオッサンだ。

仕事と普段で自分を使い分ける、ってのは当たり前なんだろうけど…… 仕事が生真面目だけに、俺でも調子が狂うっての。

と、そんなアホらしいやりとりをしていると、呼び鈴が鳴った。

「ん、来たかな？」

俺は早足に玄関へと向かった。ドアの向こうからは騒がしいほどの声が聞こえる。みんなの声だ。

「入っていいぜ」

俺がそう言うと、ドアが開き、みんながまとめて入ってくる。

「おう！ 邪魔すんぜ」

「久しぶりだな、ここに来んのも」

「お邪魔します」

「おう。みんな一緒だったんだな」

カイにレンに暁兄。三人ともセットで入ってきた。

「上から見たら二人がいたんでな」

カイは眼鏡をかけ直している。飛ぶ時は固定するようになってる

らしいけど、それでも多少はズレるそうだな。

ちなみに、カイは一般的に見れば視力がそこまで悪い訳ではない。ただ、空を飛ぶ時に支障が出るから、とか言ってたな。

「じゃ、上がれよ。俺は菓子持ってくるから、部屋で待っていてくれ」

「分かった」

みんなが二階に上がるのを見届けて、俺はリビングの菓子を取りにいった。

「よっしゃ！ 俺の勝ち」

「うわ……お前強すぎだろ」

まずはレンが持ってきた格闘ゲームをやることにした俺達。

俺はアクション系は大得意なので、只今5連勝中。

「ちょっとはハンデつけろよ。俺、この手のは苦手で……」

「コツを掴めば簡単だぜ、暁兄」

「暁斗さんはRPGとかのが好きなんでしたっけ？」

「まあな。……………」

レンの質問に答えた後、何故か暁兄は渋い表情になった。あ、俺、ちよつと偉そうだったかな？ と心配になったが、彼の視線はレンに向けられていた。

「なあ……その『暁斗さん』っての止めねえか？」

「え？」

目を見開くレン。暁兄は髪をかき乱している。

「何つーか……俺とお前の付き合いも短くないんだし、もうちよい友達感覚で呼んでくれねえか？ 俺はそのほうがやりやすいんだ」

「そうそう、堅っ苦しすぎなんだよ、お前は。先輩だなんて気にするな」

「お前はもうちよい気にしろ。ま、とにかく。呼び捨てで呼んで良いんだぜ、蓮」

ああ、そう言えば、この人はこういう性格だったな。中学ん時、部活に入って先輩後輩のマナーを仕込まれた俺が敬語で呼んだら、今まで通りに呼べって怒られたんだっけ。

レンは少しだけ考えるような素振りを見せてから、口を開いた。

「じゃあ、失礼して……暁斗。これでいいか？」

「おう、上出来だぜ！」

晧兄は愉快そうに笑う。敬語がダメってのは、ガルに似てるかもしれねえな。

まあ、そんなこんなで盛り上がり始めた頃、思い出したようにレンが言う。

「そう言えば、ルナは誘ってないのか？」

「いや？ あいつとルツカも誘ったぜ」

あ、レンには教えてねえんだっけ。ルナが来てない理由……

「ルツカの野郎は大事な客が来るとか言ってた。あいつ、一人暮らしなんだろ？ すげーよな」

「ああ。あいつはそういう部分は昔からしっかりしてるからな」

「ふーん。で、ルナは出かけたらしいぜ」

「一人で、か？」

カイはさらっと流そうとしたようだが、失敗したみたいだ。仕方なく素直に答えるカイ。

「いや、ガルと一緒にだ」

「ガルと……」

本人に自覚があるかは分からないが、レンの眉が若干つり上がる……ああ、やっぱり気にするか。だからこいつには伏せといたのに。

こちらとしてはここいらで撤退したいのだが、レンは何をトチ狂ったか、自ら地雷に突っ込んで来た。

「最近……仲良いよな、あの二人」

「ん……まあ、な」

暁兄はレンに気を使っているためか、たどたどしく答える。てか、止めとけよレン、それ以上は……

しかし、そんな俺の心は通じず、獅子の自爆は止まらない。

「お前らは、どう思うっ?」

「どっ、って?」

「あの二人の関係って……」

「……………!」

ストップ! 頼むレン、その先は言うな! 俺には答えらんねえから……!

と、俺達が逃げ出したい気分になってきた時、部屋のドアが開いた。

「まったく、兄貴をパシリやがって。ほら、買ってきたぞ」

……慧兄、ナイスタイミング!

「へへっ、サンキュ！ いろんな意味で！」

「よっ、慧。お前ってやつぱり良い奴だよな！」

「久しぶりだな、会いたかったぜ。お前、本当に最高！」

「ん？ 何でこんなに歓迎されてんだ……ま、良いか。暁斗もちやんと来てるな」

そういや、暁兄を誘ってくれて言ったの、慧兄だったな。

「それじゃ、浩輝。ちょっと暁斗と海翔を借りるぞ」

「おう……へ？」

今、何て……

「いや、二人に見せたいものがあんだよ。蓮と待っていてくれ」

ちよい待て、あの会話の途中でレンと二人！？

「二人はいいよな？」

『もちろん！』

……こんの薄情者共がああああ！！

「じゃあ、すぐに戻ってくるからな！」

「ま、待つ……！ おおおい！！」

こうして俺は、エスケープ不可能な空間に取り残された。

14話 前日2 く少年達の集い・後編く

コウの部屋を抜け出し、慧の部屋に集まった俺と暁斗。俺達が大
人しく慧に従ったのは、あの状況から抜け出したかったってのもあ
ったが、それ以上に。

「で？ 何があつたんだ」

「察しが良くて助かるな……」

見せたいものがある、など俺達を連れ出すための口実だろう。

「電話でも良かったけど、やっぱり直接言つところと思つてな」

「わざわざ俺まで呼び出したんだ。下らない事じゃないよな？」

「……下らない事なら、楽なんだがな」

慧の表情から察するに、あまり良い事じゃなさそうだ。

「落ち着いて聞けよ？ 間違つても、声は上げるな。隣に聞こえな
いようにな」

と言う事は、浩輝に関係する事か？ それに、慧のこの表情……

……まさか。

「最近、浩輝の……『発作』が増えてきた」

「……………!!」

俺は、思わず大きな声を出しそうになる。が、すんでのところで慧に制止された。

「落ち着けて言っただろ、バカ」

「わ、わりい……………」

そう口では言うが、内心では落ち着けるはずがない。慧も口調こそ静かだが、穏やかじゃないのが見てとれる。暁斗も険しい表情だ。

「発作だった？ また、あれが起こってるって言うのかよ」

「大抵は軽度のものだけだな……………先週、少し重いものが起こった」

「……………確か、最近は落ち着いてた筈だろ？ まだ色々と思いつめてるって事は知ってるけどさ。どうして、いきなり……………」

「それについて、お前達の意見が聞きたかったんだ」

それが、俺達を誘った理由か。

「続いているのは偶然なのか、何か原因があるのか……………お前達は、どう思う？」

「……………」

思い付く理由……仮説だが、一つだけあった。

暁斗の言う通り、あいつの発作は最近は落ち着いていた。それを再び呼び起こす要因になりそうなもの……

「……闘技大会、か」

「やっぱり、お前もそう思うか」

慧も同じ考えだったようで、頷く。

「どういう意味だ？ 大会とどう関係がある」

「正確には、大会って言うより闘技そのもの……と言うか、PSだな」

「……あ」

暁斗もようやく合点がいったらしい。

「PSは、精神に影響される力。記憶を無くしたガルがPSを使えなくなつたように、両者は密接に結びついたもんだ」

そして、それは逆も然り。PSが精神に影響されるように、精神もPSに影響される。

「つまり、闘技大会に向けてPSを使ってるから、精神のほうに影響が出ちまつてる……って事か？」

「多分な。つつても、潜在的な部分にだろっけどよ」

勿論、普通の人がPSを多少使ったところで、悪影響が出る事なんてねえんだろう。だけど、あいつの場合は……

「あいつにとって、あの力は忌むべきもんなんだよ。『あの日』に目覚めたあの力は、な」

「……………!」

「あの力を使う事で、あいつも無意識のうちに、あん時の記憶が喚起されちまつてる可能性は、十分にあると思う。あいつにとってあのPSは、トラウマの象徴と言っても良いからな」

本人は、そんな事を口に出したりはしないけどよ。今じゃ気にしてない『フリ』を、あいつは続けている。

「……………じゃあ、あいつにPSを使わせないほうが良いんじゃないのか？ もし、昔みたいな大きな発作を起こしたら……………」

「あいつにそれを直接言えてか？ それこそあいつが意識しちまうだろ。それに、あいつは負けず嫌いだ……………勝つ為なら、止めたって使っちまうだろうよ」

特に俺には、な。

「海翔の言う通りだ……………そんな事は浩輝が嫌がるだけだろう。ただ、気を付けてやってほしいんだ、あいつの事」

「……………それはもちろん構わないけどよ」

「俺がいつもあいつのそばにいる事は出来ないしな。こんな事を頼め

るのはお前達ぐらいしかないんだ」

頼む、と頭を下げる慧。こいつがどれだけ弟思いな奴なのか、俺達は知ってる。同時に、こいつがどれだけ辛いのかも。

「あいつ自身、乗り越えたいと思っっているようだから、俺はそれを支えてやりたい。俺には、それしか出来ないからな」

「……慧」

「あの場にいなかった俺じゃ、あいつの傷を塞ぐ事は出来なかった。それが出来るのは……」

慧は悔しげに語尾を飲み込み、俺のほうを見た。分かってる。俺の役目も、兄として何もしてやれないこいつの悔しさも、全部。

「……わざわざ呼び出して済まなかったな。そろそろ行こう、あいつらも気にしてるだろうし」

「ああ、そうだな……慧、お前もあまり思い詰めるなよ」

「そういつこった。俺達に、任せときな」

そう。これは、俺がやるべき事なんだから。

あいつが、いつか全てを乗り越えるまで。それが俺の……あいつにトラウマを与えた俺の、償いだ。

「……………」

カイ達が抜け出してから、俺達二人の間には微妙な沈黙が続いていた。お互いに、話を切り出すタイミングが全くつかめない状態だ。仕方ないので、黙々とゲームで対戦していたが……くそ、みんな遅いな。早く戻ってこいつの……

「……コウ」

「ん？」

「さっきは悪かったな。変な事を聞こうとして」

さっきの続きか、と思つてどきりとしたが、逆に謝られた事で、俺は内心で胸を撫で下ろす。

「あー、別に気にすんなよ。お前の気持ちぐらい分かってるからよ」

「分かってる、か」

苦笑いするレン。本人としては複雑な気持ちだろう。

そう。レンの『想い』については、俺達はとっくの昔に気付いている……激鈍の本人を除いて。

「あの馬鹿、昔っから人の相談とかにはよく乗るくせに、肝心の自

分がああだもんな。本当、見てもどかしいったらねえぜ」

「……お前達は、みんな幼なじみだったんだよな」

「ああ、うんと小さな時からなの。最初に会ったのは確か、親父が慎吾先生に会いに行く時、一緒について行ったんだっただな」

「成程な。カイも似たようなものか？」

「ああ。で、子供の時つてすぐに仲良くなれるじゃん？ 一度顔を合わせてからは、家も近所だった事だし、お互いによく遊びに行くようになったんだ」

あの頃から、俺達はいつも一緒だったな。俺に、ルナに、暁兄に……カイ。

「……………」

「……………」
「コウ、どうした？」

「！……………」
「いや、何でもねえよ」

……………いけねえ。最近は何の夢を見る事があるせいかな？ 余計な事を考えちゃった。

「なら良いけど……………」
前に、ルナが言っていた事があるんだ。付き合いが一番長いのはコウだし、何だかんだで一番信頼出来るのもお前だっつて」

あの馬鹿、そんな事を言っただけだったのか……………いや、嬉しいんだ

けど、よりによってレンに言うか。鈍感すぎんだろ。

「お前は どう思ってるんだ、あいつの事？」

「俺も一緒かな。あいつは一番信用出来る『親友』だ」

「そっか……」

親友、の部分を強調したのは意図的だ。

「あ、勘違いすんなよ？俺は、お前やカイも親友だと思ってる。みんな同じぐらい大事だぜ」

「分かってるさ。ただ、俺もその時から一緒にいたかったな、と思っ
てさ」

ま、こいつと会ったのは、俺達がこっちに引っ越してからだから
な。

「なあ、お前……何かアプローチかけたのか？」

気になったので、少し聞いてみる事にする……ちょっとストレ
トすぎたか？とも思ったが、言っちゃったもんはしょうがない。

「この前……成り行きで、好きな奴がいるって言った」

「へえ？で、あいつもちよっとは気づいたか？」

「いや、全く」

「……だよなあ」

こいつも、難儀な奴に惚れちまったな。そもそも、奥手なレンが鈍感なルナに惚れた時点で不幸の始まりだろう。いつも隣にいるのに全く発展しないから、こっちがもどかしくて仕方ないっつーの。

……と、その時。

「よう、待たせたな」

慧兄の部屋に行ってた三人が戻ってきた。

「おう、遅かったな。何してたんだ？」

「いや、ちよいと話もしてたからよ」

話が。微妙に気になったけど、何となく聞かないほうが良い気もしたので止めておいた。

ま、とりあえず、少し遅れたがこれで全員揃ったことだし……

「さ！今日は遊んじまおうぜえ、みんな」

「……家の中で無駄にテンション上げるなよ」

「ま、いいじゃねえか。せっかくだし盛り上げていこうぜ」

「そうだな。それじゃ、明日に全力を尽くすためにも……」

「今日は羽目外しちまうか！」

「……ほどほどにしろよ。特にお前は家を壊しかねないからな、力
イ」

「俺は破壊神か何かかよ!？」

「間違つてねえだろ」

「だな」

「……よし、そこ動くなデメ工等あ!?!」

「だから、家の中で暴れるなああ!?!」

俺達は、明日はライバル。だからこそ、この日は思いつ切り遊んだ。
だ。

15話 前日3 く影で動く者

「……うん。こんなもの、ですな」

僕は今からの来客を迎える為に、自宅の整理をしていた。

一人暮らしを始めてけっこう経つけど、実は僕、片付けは苦手だったりする。他のところは几帳面なくせにな、と、蓮によく呆れられる。

如月くんからの誘いを断らなきゃいけなかったのは残念だけど…

…今日は、こちらの用件のほうが大事だ。

ちょうど掃除用具を片付け終わった頃、呼び鈴が鳴った。僕は急いで玄関に向かう。

「はい、どうぞ」

僕がそう言うと、扉が開く。その向こうには、予想通りに青い虎人が立っていた。

「ようこそ、シグルドさん」

「……ああ」

シグルドさんは、うつすらと微笑んでいる。付き合いの長い僕でもあまり見れない、貴重な表情だ。

「とりあえず上がってください。お茶でも用意しますよ」

「分かった。だが、あまり気を遣わなくていいぞ。別に俺はお前の

上官ではなければ、今は任務中でもないんだ」

「いえ、年上は敬わないと。ね？」

「……調子の良い奴だ」

ふう、と息を吐いてから、シグルドさんは中に入ってくる。僕は彼を部屋に案内すると、台所に向かった。

「はい、どうぞ。すみません、茶葉を切らしてたんで、牛乳ですけど」

「構わない。……ところで、牛乳はいつも置いてあるのか？ 前回に来た時も出された気がするが」

「ええ、一応。毎朝毎晩飲む習慣がついているので」

「……お前の年を考えると、今さら頑張っても身長はあまり変わらないと思うがな」

「!?!? ひ、酷いです!?!」

「……済まないな、現実を直視させて」

「真顔で、かつ本当に哀れそうに言わないで下さい！」

人の気にしてる部分を直球で攻められ、僕はがつくりとうなだれる。い、いや、望みを捨てちゃいけない。多分、僕はまだ成長期が来てないだけだ、きっとそうなんだ……

「……冗談はこの辺りにしておくか」

「僕としては冗談じゃ済まないです！ これだから大人って……」

シグルドさんには一生分からないだろう。高校生にもなつてそのボク、とか呼ばれたり、同級生の弟と間違えられたり、小学生と間違えられたり、女子と間違えられたりする気持ちは……考えてると、少し泣きたくなってきた。

「……悪かった、そう拗ねるな。それよりも、本題に入りたい」

「……分かりました」

確かに、こんな話を話す為に呼んだ訳じゃない。とりあえず、気を取り直す事にした。

「先月、あなたに話した内容は覚えていますか？」

「ああ……」

念の為の確認をすると、シグルドさんはゆっくりと頷く。もっと

も、忘れられる筈もないだろうけど。

「お前から聞かされた時には、我が耳を疑ったがな。こちらの調査でも、確かなものだと判明している」

「そちらでも調べたんですね。では、話は早いです。どうするんですか？ 彼を」

シグルドさんは、目を伏せる。彼の心情を理解しつつも、僕はその続きを口にした。

「我らの離反者、 銀月 …… 現天海高校教員、ガルフレア・クロスフィールを」

「……………」

シグルドさんの表情は、ひたすらに険しかった。

「奴は今、どういう状態だ？」

「大方の予想通り、記憶喪失の症状が出ています。しかし、全ての記憶を失った訳ではないみたいですね」

蓮達の友人と言う立場から、上手いこと本人からも話を聞く事が出来た。

「……………組織については？」

「そちらは完璧に忘れていたようでした。芝居の可能性はほぼ無いでしょう」

僕に対しても反応はしなかった。むしろ、学校で彼を見た時は、こちらが驚愕を隠すのに苦労したくらいだ。

「ですが、記憶はいつ戻るとも限りません。いえ……本来ならば、記憶があるつと無かるつと、裏切り者を許す訳にはいきませんから」

「……………！」

「もう一度聞きます。シグルドさん、あなたは彼をどうしますか？」

シグルドさんは明らかに狼狽していた。もちろん、僕はそれを予想していたけど。

「あなたが決められないならば、僕が『処理』しておきますよ」

「……………待て！！」

シグルドさんにしては珍しく、強い口調の制止。

「……………仮に記憶を取り戻したとして、奴一人に何が出来る訳でもないだろう。捨て置いても構わないのではないか」

「1%でも危険因子になる可能性があるならば、その要素は早めに消し去るべきです。彼を見逃し、彼が障害となった時はどうするつもりです？」

「……………もしもそうだった時は、俺が責任を持ち、奴を排除する。だ

が、そうならない限りは……」

「そうですか。つまり、僕と同意見ですね」

「……何？」

「もし僕が彼を殺すつもりなら、あなたの意見を聞く為だけにひと月も待ちませんよ。あなたが彼を殺すと言った場合は、あなたを止めるつもりでしたので」

僕の言葉に、シグルドさんは目を見開いた。

「……カマをかけたのか」

「済みません。ただ、あなたの本心を聞いておきたかったんです」

この人は素直じゃないし、こうでもしないと感情を表に出してくれなかっただろう。

「僕はその人を尊敬していました。今の彼が脅威でない以上、殺したくなんてありませんよ。あなたと同じでね」

「……お前も、俺が奴を逃がしたと思っているのか」

「ええ。もちろん、それを大っぴらに言うつもりはありませんが」

そう思う、と言うよりは確信している。そして、僕は彼の行為を裏切りだとは思えなかった。

僕達だって……心の無い機械ではないのだから。

「……シグルドさん。正直、相談ぐらいはしてほしかったですよ、僕は。僕にだって、それなりの助力は出来るつもりですから」

「……済まない」

「謝らなくてもいいですよ。さて……では、この事を前提に、明日について話し合いますよ」

僕は笑顔を作ってみる。

「明日、闘技大会とやらに来いと言っていたな」

「はい。この国でもトップクラスのイベントです。シグルドさんも楽しめると思いますよ」

「今は任務も無いから、行く事は出来る。だが、ガルフレアもいるのだろう？」

「まあ、教員ですからね。しかし、顔を合わせただけで記憶が戻る事も無いでしょう」

仮にその程度で戻るなら、それこそ対処が必要だ。実際、そのチエックも心算にある。

「教員、か。何がどうなってそんな事になっているのやら」

「シグルドさんも調べたんでしょう？　なら、彼を引き取ったのが誰かも分かっている筈です」

「綾瀬 慎吾……か」

シグルドさんは少し目を細める。

「あの人は、何か気付いているのだろうか。あいつの事に」

「その可能性はありますね。まあ、本人にそれを伝えてはいないようですが」

あの人は、本当に底が知れない。もしも敵に回せば、一番厄介なタイプだ。

「……分かった、行こう。確かめるべき事も多いようだからな」

「本当ですか？ ありがとございます！ しっかり楽しませてあげますね」

「……それと、だ。先程の話……もしも奴が障害になると判断されたならば、その時は」

「分かっています。その時は……僕も一緒に責任を取りますよ」

そのぐらいは覚悟している。あの人を殺したくはない。だけど、必要に迫られたならば、自分の感情など関係ない。

僕の手は、とっくの昔に汚れているんだから。

16話 前日4 教師達の仕事

天海高校・職員室。

「ふう……」

午後1時。朝から来ていた俺は、本来なら明日にやるはずのデスクワークを終わらせた。と言うのも、明日は生徒達の大会を見にくいからだ。

毎年のことながら、自分の教え子達が全力で闘う姿は感動するものだ。

それに……今年はかなり激戦になるだろうからな。何年も生徒を見てきたが、今年の連中は例年に無いほどの実力者揃いだ。

特に、今年は珍しく、一年生の優勝が見られるかもしれない。

綾瀬、橘、如月、時村、そしてファルクラム……奴らの実力は完全に一年生離れしているからな。

その上、彼ら全員が自分のクラスだというのだから、見に行かない手は無い。会場は学校のすぐ近くだしな。

……それにしても疲れた。少し張り切りすぎたか？ 朝からロクなもの食べていないため、かなり腹も減っている。

たまには学食にでも行くか……そう思い席を立った俺に声がかける。

「誠司。時間はあるか？」

振り返った先にいたのは、うちのクラスの綾瀬の父、慎吾だ。

「学校では上村先生と呼んで下さいと言っている筈です、綾瀬先生」

「そう堅い事を言っな。幼なじみに敬語を使うなど、むずがゆくて仕方ない」

「……………」

俺達は、昔からの知り合い。ここでの仕事も、元はといえば慎吾の紹介だった。

俺は小さな溜め息をつく、周りに他の先生がいないことを確認し、注文通りに口調を元に戻す。

「どうしたんだ？」

「なに、昼飯まだだろう？ 話しがてら、たまには一緒にどうだ？」

「……………奢らんぞ」

「失敬な。そんなものは目当てじゃない」

「ならいい。俺もちょうど、お前に聞きたいことがあったからな」

俺もいつか呼び出してゆっくり話すつもりだったところだ。慎吾の誘いを受け入れ、俺達は二人で食堂に向かった。

「空いているな」

食堂には、まばらに生徒がいるものの、ほとんどガラガラだった。今日は部活生ぐらいしか来ていない上、ピークタイムも過ぎていないから当然か。

「ふむ。ここに来るのも久しぶりだな」

「そういえば、今日は何で弁当じゃないんだ？ 楓と喧嘩でもしたか？」

「いや。ただ、どうせ学食に行くなら、たまにはいいかと思っただけだ」

つまり、この呼び出しは最初から計画済みか。

「とりあえずは腹ごしらえだな」

「ああ……俺が頼んできてやる。お前は席をとっている」

とるまでもなくガラガラだな。一応、俺は生徒と出来るだけ離れた席に陣取り、慎吾を待つことにした。

俺は慎吾が戻ってくるまで、ぼんやりと辺りの生徒達を眺めていた。

しかし、話とは何なのだろうか。わざわざ呼び出すぐらいだから重要な話だとは思いが、奴は気まぐれだからな。

それほど時間はかからず、慎吾が戻ってくる。俺は小さく頭を下げ、頼んでおいた定食のトレイを受け取った。

「さて、話し合う前に、腹ごしらえを済ませるか」

「ああ、そうだな。いただきます」

俺は両手を合わせると、さっそく料理を口に運ぶ。元々腹が減っていた事もあり、俺はかなりのペースで箸を進めていく。

「あまりがつついて、詰まらせるんじゃないぞ」

「そこまで餓鬼じゃないさ」

「なら良いがな。中学生の時、パンを詰まらせて死にかけたお前の事だから、どうにも心配だな」

「……そんな事はとっと忘れろ」

他人の失態はよく覚えている奴だ、全く……こいつは人の弱味を記憶して、的確に利用してくるから質が悪い。

「しかし、相変わらず美味しいな、ここの食堂は」

「そうだな。もっとも、楓の料理には叶わんが」

「……のろけてくれるな。愛妻家っぷりは相変わらずか」

もつとも、楓の料理の腕については、俺も認めてはいるが。あれに勝てるものは、そうそう無いだろう。

俺達は適度に雑談を交えながら、昼飯を平らげていく。半分以上を食い終わった頃に、慎吾が切り出してきた。

「明日は、いよいよ闘技大会か」

「ああ。お前の自慢の子供達の晴れ舞台だな」

くく、と慎吾は笑う。

「俺が直接指導してきた暁斗はともかく、瑠奈はお前から見てどんな評価だ？」

「そうだな……女子にしておくのが惜しい、と言えば、男女差別になりそうだが。俺が見て来た生徒の中でも、トップクラスの実力であると言っただろう。問題があるとすれば、経験不足だな」

「そればかりは仕方あるまい。まだ一年生だからな。今回は、結果はともかく良い経験になるだろう」

本来なら、一年生で出場が決まる事すらレアなのだから。

「……綾瀬、橘、如月、時村、ファルクラム。まさか一年のクラスから、五人もの出場が決まるとは、俺も思っていなかった」

「全くだな。それも、仲の良い友人グループが固まっているときたものだ」

数奇なものだ、と思う。このような事態は、恐らく史上初だろう。

「血は争えん、と言う事かな」

「……そうかもな」

親譲りの才、か。あまり才能と言う言葉を使いたくはないがな。

「ところで、暁斗の調子はどうだ？」

「あいつは絶好調だな。去年の事がバネになったのだろう、一年前より格段に成長している」

「ほう……」

去年の試合は俺も見た。あの時のあいつにも、今の綾瀬達と変わらないほどの実力があつた。

「高校生のレベルであいつに勝てる奴は、三年生であろうと殆どいないだろう。もちろん、相性にもよるだろうがな」

「成程。親バカの鼻屑目を抜きにしても、か？」

「俺はいつでも客観視しているつもりだ。第一、親バカも愛妻家も、お前が言えた事じゃないだろう」

「……まあな」

そこに突っ込むと、何だか面白くない事態になりそうだったので、

反論は止めた。一応、自覚が無い訳でもないからな……

「ところで……話とは、その事だったのか？」

「まあ、それが一つだな。もう一つは、ガルフレアの事だ」

やはりか。無論、想定範囲内だ。

「ひと月前……お前から彼の話を聞かされた時は、いったい何を言っているんだこのド阿呆は、と思ったが」

「随分な言いようだな」

「当然だろうが。記憶喪失の男をいきなり教師にするなんて発想、正常な奴が出来るか」

こいつの突飛な言動に振り回されるのはいつもの事だが、今回はかなり本格的に気が触れたのかと思ったほどだ。

「念の為に言っておくが、別に遊び心だけではないぞ。それに、ちやんとした『手続き』は受けさせた」

「分かっている。それに、彼が来てくれたおかげで、助かっているのは事実だからな」

ガルは飲み込みも非常に早く、今や一人前と言っても良いほどに仕事をこなすようになってきている。生徒達からも、かなりの信頼を集めているようだしな。

「本人がそれを聞けば喜ぶだろう。あいつはどうも、自分が迷惑し

かかけていないと思っっているようだからな」

「……まだ、自分が何者かを思い出さないか、彼は」

「ああ、残念ながらな」

慎吾の表情は、30年以上の付き合いがある俺でも、どうにも読みづらい。

「……ならば、お前は？」

「どういう意味だ」

「お前、あいつの正体に、何か感じているんじゃないのか？」

俺の質問にも、慎吾は不敵な笑みを崩さなかった。

「お前の事だ、独自に彼の調査は行っているんだろう？」

「まあな」

これは、俺がずっと尋ねたいと思っっていた事だ。こいつには、自分だけで先に進めようとする部分があるからな。

「だが、まだ明確な答えは出ていない。いくつか、心当たりはあるかな」

「それを、本人に伝えはしないのか？」

「ああ。確証の無い情報で、彼を振り回したくはないからな。仮に、

それが刺激になって、記憶が戻る可能性があるとしても、だ」

慎吾は、情報の取り扱いについては、いつも慎重だ。幅広い知識と情報網を持つこいつは、その重要さを、身にしみて理解しているんだろう。

「では、俺にも話さないつもりか？」

「いや。だが、今日は止めておく。あと少し、煮詰めておきたい事があるんだ」

「……そうか」

こいつの性格上、何を聞いても、今日はこれ以上答えないのである。俺は、少しだけ残っていた昼食を平らげることにした。

「なに、今日中には整理出来るだろうから、近いうちに伝えるさ……ところで、誠司」

「何だ？」

「食い終わったら、もう少しだけ付き合え」

「付き合う？ 何をだ」

顔を上げると、慎吾はいつも以上に不敵な笑みを浮かべていた。

……マズい。嫌な予感しかしない。今まで、こいつのこの笑顔を見た後には、ロクな目に遭った事がない。

「なに。食後の運動だ」

そして……

「……おい、慎吾」

俺は、不機嫌なことがしつかりと伝わる口調で言う。対する慎吾は、腹立たしいほど楽しそうだ。

「明日は生徒達が戦うと考えると、昔の血が騒いでな」

「……それは分からんでもないが」

「それに、たまには力を使っておかないと、腕がなまってしまっか
らな。相手になってくれ」

俺達は、闘技場の舞台の上に立っていた。食後の運動とは、練習
試合のことだったのだ。

たぶんこれも見越して、俺を食事に誘ったのだろう……が、俺が
イラついているのは、そこじゃない。

「試合の相手なら、こちらも望む所だ。好きな時に、思う存分相手
してやっていい……ただな」

俺は周りを見渡し、盛大な溜め息をついた。

「……なぜみんなが来ているんだコラあ!!」

舞台の外には、恐らくは、学校に来ている生徒の九割以上が集まっているだろう。

それもこれも、このド阿呆が「トイレに行ってくる」と言って抜け出し、全校放送で「今から闘技場でスペシャルマッチを行う」というふざけた知らせを流したせいだ。

さらに、職員も数名いる……この暇人どもが。

「ギャラリーがいたほうが燃えるだろう?」

「貴様と言う奴は……はあ、全く」

突っ込む気も失せてきた。真面目に受け答えしているほうが馬鹿らしい。

俺は懐から、三枚のチャクラムを取り出した。直径は20センチほどの少し小型のもので、携帯がしやすいために、俺が愛用していたもの……をモデルに、闘技用に加工したものだ。無論、殺傷力は無い。

そして、両手に装着しておいた、近接戦闘用のクローを展開する。こちらも昔の愛用武器のレプリカだ。

「腕はなまっていないだろうな、誠司」

「全盛期ほどでは無いにしろ、まだまだ現役なつもりだ。心配するな」

「そうか。……ああ、言い忘れるところだったが」

「？」

「俺は『全力』でいくからな」

途端。俺は、全身の毛皮が逆立つようなプレッシャーを感じ取った。辺りの空気が、一変する。

「…………ツー!!」

「だから、適度に手を抜こうなどと考えない事だ。怪我をしても構わないなら、何も言わないがな」

「ち、ちよつと待て、慎吾…………!!」

こいつ、本気だ。気を抜けば、とんでもない事になる。

「言った筈だ。たまには力を使っておかないと、腕がなまってしま
う、とな」

「何…………？」

「とつさの瞬間に出せない全力では、意味が無い。俺の全力を受け
止められるのは、お前ぐらいしかいないからな」

「……………」

慎吾の声音は、珍しく真面目だった。それに気付いた俺は、制止の言葉を、口に出す前に飲み込んだ。

こいつの言うとおり、いつも加減をするだけでは、自分の全力がどのようなものか、忘れてしまいかねない。もしも、そんな状態で『かつて』のような事があれば……

そして、俺にも、それは当てはまる。俺が全力を出せる相手も、目の前の男ぐらいしかいない。

「……ふ」

気が付くと、笑いがこぼれていた。俺は、懐に手を突っ込むと、さらに三枚のチャクラを取り出した。生徒相手ならば二、三枚で十分なので、これだけの枚数を使うのは久しぶりだ。

「学校では、まだ本気を出したことはなかったんだが……」

出す必要が無かった、という方が正しいか。

慎吾が本気の手合わせを挑んできたのには、何か理由があるのだろう。それなら俺は、全力で応えるだけ。

「ならばいい機会だ。お前の力を全校に知らしめておけ」

「ああ……久しぶりだな、お前との組み手は」

「そうだな。あの頃を思い出すよ」

俺達は、少しだけ昔を懐かしんだ。本気の手合わせは、教師になつてからは初めてだ。

「ふふ……あの頃、か、お前は昼夜問わず、俺に挑んできていたな」

「ああ。負ける事のほづが多かったがな」

確かに、俺にもやんちゃだった時期はあった。慎吾をライバル扱いして、何度となく試合をしていたような頃が。

「正直、それが無くなった今は、少し退屈だったぞ。週に一度くらいは挑んでほしいと思っていたのだがな」

「無茶を言うなよ。それに今は、生徒の相手で十分に満足していたからな」

そう、満足していた……筈だった。だが、俺は今、自分でも驚く程にワクワクしていた。久しぶりに全力で暴れられる事に……三つ子の魂百まで、とは良く言ったものだ。

「大人しくなったものだな。朝昼晩と手合わせを頼んできていた男が」

「俺ももう若くないんだ。それに、しっかりと相手を引き受けていた男に言われる筋合いはない」

「ふ………違ういな」

俺達は、顔を見合わせて、ひとしきり笑った。

が……俺の笑顔は、次の瞬間、大気圏まで吹き飛んだ。

「よし。では、勝ったほうの仕事を、負けたほうが引き受ける………
という事でいいな？」

「はあ！？ ふざけるな！ そんな約束して……」

「では、行くぞ！」

「ちよつと待てええ！！」

この日、この場にいた全員が、二人の『本気』を目の当たりにした。

その結果、彼らの全員が心から誓ったそうだ。この二人に逆らうのは、絶対に止めておこう、と……

そして……

「くそおお……」

「悪いな、誠司」

大量の書類に囲まれた獅子人は、頭を抱え込んでいる。もちろん、その横で微笑む男からは、罪悪感などミジンコほども感じられない。

「お前……最初からこうするつもりだったな!? 全然減ってないじゃないか!!」

「さてな。負けたほうが悪いのさ」

「貴様と言う奴はあ……!!」

「学校では敬語をお願いしますよ、上村先生」

「ど、どの口が、どの舌が……ちくしょうが……」

上村 誠司もまた誓ったそうだ。この男には、一切の気を許さないでおこうと……

各自が思い思いの前日を過ごし……ついに『その日』がやって来た。

キャラプロフィール(その1) (前書き)

要望があったので、ネタバレの無い範囲で、現時点でのキャラを纏めてみました。学生組のPSについては、名称だけ先出しします。簡潔な紹介ですが、読む時の参考になれば。

キャラプロフィール（その1）

ガルフレアIIクロスフィール

今作の主人公。21歳。種族は狼人で、銀色の体毛に金髪。

育ってきた環境故か、基本的には冷静だが、本来は純粹で強い正義感を持つ。また、失われた記憶への後ろめたさからか、少し卑屈でネガティブな面も見える。

トップクラスの美形ではあるが、女性の扱いは苦手。

現在、PSは使用不可であるが、素手であってもその戦闘力は常人を遥かに凌駕する。

苦勞人。いろいろな意味で。

綾瀬 瑠奈

エルリアで平凡に暮らしていた少女。種族は人間で、高校一年生。明るく勝ち気で、誰にでも分け隔てなく接する優しい性格。だが、恋愛関連には恐ろしく鈍い。

その言動には、しばしば夢見がちなほどの『甘さ』が目立つが……闘技での使用武器は弓。使用PSは 理の刃。女子でありながら、その腕前はトップクラス。

なお、怒らせると死神が降臨する。

綾瀬 暁斗

瑠奈の兄。妹とは違い狼人種。黒い毛皮に明るい金髪で、ゴーグルを額にかけている。陸上部所属の高校二年生。明朗快活で友人も多く、周りから慕われている。兄妹仲も良いが、妹からはよく遊ばれている。

妹の事を常に気にかけており、特に恋愛関係に関しては、その鈍感っぷりを心配して、無駄な気を回しがち。

家族の中では一人だけ種族が違うが、それは彼の複雑な出生によるもの。

使用武器は銃。PSは 幻影神速 。スピードを生かした戦闘スタイルを好む。

シスコン。とにかくシスコン。重症。

橘 たちばな
浩輝 こうき

瑠奈の幼なじみであり、親友。種族は虎人で、白い毛並みに茶髪。高校一年生。

性格は、良くも悪くも真っ直ぐで正直（単純とも言つ）で、短気。筋金入りの勉強嫌いだ、理数科目は得意。

瑠奈との付き合いは長く、お互いに良き理解者となっている。喧嘩が絶えない海翔とも、内心ではしっかり認め合っている。

使用武器は銃剣。PSは 時の歯車 。性格を反映した豪快な戦い方が主流だが、戦闘面では意外と頭も回るようだ。

良い意味でも悪い意味でも馬鹿担当。

如月 きづき
海翔 かいと

瑠奈の幼なじみで、友人グループの一人。青い鱗に茶髪の竜人。戦闘以外では眼鏡をかけている。

非常に喧嘩っ早く、言動が荒い為に誤解されがちだが、根は真面目。研究熱心で頭も良く、成績は学年で常にトップである。

浩輝とは日常茶飯事のように喧嘩を繰り返しているが、何だかんだで彼の事をいつも気にかけている。

PSは 紅の炎爪。武器は持たず、我流の格闘術を使用する。戦闘スタイルこそ荒々しいが、その戦略眼は確かなもの。

馬鹿っぽいけどインテリ。実はとある弱点がある。

時村 蓮

瑠奈の友人の一人。明るい朱色の鬘を持つ獅子人。

真面目で落ち着いており、メンバーのまとめ役。大人びているが、年相応の少年らしさも持ち合わせている。

瑠奈に対しては友人以上の想いを抱いているのだが、本人の奥手っぷりと、相手の神がかり的な鈍感さが重なり、今のところ進展は無い。

使用武器は槍。PSは 虚空の壁。槍のレンジを生かした、攻防一体の戦いを行う。

純情ロマンチスト。ある意味では、一同の中で最も少年らしいと言えるかもしれない。

上村 誠司

瑠奈達の担任。オーソドックスな毛色の獅子人。41歳。

真面目で厳格な教師であり、生徒から恐れられる存在ではあるが、常に親身になって生徒の為に行動している為、意外と人気は高い。

瑠奈の父である慎吾とは幼なじみであるが、自由奔放な彼に振り回されがち。昔は悪ガキだったと言うが、詳細は不明。

担当教科は歴史だが、その戦闘能力は非常に高く、闘技の教員としても優秀。

鬼教師。が、適度なフランクさを持った良い人。

綾瀬 あやせ 慎吾 しんご

瑠奈と暁斗の父にして、教師。41歳。が、年齢詐称を疑われるほどに外見は若い。

人をくったような言動を好み、常識外れな事であろうと難なくこなす。ガルを教師に仕立て上げたのも彼の差し金である。

その知識量や情報網の広さは半端ではなく、全く底が知れない。故に、彼の行動を完全に理解しているのは妻の楓ぐらいである。

その戦闘能力の詳細は語られていないが、誠司と同等レベルの力を持つのは確かなようだ。

色々な意味でフリーダムな方。

シングル♠ファーラント

謎の人物。青い毛並みの虎人で、21歳。

冷静で、感情を表に出す事は少ないが、本質は聡明で心優しい青年。

とある組織に属しており、蒼天の呼び名を持つ。ガルの事を知っているようだが、その正体は……

ルツカⅡファルクラム

瑠奈達のクラスメイトで、蓮の幼なじみ。明るいブラウンの毛並みの犬人。

普段は礼儀正しく、誰にでも物腰柔らかかに接する。また、非常に小柄で、顔も童顔で可愛らしい為、クラスのマスコットの存在。が、本人は低身長を気にしているらしい。

一方で、ガルの事を昔から知っていたらしく、シグルドとも面識があるようだが……また、怒らせると素が出るらしい。

格闘をメインに、能力補助に杖を使用。PSは神の天秤。外見に反して、その実力は学生の域を超えている。

綾瀬 楓

瑠奈と暁斗の母。40歳。

穏やかな人物で、外見はガル曰わく、瑠奈が大人になれば瓜二つだろう、とのこと。

慎吾の考えを理解出来る数少ない人物。

橘 優樹

浩輝の父親で、医者。白い毛並みの虎人で、39歳。実は慎吾から見たら後輩である。

息子とは真逆で理知的な人物だが、白衣を脱いだ時の素の性格は、

浩輝曰わく「普通のオッサン」らしい。医者としての腕は確かで、以前は大病院に勤めていたようだ。

橘たちばなけい
慧

浩輝の兄。高校二年生。毛色は父や弟と違い、オーソドックスな虎の色。

落ち着いた性格で、弟と違い勉強も出来るほう。非常に弟思いで、浩輝の事をいつも気にかけている。

時村ときむら
修しゅう

蓮の兄。大学二年生。

弟とは性格のベクトルが真逆を向いており、ノリが軽く勢いで生きるタイプ。

現在、絶賛彼女募集中らしい。

17話 闘技大会、開幕

辺り一面、見渡す限りの人、ひと、ひと。

闘技大会の会場、首都フィガロにある大闘技場の周りは、人の海と言える状態だった。

首都圏に住んでる私達にとっても、これほどの人が集まることは珍しい。それだけ、今日というこの日が、この国にとって大きなお祭りだということである。

私は去年も来たから分かってはいたけど、初めての人はそのあまりの量に圧倒されているようだ。

ただ、私にとっても、去年と今年は全然違う。去年はただ単に暁斗の応援……でも、今年は

「……………」

「どうした、瑠奈？」

「……ん？ ああ、ごめん。ちょっとね」

ボーっと人ばかりを見ていた私に、ガルが声をかける。その首には、淡く輝くムーンストーン的首飾り。

「緊張してんのかよ？」

そう聞いてきたのは暁斗。今日は普通に私服だが、当然ゴーグル

は欠かさず額にかけてある。

「正直、ね。これだけ人の注目浴びる機会って、そうそうないし」

「ま、分かるさ。俺も去年はそうだったからな」

「あまり気にするな。観客など全てワラ人形だと思えばいい」

「……それはさすがに怖いんじゃない？」

緊張をほぐすためか冗談を言うお父さんと、それに冷静なツッコミを入れるお母さん。二人も若者ファッションなため、並んで歩いても親子に見えないと思う。

「んなもん気になるのは最初の試合ぐらいだ。すぐ慣れるって」

「……一回戦で負けたら、意味ないけどね」

「心配するな、瑠奈。お前の実力は、俺が保証してやる。自信を持って」

「……ん、ありがとう」

ガルの言葉は、場の空気に飲まれて弱気になっていた私の気持ち、を、幾分楽にしてくれた。

「そっぴゃ、お前はガルにコーチしてもらったんだよな……羨ましいぜ」

「何だ、言ってくれば、お前の相手もしてやったぞ」

「いや、二人の邪魔……じゃなくて、手の内見せるのもアレだったからな」

妙な間があったのは、気のせいだろうか。

「でも、私は暁斗の戦い方も知ってるし、気にしても今さらじゃない？」

「……（俺がいたら発展しねえだろうが、このバカ……）」

「え、何だって？」

ボソボソとした声は、全く聞き取れなかった。

「……コホン！ そりゃ、俺だって新しい戦法の一つや二つ編み出してっからな」

「……ふうん」

何か引つかかるけど……ま、いいか。と、その時……

「ルナ！ 暁兄！」

人ごみの中から、聞き慣れた声が聞こえた。

「コウ……それに、みんなも！」

走ってきたのは、コウとカイ、レン。それからルツカ君も一緒だ。

「おう、全員そろってんじゃねえか」

「ああ。俺とカイで来てたら、そこでレンとルツカにも会ったんだ」

「よく見つけたね、この人混みから私達を」

「簡単だぜ。暁斗を探しやいいだけだ」

「あ、そっか」

「……俺は目印か？」

まあ、Googleをかけた人はそうそういないよね。これはこれで似合っではいるんだけど。

「さすがに今日は寝坊しなかったか、カイ。ちよいと心配してたぜ」

「……まーな。昨日は親父にパソコン禁止されてたからよ」

「ああ、成程。ま、おじさんに感謝ってとこだな」

暁斗の指摘に、少し不服そうな様子のカイ。反論は出来ないみたいだけど。

コウも「こそとばかりに便乗してカイをからかう。」

「まあまあ、そう睨むなって。日頃の行いのせいなんだからよ」

「てめえはうるせえぞ！ 何ならここで試合出来ねえ体にしてやる
うか!？」

「おお、怖」

基本的に口喧嘩はカイの強いので、珍しく優位に立ったコウはやたらと楽しそうだ。

「おい、揉め事は止めるよ。出場停止にでもなったらどうする？」

「……チツ。分かってるよ」

「それに……どっちみち今から戦うことになるんですから」

ルツカ君の言葉に、私達は少し表情を引き締める。

「そつだ……私達は今日、戦うんだ。」

「直接は当たらないかもしれない。それでも、今日の私達はライバル同士なんだよね。」

「そう考えると……何だか、『燃えて』きた。」

「……負けないわよ、みんな！」

「いい機会だ。先輩、そして兄貴の貫禄を見せてやるよ！」

「カイ……お前にだけは、絶対負けねえ」

「へっ、俺は誰にも負けるつもりはねえぜ？」

「俺だってそつだ。絶対に勝ってみせる……！」

「僕も今日は加減無しで行きます。せっかく見に来てくれた人がい

るんでね」

全員が、お互いへの宣戦布告を行い……そして、笑いあう。

「今日は後腐れはナシだ。誰が勝っても恨みっこナシだぜ？」

「当然だよ。私と当たるまで、負けないでよ？ みんな」

「誰が。お前こそ、知らない誰かごときにやられんなよ？」

ライバルだからこそ……互いに健闘を祈る私達。うん、何だか青春ドラマっぽくていいね……なんて。

私達の様子を見て、ガルは静かに口を開いた。

「全員、調子は良さそうだな」

「おう、バッチリだぜ！」

「トレーニングの成果も上々だし……昨日は充電も出来たからな」

そう言えば、昨日は遊んでたんだっけ、みんな。まあ、私は私で、ガルと楽しくやれたから満足だけどね。

「頼もしいわね。本当にこの中から優勝者が出るんじゃないかしら」

「俺は暁斗を教えていたが、可能性は低くないと思うぞ。ガル、お前の教え子達はどうか？」

「ふ。皆、学生にしておくのが惜しいくらいだ。彼らの実力は、俺が保証する」

「へへっ、太鼓判を押されちまったな」

「期待しといてよ、お父さん、お母さん。絶対にやってみせるからさ」

自惚れるつもりは無い。けど、ここまで来たなら自信を持っていかないかね。勝負は気持ちが負けたらそこで負け……上村先生によく言われてた事だ。

「ガル、どうだ？ 教師として、何か言葉を贈ってみては」

「俺が？ ……そうだな……」

お父さんの振りに、ガルは真剣な表情で考えている……真面目だよね、やっぱり。

「正直、俺はこういう事に慣れていないから、あまり上手い事は言えないが……一つだけ、お前達に守って欲しい事がある」

「守って欲しい事？」

「ああ。それは……この大会を楽しむ事、だ」

ガルは、真剣な目つきで一同を見渡した。

「この大会に向けて、思う事はそれぞれあるだろう。優勝したい、あいつには負けない、などな」

コウとカイが、お互いの顔を見合わせている。

「勿論、それは悪い事ではない。だが、それに拘りすぎてしまえば、勝ち負けだけしか見えなくなってしまっからな」

「……………」

「勝たねばいけないと言う思いは、緊張に繋がる。そして、緊張すれば本来の実力など出せはしないだろう」

「そうだな……………」

暁斗が呟く。部活の大会とかを重ねている彼には、いろいろな心当たりがあるのだろう。

「勝敗など無意味、とまで言うつもりは無いが、俺はお前達に、実力が出せなかったと後悔してほくはない。だから……………楽しめ。そうすれば、敗北しても悔やむ必要が無い程に、自分の力を出し切れるだろうからな」

そう口にするガルは、うっすらと微笑んでいた。

ガル話を聞いた私達は、少しだけ考え込むように口を閉じていた。楽しむ事が大事、か……………確かにそうなのかもね。

「上手く纏められた自信は無いが……………俺が言いたいのは、これぐらいいだ」

「いえ……………ありがとうございます、先生。凄く、ためになる話でしたよ」

「何っーか、ガル……………だいぶ先生っぽくなったよな」

「そうか？ そう言って貰えると有り難いが……俺はまだ、未熟だよ」

「そうでもないさ。あいつも昨日はお前の事を誉めていたぞ」

お父さんは満足げな表情で笑っていた。……あいつって誰だろ？

「ところで、ガルに振ったんだから、父さんも何か言葉はあるんだよな？」

「俺か？ そうだな……」

暁斗がお父さんに問いかけると、お父さんは考え込むようなポーズをとった。……あくまでもポーズだ。何も考えてないに10万ルーツ賭けてもいい、私は。

「……まあ、なんだ。頑張ってるい」

『投げやりすぎだろ（でしょ）！！』

あんまりすぎる内容の薄さに、私と暁斗が思わず突っ込む。

「いや、なに。言葉を贈る奴が、もう一人着いたみたいだからな」

「え？」

「み、見つけたぞ……」

私達の背後から、恐ろしく低いトーンの声が聞こえてきた。この

声は……

「遅かったな、誠司」

「先生！」

やって来たのは、私達の担任の上村先生だ。いつもと違ってラフな格好だから、一瞬分からなかった……それにしても、何かヤケにふらついてるんだけど。

「どうした、寝不足か？」

「貴様のせいだろうか！」

牙を剥き出しにして唸る先生……あれ？ そんなキャラだった、先生。

「生徒の前では敬語を使うのではなかったのですか、上村先生？」

「わざとらしく言うなうざりたい！ 昨日いろいろバレたから、もうどうでもよくなったんだよ！」

「そうか……ひと皮剥けたな」

「ああ、おかげさまでな！ ついでだ、お前の皮もリアルに剥いてやるつか！？」

……何があったかは分からないけど、とりあえず、いろいろ被害をお父さんから受けたらしい。この二人が幼なじみって事は知ってるけど……

「せ、先生、とりあえず落ち着いて下さい。こんなところでもめ事はちよつと……」

「……む」

遠慮がちにたしなめるレンの言葉に、先生も今の状況を思い出したようだ。軽く周りの視線を集めている事に気付き、さすがの先生も少し恥ずかしそうだ。

「全く、これではどちらが生徒か分からんな。きちんと若者の規範を示してもらいたいものだ」

「貴様が言うな！！……コホン。いよいよだな、お前達」

先生は気を取り直すように咳払いすると、私達に向き直る。そう、いよいよだ。

「俺は、教員として多くの生徒を見てきた。だからこそ自信を持って言えるが、お前達は皆強い。それこそ、優勝も十分に狙える程にな」

「優勝……」

「勿論、それが楽に達成出来るものではない事は、お前達にも分かっているだろう。この中の誰かがぶつかる事もあるかもしれない」

私達は、互いに視線を交わし合った。当たり前だけど、勝負には必ず敗者がいる。みんなが仲良く勝利する、なんて事は有り得ない。

「だが、俺が一番望んでいるのは、結果を出す事ではない。自分の力がどこまで通用するか、どうすれば先に進めるのか……この大会が、それを知るきっかけになる事だ」

私が今、どれだけ戦えるのか…… 武術を習い始めたあの時から、どこまで強くなれたのか。今までの成果を試す時がやって来た。

「俺からの課題は一つ。悔いを残すな。全力でぶつかれ。自分の全てを出し尽くすんだ。そうすれば、先に言った事も見えてくる……分かったな？」

「……はい！」

一同、声を揃えて返事をする。何だか、一気に気合いが入った気がする。

「まあ、結局のところ、お前達には、この大会がどういうものかを感じてもらいたいのだ、俺達はな。努力したのならば、結果は後から付いてくるものだ」

最後にお父さんが、締め括りのように言う。美味しいところを持つていくのが、何ともこの人らしい。

「年に一度しかないせつかくの好機、余計な事を考えて棒に振るうのは勿体無いぞ。しっかりと、この大会を堪能するんだ」

「……うん。そうだね！」

つい先程まで感じていた緊張が、完璧とまでは言わなくとも、殆ど消えていた。今なら、ちゃんとやれそうだ。

「さて、と。みんな、そろそろ行ったほうが良いんじゃないかしら？」

「あ……そうだね」

お母さんに言われて、携帯で時間を確認する。時刻は午前8時。選手は9時までには受付や準備を済ませなければならぬ。

「この人混みじゃ、移動するのも大変そうだな」

「だな。下手すりゃ受付に遅れちまいそうだけ」

「うえ……そんなんで失格とか、勘弁してくれよ」

「そうならないためにも、早く行きましようか。装備のチェックもしておきたいですからね……では、先生方。僕達は先に移動させてもらいますね」

一同はルツカ君のその言葉に頷くと、会場に向かって歩き始める。

「みんな。……頑張ってこい。お前達ならやれる」

「俺達もしっかりと見物させてもらう。くく、誰が優勝するか見ものだな」

「俺やガルが教えた事を忘れるな。ここまで来たら、自分を信じる」

「はい。じゃ、行ってきますー！」

背中に先生達のエールを受けつつ、私達は会場の中に入っていた。

「……………」

「心配か、ガル？」

会場に入っていく瑠奈達を見送った後、俺は慎吾から声をかけられた。

「…………いや。心配ではない、と言えば嘘になるが、それ以上に……楽しみだ。ひと月程度だけだが、自分が教えた彼らがどこまでやれるのか、な」

彼らの実力が本物である事は、手合わせをしてみても肌で感じている。無論、まだ未熟さは目立つが、学生という枠組みで見ればトップクラスと言っても良いだろう。

優勝、と言う慎吾の言葉も、あながち身内の贔屓目だけとは言い切れない。俺自身も期待している。

「くく。教師と言う仕事も、なかなか悪くないだろう？」

「……そうだな。最初は困惑しかなかったが、こんな気分が味わえるのならば……良かったと思える」

あれからひと月。実際のところは俺自身にも、慎吾がどんな手を使ったのかは未だによく分からないままだ。最近では、深く考えるだけ無駄な気もしてきたが。

「ふふ。そう考えられるならば、やはり君は教師に向いているな」

「……俺が……ですか？」

「ああ。生徒の成長を喜べる事は、教師として重要な才能だ。それが出来る以上、君は一人前の教師だと俺は思っている」

「……」

上村先生の言葉に、自分の尻尾が軽く揺れるのが分かった。

「さて、優樹達は少し遅れると言っていたが、せっかくだから少し待ってみるか」

「そうね。みんなの試合までに間に合えばいいんだけど」

……そう言えば、海翔や蓮の父親とも、慎吾達は幼なじみであると聞いた。親の交流があるから子供達が仲良くなったと言うのは分かるが、それが全員、このような大会に参加するとは、考えてみれば数奇なものだ。

「……それとガル、前にも話したが、誠司は俺の幼なじみだ。だから、こいつにも敬語はいらんぞ」

「む……そういう訳にはいかないだろう。職場の先輩に敬意を払うのは当然だからな」

「それは俺もなんだが？」

「お前の場合は状況が違うだろう……と言っより、こっつう話はお前じゃなくて本人が……」

「俺は別に構わないぞ、ガル。少なくとも学校の外では、教師としての経歴など気にしなくていい」

「……む、むう。ど、努力はしてみま……してみよう」

全く生真面目な奴だ、などと慎吾がぼやいている。どうやら彼は、単純に畏まった態度が苦手なようだ。

学校と違って、上村先生の側が割とフランクな口調だから、少しはやりやすいが……

丁度、その時だった。

「……失礼」

「ん……？」

不意に後ろから聞こえてきた声。それが自分達を呼ぶものだと気づき、俺は振り返る。

そこに立っていたのは、青い毛並みの虎人の男性。
年の頃は俺と同じぐらいであろう。その背中に斧槍を背負っている事から、どうやらエルリア人ではなさそうだ。

その青年の姿を認めた慎吾が、軽く目を細めている。

「君は……シグルド、か？」

「……お久しぶりです。綾瀬 慎吾」

頭を下げる、シグルドと呼ばれた青年。彼と目が合った瞬間、何故か……頭の中に、ちくりとした衝撃が走った気がした。

18話 トップバッター

『それではここに、闘技大会の開幕を宣言します!』

この大会の理事だと言う老人の言葉を最後に、大会の開幕式が終わった。話の内容は、もちろん右から左へ抜けてったけど。

「はあ……話長えっつーの、あの爺さん」

「全くだぜ。どうせ誰も聞いてねえのにな」

浩輝とカイがげんなりした様子で愚痴っているが、俺も今回は心から同意だ。言っちゃ悪いが、大会の歴史やら語られても、俺達にはさほど興味がない。

大会の舞台となる闘技場は、学校のそれをそのまま大きくしたような感じだ。円形のリングの全周囲を観客席が囲むような形になっていて、リングには、全ての選手が集まっても十分すぎるほどの余裕がある。

ちらつと横にいる瑠奈を見ると、やっぱり緊張しているみたいだった。周りは殆ど男子だから、心細いつてもあるかもな……お願いだから、こいつとは最後まで当たらないでいてほしい。

この大会の特徴として、自分の試合がいつ、誰とあるのか、自分の順番がくるまで知る事が出来ない。試合が終わる度に、選手の中からランダムで名前を呼ばれるのだ。

理由としては、この大会は、真剣勝負の場であると同時に、この国でも大きなイベントの一つ……つまり、エンターテイメントでもあるからだ。どんな試合であるか、蓋を開けるまで分からないほう

が面白いだろう、って事だ。

「それにしても……分かったはいたけど、凄い人だな」

「そうですね。さすがにちょっと緊張してきたかも……」

蓮とルツカも、周りを見回しながらそんな事を言っている。

選手の人数は、おおよそ百人。それに対して観客は……数え切れないか。確か、この会場には三万人強が入れた筈だ。上方には試合がよく見えない人の為の、大型スクリーンも出されている。

ちなみに、選手およびその身内は、優先的に前のほうの席を取れたりする。

「暁斗はさすがに落ち着いてるみたいだね……」

「ん？ まあ、俺は二年目だし、こういう舞台には慣れてるし」

まあ、陸上の大会とはまた空気が違うんだけど。緊張してねえって言ったら嘘になるしな。

「はあ……暁兄はやっぱり場数が違うよな。俺は、自分の試合が来るまで落ち着けそうにねえぜ。なんかこう、緊張と言うより、高ぶっちゃまってよ」

「ま、意気込んでても、初日に試合が無かったりするけどな」

「……うえ。そんなの、生殺しじゃねえか」

かく言う俺も、去年は初日に試合が無かった一人だ。ま、一つしかないリングで一試合ずつだし、人数が人数だからな。

大会はこれから数日にわたって行われる。勝ち残れば学校も公欠が取れるから、その辺は問題ない。

『……それでは、只今より、第一試合から第三試合までの選手を発表します。呼ばれた選手は、控え室にて準備を行って下さい』

そんなアナウンスが流れ、選手達は一様に話を止め、放送に耳を傾ける。さて……どうなるやら。

『……一回戦、佐久間 健選手、綾瀬 暁斗選手。二回戦……』

「……お」

自分の耳と尻尾が、ピクリと跳ねたのが分かる。瑠奈達の視線も、俺に集まった。

三回戦までの名前が読み終わったが、俺達の中で呼ばれたのは、俺だけだった。

「暁兄……」

「トップバッターはお前みたいだな？」

「だな。ふう……さすがに予想外だったな。参ったぜ」

去年の試合が遅かった反動だろうか。まさか、こんな早くに順番が回って来るとはな。

「暁斗さん、大丈夫ですか？　さすがにプレッシャー……」

「……はは」

「？」

「一試合なんて、絶好の見せ場じゃねえか。良いねえ、テンション上がってきたぜ！」

初戦の内容は、大会そのものの盛り上がりにもだいぶ影響するだろう。なら、俺がしっかり盛り上がりねえとな！

「さすがお兄ちゃん……嬉しいと言っか何と言っか」

「ガルも言っけたろ？ 勝負は楽しまなきゃな！」

試合前のこの高揚感は、部活も闘技も一緒。そして俺は、この感覚が好きだ。

「とりあえず、早く行った方が良いぜ。間違っても負けるんじゃないぞ？」

「誰に言っただやがるんだ、カイ。任せとけ、お前らの為にも、勝って景気付けしてやるよ。ついでに、兄と先輩の威厳を思い知らせてやるぜ！」

わざとらしく親指を立てると、瑠奈が苦笑した。俺が勝てば、少しはこいつらの緊張も和らぐだろう。絶対に負けられねえな。

「よし……それじゃ、行って来るぜ！」

「暁斗、頑張ってこいよ」

「ファイト、お兄ちゃん！」

みんなの声援を受けながら、俺は意気揚々と控え室に向かった。

19話 幻影神速

俺は、昔から走る事が好きだった。

俺が陸上部に入っているのも、ただ単に走りたかったからだ。勿論、部活には辛い事だつてあるけどな。

何で好きか、と言われても、その感覚を上手く伝えるのは難しい。敢えて言葉にするなら、脚から伝わってくる大地の感触や、吹き抜ける風が心地良いから、つて感じた。

それに、大会とかに出て結果を残す事が出来れば、みんなが俺を誉めてくれた。父さんも、母さんも、瑠奈も。

走っている間は、俺と言う存在を、みんなが認めてくれている気がした。それが、堪らなく嬉しかったんだ。

嫌な事だつて……全て忘れる事が出来た。

きつい時でも部活を辞めようと思わないのは、走るのが好きなのはもちろん、俺が負けず嫌いだからだろう。

負けた事そのものは認めなくちゃいけないけど、負けっぱなしは嫌だ。自分より速い奴がいるなら、俺ももつと速くなりたい。

そういう意味では、闘技も一緒だ。去年は負けちまったけど、今年には勝ちたい。

陸上も、闘技も、今の自分より先があるなら、少しでも前に進んでみたい。自分がどこまで行けるのか……俺は、それを確かめたいから。

観客席のざわついた声と、大会特有の熱気を感じて、俺は意識を現実に戻す。

この感覚……自分がこんなに大勢の人の注目を集めてる気分。部活にしろ闘技にしろ、慣れるまでは大変だったが、今ではむしろやる気が出て来る。

対戦相手は熊人。体格は大柄で、武器もそれに見合った、威力のありそうな大剣。試合用で斬れはしないとは言え、当たれば痛いじや済まなそうだ。

俺の防具は、衝撃を和らげる素材の防護服。一般的な闘技用の装備だ。向こうはそれに加えて、腕や脚にもプロテクターを着けている。ちなみに、防具は基準を満たしていれば自由だ。

「よろしく頼む。良い試合が出来るようにしよう」

「ああ、こちらこそ。お互い、悔いの残らないようにしようぜ」

相手が話し掛けてきたので、そんな会話を交わす。けっこう感じの良い相手だな。試合が終わったら友達になれそうだ。

ちなみに、試合が始まると、選手が事前に身に付けた小型マイク

のスイッチが入り、会話が筒抜けになったりする。それもまた、インターテイメントとしての趣向らしい。

観客席を見渡す。こん中のどっかにみんながいるんだよな……俺らの席、どこら辺だっけ？

「……ん？」

そんな中、視界に入ったのは、数人が掲げる大きな垂れ幕。目を凝らしてよく見ると、それを掲げているのは、俺のよく知る連中だった。

「あいつら……！」

部活の先輩後輩に、クラスメイト達。中心にいるのは、寺島に北村だ。みんな、来てくれたのか……それに、あんなもんで作つて。やべ、嬉しい。

何て書いてあるんだ？ えっと、負けるな……

【負けるなシスコン狼！！】

「テメエ等あああああ！！」

声は届くわけがないが、叫ばずにいられなかった。こ、こんな大勢の中で何て事してんだ、あのバカ共！ 恥晒してレベルじゃねえぞ！？ ……しかもシスコンだけ派手なカラーリングにしてんじゃねえ……！！

俺の様子に気付いたのか、寺島と北村が親指を立てた。とりあえ

ず、俺の感動を返せ。

「……………大丈夫か？」

「あ。だ、大丈夫大丈夫！ はははは……………」

対戦相手の声に、俺は我に返った。彼からしてみたら、俺がいきなり奇声を上げたんだからな……………うう、恥ずかしい。あいつら、マジで覚えてろ……………後でまとめて蜂の巣にしてやる！

『両者、所定位置にて、構え』

と、そんな事に気を取られてる場合じゃなかったな。俺達は、審判の声に従い、ある程度の距離をとって、向かい合う。

向こうは大剣を正面に構え、俺は愛用の二丁拳銃をホルスターから抜く。

『第一試合、綾瀬 暁斗対、佐久間 健……………』

いよいよ、だな。

当然、相手だって勝利の為に努力をしてきた筈だ。けど、俺だって負けてやる訳にはいかない。あいつらの前で、無様な姿は見せられねえからな。

『試合……………開始！』

ゴングが、会場に鳴り響く。真の意味での、大会の幕開けだ。

先手を打ったのは俺。ゴングとほぼ同時に、俺は両手のトリガーを引いた。

俺の使う銃は、扱いやすさを重視して、反動を出来る限り抑えるようにカスタマイズされたもの。ま、反動が軽いのは、実弾じゃないからってのもあるんだけど。

相手に向かって飛んでいく二発の銃弾。しかし、向こうは特に慌てる事もなく、それを正確にガードすると、こちらへと一気に踏み込んだ。やっぱり、そう簡単にはいかねえか……！

俺は後ろに下がりつつ銃撃を繰り返す。だが、相手も大したもの、俺の攻撃を剣や防具で的確にいなしていく。

「こんなものか？」

「へっ、まだまだ始まったばかり……だろ！」

俺はバックステップで距離をとりながら、牽制の銃撃を繰り返す。相手は典型的なインファイト。距離を詰められる訳にはいかない。勝敗は主に、片方が戦闘続行不能となったり、降参したり、片方の勝利が明らかだと判断されたり（例えば、相手の喉元に武器を突き付けた状態など）、と言った場合に決まる。

あの大剣を喰らっちゃえば、最悪の場合、一撃で気絶してしまいかねない。接近されれば、文字通りのジエンドだ。

けど、決定打が入れられないまま、最初の弾切れ。俺は軽く舌打ちして、リロードの態勢に入る。

当然、それは相手にとってはチャンス。相手は俺の隙を見逃さず、一気に距離を詰めてくる。速い……！！

「ちっ！」

俺は一気に二丁分の装弾をするのは諦め、ひとまず片方のリロードを済ませ、射撃する。少しだけ、相手の足が止まった。その際に距離を空け、もう片方にマガジンを装填。

「どうした、ちょこまかと逃げ回るだけか？」

「挑発には乗らないぜ。生憎、足の速さには自信があるんで……」

「！」

そう言いつつも、先程よりも距離が詰められているのには気付いていた。いくら足に自信があると言っても、前に走ると後ろに走るの、どちらが速いかは考えるまでもない。

それに、相手はかなりガンナー慣れしている。じゃなきゃ、銃口から起動を読んでガードなんか出来はしないだろう。このままじゃ、いずれ押し負ける。

とは言え、相手もかなりじれったくなってきたる筈だ。後は……勝負に出るタイミングを見計らうしかない。

このまま逃げ続けてもギリ貧ならば、ある程度近づかれてから、逆にこちらから距離を詰める。

それは相手の意表を突いてリズムを崩すと同時に、俺の攻撃の命中率を上げる為。至近距離からの銃撃なら、避けられる事は無いだろう。

勿論、リスクは半端じゃない。タイミングを間違えればこちらが終わり……勝負は、一瞬だ。

俺は慎重に残弾を計算しつつ、その瞬間を待った。相手の攻撃が

届かず、かつ、こちらのターンに持っていける絶妙な間合い……

あと少し……

3……

2……

1……！

（ 今だッ！ ）

その瞬間、俺は全身のバネを使って、前方に向かって駆け出す。

あっという間に、俺と相手の距離が縮まった。

ベストな間合い。タイミングにも狂いは無い。俺の読みは完璧だった。

相手が急に、スピードを上げた事を除けば。

「な!？」

相手はあくまでも冷静に、一瞬にして俺の脇をすり抜け、背後に回った。逆に俺は、予想を裏切る相手の動きに、体勢を崩してしま
う。

やられた……こいつのPSは、加速かよ!？

「詰めが甘いな」

この野郎、俺の作戦も読んでやがったか……くそ！
俺が何とか振り返ると、そこには今にも俺に大剣を振り下ろそうとする相手の姿。『このままじゃ』回避は不可能。

「！」

その時、相手は、いや、会場にいる大半の人は、俺の敗北を確信しただろう。無惨に吹き飛ばされる俺の姿、それが次に映る光景……誰もがそう信じて疑わなかった。

次の瞬間、相手の攻撃が、空を切るまでは。

「……………！？」

今まで終始冷静だった相手の熊人が、初めて動揺を見せた。まあ、そりゃそうだろう。いきなり、相手が目の前から消えたんだからな。

「ふう、危ない危ない……………」

「ッ……！」

俺の呟きに、相手は慌てて俺の声が聞こえた方に……つまり、自分の後ろに振り返る。俺は窮地を脱した事に深い息を吐く。

「相手がPSを使うまで、切り札は取っておく……………そう考えてたが、

危づく出し惜しみしたまま終わっちゃうところだったぜ」

「な、何をした……！」

「ん？ あんたと同じ事」

「同じ事、だと？」

「そ。脚力を中心とした身体能力と、反射神経の向上。それによって得られる加速効果……それが俺のPS ソニック・ウェイジョン 幻影神速。まあ、ごく一般的な強化系能力さ」

相手は、混乱した頭なりに俺の言葉を飲み込もうとしているようだ。俺を睨み付けつつ、武器を構え直す。

「何がごく一般的だ。全く、見えなかったぞ……」

「言っただろ？ 足の速さには自信があるってな」

相手のPSが同系列なのは幸運だった。自分で言うのも何だが、最高速度って意味で、俺はこの力に自負を持っている。

原理の違いはあれど、一般的な加速能力の効果は、単純計算で1・5倍〜2倍程度のスピード上昇。俺の最高速度は……3倍以上だ。今や、相手が握ったスピードのアドバンテージは、俺が握り返した。

「そういう訳だ……お互いに切り札を出した事だし、一気に行かせてもらっぜ」

そう宣言してから、俺は異能を再び発動させる。そして 最大

スピードで、銃撃を加えつつ相手の懐めがけて飛び込んだ。

「く……！？」

相手も加速系、反射能力が上がっているのだろう、俺の初動を何とか防ぎ、反撃に転じようとする。だけど、悪いな……俺のほうが、速い！

「おおおッ！！」

相手のカウンターをくぐり抜け、防具の隙間を縫っての零距离射撃。当然、回避のしようがある筈もない。

「が、ぐ……！」

相手の口から苦鳴が漏れる。競技用とは言え銃撃は痛いらしいが、今は試合中。悪いが、遠慮は無用だ。

銃は接近戦に弱い、なんて思われがちだ。だけど、実際はそうとも限らない。確かに遠距離ならば一方的に攻撃出来るが、近距離であるうと武器の威力が落ちる訳じゃないのだから。

ついでに言えば、俺の最も得意とするレンジは……銃と体術を織り交ぜた接近戦。

「容赦はしねえ……！」

苦し紛れに振り下ろされた大剣を横に避け、俺は脚に力を込める。さつきも言ったが、PSを発動している間、俺の脚力は跳ね上がっている。つまり……キック力も大きく向上させる事を意味している！

「これで……トドメだ！」

渾身の力を込めた回し蹴り。それが、寸分変わらず相手の脇腹に突き刺さる。

確かな手応え。相手の身体が、軽く宙に浮いた。

「……………ッ」

そのまま受け身も取れずに、相手は仰向けの体勢で地面に叩き付けられる。俺は吹っ飛んだ相手に素早く接近すると、その頭部に銃を突き付けた。

闘技の勝利条件の一つである、実戦ならば確実に決まっている状況。

『……………そこまで、勝負あり！』

審判の宣言に沸く会場。

俺は歓声を浴びながら、何とも言えない心地良さを感じていた。

試合終了と共に、マイクのスイッチは落ちる。俺は銃をホルスターにしまうと、自分の呼吸を整えつつ、対戦相手の様子を伺う。意識ははっきりしているようだ。

「はあ、はあ……おい、立てるか？」

「ぐっ……………何とか、な」

片手で脇腹を庇いつつ、相手はゆっくりと起き上がる。ちょっとやりすぎちゃったか？ けど、手を抜ける相手でもなかったからな。

「だけど……完敗だ。悔しいが……いい経験になったよ」

「俺も、あんたとやれて楽しかったぜ。一步間違えたら俺が負けた……ふう……見ての通り、余裕も残ってねえしな」

「消耗の激しさが欠点、と言ったところか。スピード強化の宿命だな」

相手の指摘に、俺は苦笑を返す。3倍以上のスピードで動ける、とは言っても、早く動けば、当然そのぶん多くのエネルギーを消費する。最高速度だと、保って十数秒でバテちまうんだ。

相手は、笑顔で俺に手を差し出してきた。俺はそれを、しっかりと握り返す。

「俺に勝って先に進むんだ……無様な負け方はしないでくれよ？」

「ああ、任せな。あんたが恥ずかしくないよう、バッチリ優勝してきてやるよ！」

対戦相手のエールを受け、俺は意気揚々と控え室に戻っていった。

「アツキ〜!」

俺はまず、瑠奈達のところじゃなく、寺島や北村、他のクラスメイトのところに向かった。

「ナイスファイト、綾瀬!」

「先輩、カッコ良かったです!」

「はは、ありがとよ、みんな」

みんなの言葉に、自分の尻尾がどうしようもなく揺れるのを感じる。抵抗出来る訳もない。めちゃくちゃ嬉しいんだから。

「でも、よく最前列なんて取れたな」

「ん、知らねえのか? この席取ってくれたの、慎吾先生だぜ?」

「瑠奈ちゃん達のクラスメイトの分も、全部確保してるって言うだけど、先生」

「……………」

そついや、俺達の席も最前列だっけ…………この大会にコネでも持つてるんだろうか、あの親父は。まさか、俺が初戦だったのも、あの人の差し金じゃねえだろうな?

…………うん。あの人ならマジでやってそつで怖い。

「それより、瑠奈ちゃん達のところに戻ってあげなよ。みんなアツキーを待ってると思うよ?」

「おう。じゃあみんな、また後でな!」

俺はみんなに手を振ると、自分の席に向かって駆け出し 途中
で、ある事を思い出して、引き返す。

「何だよ?」

「いや、忘れるとこだった……聞かなくてもだいたい分かるけど、『アレ』の首謀者、誰だ?」

みんな『アレ』が何であるかはすぐ察したらしい。俺の言葉に
みんなは一斉に寺島と北村を指差した。予想通りの事実には、俺は
満面の笑みで、状況がよく分かってない様子の二人に近付いていく。

「あ、アツキー?」

「おい、お前目が笑ってな……」

「二人とも……だ・れ・が! シスコンだあああああ!」

鉄拳制裁×2。明日にはコブになるかもな……当然の報いだ、バカ共。

20話 邂逅、監視する者

「うーん……暁斗さん、前より更に強くなってるみたいですね」

暁斗さんの勝利で終わった第一試合。それを見て、僕はそんな感想を口にした。

去年も、蓮達に連れられて大会は観戦したけど、あのスピードでの銃撃は、そう簡単に対処出来るものじゃない。

持続時間は短いみただけど、1対1の試合においては、トップクラスに厄介な能力と言っても良さそうだ。

「知り合いが勝ってくれたのは嬉しいですが、ライバルとしては複雑かも、ですね」

「だなあ……暁兄と当たったら、かなりキツそうだな」

僕がこの大会に出た理由は、みんなに誘われたから、程度ではない。かと言って、出場した以上は負けるのは癪だ。

「……あの人の前で、醜態をさらす訳にもいきませんからね」

「ん、何か言ったか、ルツカ？」

「いえ、別に。あ、戻ってきましたよ」

僕が指差した先には、軽く駆け足で戻ってくる暁斗さんの姿。

「お兄ちゃん、お疲れ様！」

「へへ、サンキュ。どうだ？ バッチリ盛り上げてきたぜ」

「ま、俺にはかなわなえだろうが、よくやったほうじゃねえか？」

「……おいこらくソトカゲ。俺、一応はお前の先輩だからな？」

挑発と言うか、手荒い激励と言うか、そんな如月君の言葉に軽く顔をしかめながら、瑠奈さんの隣に座る暁斗さん。

「あれ、そう言えば父さん達は？」

「あ、何か、優樹おじさん達を待ってたり色々してたら時間ギリギリになって、移動してる間に試合が始まったから立って見てた、ってメールに書いてたよ」

「じゃあ、試合は見てくれたんだな……っと、噂をすれば影って奴か？」

暁斗さんの視線を追うと、数人の見知った顔が目に入る。僕は、その中に予想外の人物を見付け、目を細めた。

「あれ、優樹おじさん達はいないね」

「ああ……それに、後ろにいるあの人は誰だ？」

ガルフレアさんの後ろを歩くのは、青い虎人。みんなは当然知らないだろうけど、僕はその人の事をよく知っていた。……成程、こういう形でコンタクトを取ってくるとはね。

僕は立ち上がると、その人に向かって頭を下げた。向こうも、僕の姿を認め、軽く笑みを作っている。

「ん、ひょっとして知り合いなのか、ルツカ？」

「ええ。みんなにも紹介させてもらいますよ」

そうこう話しているうちに、先生達がすぐ側までやって来た。

「初戦突破おめでとう、暁斗」

「よくやったな、暁斗。さすが俺達の子だ」

「ひと月前より、格段に動きのキレも上がっている。正直、驚いたぞ」

「へへ……」

先生達にも誉められて、暁斗さんの尻尾は分かりやすいぐらいに動いている。

「慎吾が自信を持って優勝出来ると言っただけあるな。お前達も気が抜けんぞ、綾瀬達」

「はい。えつと、それで……」

一通りの激励が終わると、みんなの視線は、見知らぬ青年へと集まった。僕は溜め息をつき、立ち上がる。

「まさか、先生達と合流しているとは思いませんでしたよ……ようこそ、シグルドさん」

「済まないな。入り口で彼らを偶然見かけたので、声をかけたんだ」
たぶん嘘だ。最初からコンタクトを取るつもりで、準備していたんだろう。

「君達とは、始めて逢う事になるな。俺はシグルド＝フアーラント。ルツカとは旧知の仲で……彼の兄のようなものだ。よろしく」

「あ、はい。よろしくお願いします」

みんなに一礼するシグルドさん。今は『任務外』だからか、割と穏やかな笑みを浮かべている。それにしても、兄、か……この人は口下手だから、頑張って考えたんだろうなあ、とか思ってしまう。

「ふ、まさか彼を呼んでいるとは思わなかったぞ、ルツカ」

「すみません。僕自身、来てくれるかどうか微妙だと思ってましたから」

綾瀬先生は『あの時』に顔を合わせたぐらいだから、別にシグルドさんに変なイメージは持っていない筈だ。

どちらかと言えば、僕についてよく知っていて、なおかつシグルドさんの事を知らなかった蓮の方が、訝しげな表情をしている。

「そう言えば、蓮にも話した事ありませんでしたね。機会があれば紹介しようと思ってたんですが……彼、各地を飛び回ってるから」

「そうなのか……今でも連絡してたのか？」

「ええ。父さんは知っている筈ですから、後で聞いてみれば良いと」

「思いますよ」

「……分かった」

蓮は基本的に、僕の過去について深く突っ込もうとしないので、あまり自分で語りたくない、と言う様子であれば、引き下がってくれるから有り難い。父さんに丸投げする形になるのは申し訳ないけど。

「あ、そうそう。そういや、親父達はどうしてるんすか？」

「ああ、どうやら例年以上に渋滞が酷いらしくてな。一応、大会は生中継で観ているらしいが、到着するまでは少し時間がかかるらしい」

「じゃあ、父さん達が来るのはもう少し後になるのか……それはともかく、僕はガルフレアさんとシグルドさんの様子を観察していた」

「……どうした、ルツカ？」

「あ、いえ。クロスフィール先生とシグルドさんって、似てるな、と思っまして」

「そうなのか？ 自分ではよく分からないが」

「あ、でも私も分かるかも。何て言うか、物静かな雰囲気だよな」

……視線や声音から、動揺は感じられない。演技って事は無いか。潜入工作の訓練は受けているとは言え、この人は芝居が苦手だ。

僕達の事を覚えているなら、ここまで完璧な演技は出来ないだろ

う。そもそも、僕やシグルドさんの存在を察知した段階で、姿を消そうとするはずだ。間違つても、ここまで無防備になりはしない。シグルドさんに目配せすると、彼は小さく目を閉じて首を振った。最初から反応無しだった、と言う事だろう。

……これで良かったんだ。ガルフレアさんは、僕やシグルドさんの事を、完全に忘れていて。これで、僕達が彼を『処分』する必要は無くなった。

シグルドさんには……少し酷かもしれないとは思っけど。

「さて、お前達。喋るのも良いが、試合はしっかり見ておけよ。誰が次の対戦相手か分からないんだからな」

「あ、いけね、そうだった」

上村先生の言葉に、僕達はリングの上に視線を移した。二人の学生が、互いの全力を賭けて戦う場所。

観戦するのも、なかなか楽しいものだと思う。何しろ、PSは多種多様だ。見たことも無い戦法には、僕だって唸らされる事がある。

……もつとも、僕も今回は、少し『本気』でやるつもりなんだけどね。

『ルツカ＝ファルクラム選手、城島 真也選手は控え室に……』

そして、何試合かが過ぎた頃、僕の名前が呼ばれる。僕はゆっくりと立ち上がった。

「次は僕、ですか」

「ルツカ……」

「心配しなくていいですよ、蓮。僕は負けませんからね」

対戦相手には悪いけど……シグルドさんの手前だ。遠慮なく、やらせてもらおう。

21話 摂理の天秤

名前で誰でも分かるだろうけど、僕はエルリアの生まれではない。

昔の事を知っている人は、ごく僅か。シグルドさんやフェリオさん達はともかく、他は蓮と修兄さん、それから両親ぐらいだ。綾瀬さん達にすら、殆ど話した事は無い。

一つだけ言えるのは……あの時の生活は、今と比べれば『地獄』だったという事だ。

そんな僕に手を差し伸べてくれた今の両親には、感謝している。僕を受け入れてくれた蓮や修兄さんにも、友達になってくれた綾瀬さん達にも。

彼らといる時、僕は本当に安らいでいる。僕も、こういう普通の暮らしが出来るんじゃないかって、『錯覚』を覚える。

それでも僕は、それが幻影であると理解している。

僕のもう一つの顔。みんなに見せている僕とは違う側面。僕は、この道を進むのを、止める事は出来ない。

僕の一番大切だった人の願い。それを叶える為。そのためならば、僕は……

僕の対戦相手は、狼人。如月君と同じくらい大柄で、僕からしたら見上げるくらいに体格差がある……その身長、10センチくらい分けて欲しい。

「何だあ？ 意気込んで出て来りゃ、相手は小学生かよ」

開口一番、相手の言葉はそれだった。僕は若干、眉間に力が入るのを感じる。

「すみませんが、僕はれっきとした高校生です」

「ははっ、マジかよ！ いや、哀れだね。どうやってたらそんな子供の体型が維持出来んだ？」

口が悪い。人の気にしてる部分に、無神経な言葉を投げかけてくる。全く……参ったね、こういうタイプか。

「お、怒っちゃった？ 悪いね、俺は思った事ははっきり言うタイプなんでな」

「挑発のつもりかもしれませんが、生憎、それで冷静さを無くすほど、馬鹿じゃありませんよ」

「何だよ、可愛くねえガキだな」

相手は舌打ちすると、所定位置で巨大な斧槍を構えた。僕も、自分の位置でナツクルをしつかりと固定する。

「お？ まさかお前、格闘技使うのかよ。その体格で？」

「……悪いですか？」

「ははっ、マジうける！ 何それ、ネタかよ？ 可哀想だから、先に殴らせてやるつか？」

面倒だ。よくこんなのに出場許可出したよね。いくら実力があっても、学校の恥だろうに。友達少なそうだ。

『城島選手、口を慎むように』

「ああ、へいへい。とつとと終わらせてやるとすつか」

勝ちを確信したように笑う相手。僕も予選を勝ち抜いたって事を、理解しているのかな。

「……まあいいでしょう。罪悪感を感じる必要が無いのは有り難いですし」

「あ、何だって？ はつきり言えよ、気味わりいな……ま、いいや。降参するなら今だぜ、チビガキ？」

「……審判、早く始めて下さい」

僕は相手を見下したように言った。いい加減、受け答えが面倒だ。相手の見下したようなにやつきが消える。

審判も、僕の言葉を受け入れ、すぐにコールをかけてくれた。

『……ルツカ＝ファルクラム対、城島 真也……試合、開始!』

鳴り響くゴング。それと同時に、相手は一気に飛びかかってきた。

「おおらあつ!」

馬鹿みたいに単純なその一撃を、僕は軽くステップでかわす。さすがに、素手で受ける武器では無い。

地面を蹴り、距離を空ける。気分的には一気にやっちゃっても良いんだけど……それはさすがに哀れだし、多少は盛り上げてあげよう。

「うぜえな!」

相手はそう吠えようと、やたらめったらにハルバードを振り回しつつ、僕に迫る。

身を屈めて横薙ぎの一撃を避ける。まともに付き合ってはられないので、そのまま射程距離を離脱する。

「ちっ、ちょこまか逃げやがって、チビが……!」

すぐに決められると踏んでいたのだろうか、二回も突撃をさばかれた事で、相手は苛立っているようだった。

けど……さすがにこれで、慢心は和らいだらう。彼も一応は予選を勝ち抜いている。油断はしないほうがいいか。

「良いぜ……ちょっとは本気でやってやるよ、ガキ!」

三度目の突進。だけど、今度はさっきまでと気迫が違う。

身体をひねり、鋭い突きを避ける。返す刀での低い薙ぎ払いにはジ

ヤンプで飛び越えておく。右からの振り下ろしは、逆サイドに回り込んで外す。

確かに、動きはなかなか良くなった。けど……

「こ、の……ガキがあ！」

「単調ですね、動きも挑発も」

「……あ？」

僕は、相手の動きに合わせて、自分の脚をさっと動かす。次の瞬間……相手の巨体が、面白いぐらい簡単に、派手に転倒した。

相手は、地面に叩きつけられた痛みよりも、何が起こったかわからない驚愕で、尻餅をついたまま呆然としている。

「あまり人を馬鹿にしていると……『足元をすくわれ』ますよ？」

先程とは逆に見下しながら、僕はそう言い放つ。まあ、足元すくってから言うのも、趣味が悪いとは思っけど。

ちよっとだけ待ってあげると、相手はようやく僕に足払いされた事を理解したらしい。両手をつき、全身をわななかせながら起き上がる。

「……ぶっ殺す」

低い声で、そう宣言したかと思うと……相手は、ハルバードの切っ先を僕に向けた。

「！」

僕は直感で、横に跳ねる。ワントンポ遅れて、僕のいた場所を、青白い電流が走り抜けた。

「電気操作ですか……」

「後悔しやがれ……黒こげにしてやらあ!!」

相手は完全にキレたようだ。立て続けに切っ先を僕に向け、中空で突きを繰り出す。それに合わせて、電流が走る。

成程、当たれば確かに黒こげかな。どうやら加減してないみたいだし……

けど、あくまで当たれば、だ。

見ている限り、放電が出来るのは一瞬だけ。相手の動きを見ていれば、回避は非常に容易だった。

何度となく降り注ぐ電雷の帯は、僕に一度も当たる事は無い。相手の苛立ちも、ピークに達してきたようだ。

「うぜえ、うぜえ、うぜえ！ 避けるだけしか能がねえチビガキのくせしやがって!!」

「回避は戦いの最も重要な要素。それが、兄さんの教えなんですよ」

見苦しいまでに暴れる相手の姿に、だいぶ溜飲が下がってきた。試合もある程度魅せた事だ……そろそろ、時間かな。

僕がそう考えていた時。相手の口から、その言葉は出て来た。

「兄さんの教え？ はっ！ 要するにためえの兄さんってのは、ただ逃げ回るだけの臆病者って事じゃねえか！」

「ひゅう。ルツカの奴、やってくれるじゃんか！」

足払いで相手を転ばせた事に、カイが楽しげに口笛を吹いた。

「相手もバカだな。明らかにルツカのが格上だって、いい加減に気付けっつーの」

「だな。主導権を握られてる。にしても、感じ悪い野郎だな、あの相手」

「本人が言った通り、ルツカはあの程度の挑発に乗るような奴じゃないがな」

そうコメントしたのは、シグルドと言う男だ。俺も、それに同感だった。

「あいつも、全く怒らないって訳じゃないんですけどね。でも、あいつは自分の感情をしっかりとコントロール出来る奴ですから」

あんな安っぽい挑発で、怒りに我を忘れたりする筈がない。あの足払いには、意趣返しの意味合いもあったらろうけど。

「俺に敬語を使う必要は無い、楽に話してくれ。……君は、ルツカの事をよく分かっているようだな」

「……じゃあ、普通に。俺は、あいつとは兄弟のように育ったからな。どういう奴かは、理解しているつもりだ」

「成程な。……君は蓮と言ったか。いつもルツカが、君を信頼していると言っているのにも、納得出来た」

「……あいつ、そんな事を？」

「ああ、いつも楽しそうに話してくる。君達のような友人が出来たのなら、あいつがこの国に来たのも、間違っていないかったのだろう」

その辺りの事情も、全部知っているのか。

無表情で無愛想だけど、こいつがルツカを本当に気にかけているという事は、その言葉でよく分かった。俺の抱いていた警戒心が、一気に和らぐ。

「俺が改めて言う事でもないのだろうが……これからも、あいつと友人でいてやってくれ」

「勿論。俺にとっても、あいつは……」

『兄さんの教え？ はっ！ 要するにためえの兄さんってのは、ただ逃げ回るだけの臆病者って事じゃねえか！』

「……………あ

「……………む

ルツカの対戦相手が口走ったその言葉が聞こえた瞬間、俺とシグルドは、同時にそんな声を出した。俺達は、互いに顔を見合わせる。後ろでは、上村先生と綾瀬先生も、顔をしかめていた。

「どうしたの、蓮、シグルドさん？」

「……………やばいな

「ああ……………まずい

「まずい？ 何がだ

残りのメンバーは、俺達の会話に首を傾げている。一同を代表したガルの質問に、俺はリングに視線を送りながら、答えた。

「……………あの対戦相手……………死ぬぞ

耳に入ってきたその言葉。最初、僕の頭はその言葉を受け入れなかった。

「……今、何と言いました？ よく、聞こえませんでした」

「ああ？ てめえの兄貴は臆病者だったんだよ！ てめえに相應しいチキン兄貴だったな！」

頭に血を上らせた相手は、さらに暴言を吐く。それを僕が聞き取り、脳が処理していく。

「そうですか……」

僕は、絶えず降り注ぐ電撃を避けながら呟く。……相手は、ただキレて暴言を吐いているだけ、その内容を理解してはいないんだろう……それと、僕の変化にも気付いていないんだろう。

「ならば、逃げるのを止めてあげましょうか。この拳で殴りに行けば良いんでしょう？」

「上等だよ。てめえみたいなチビのパンチ、蚊が止まったようなも

「んだらうしなあー!!」

「分かりました。……では、行きますよ……あ、一応言っておきますが」

最後に、『僕』は、奴に笑顔を見せた。そして、訝しがる相手に向かい、はっきりとした声で、宣言する。

「命乞いしてももう遅えぞ、このゴミ虫が」

全力で、奴の懐に踏み込む。次の瞬間には、『俺』の拳が、奴の顎に思い切りめり込んでいた。

「ぐっっ……!?!」

苦鳴を漏らし、奴はあっけなく後ろに倒れ込む。が、俺は奴の首根っこを掴むと、強引に引きずり起こして、腹に拳を突き立てた。

「がああっ……っ、ぐ……」

「ああ？ 何だ情けねえ声出しゃがって。痛くねえんじやねえのか、おい」

「な、てめ、え……ぐっ!」

「うるせえよ、黙れ屑」

うざいので顔面を殴る。奴の顔が、徐々に痛みと恐怖で引きつり始めた。

「チビだの、ガキだの、散々言ってくれやがったな、てめえ……？」

「そ、それは……うぐうっ……！」

「喋るな、つってんだろ。耳が聞こえねえのか？ 黙ってサンドバツグになっとけ、愚図が」

「がっ！ ぐっ！ うあっ……ゲホっ、ゴホっ……う、え……」

何発かボディブローを入れてやると、あっという間に抵抗は弱まっていた。激しく咳き込みながら、腹を押さえて吐き気と呼吸困難に耐える様子は、見ていて滑稽だった。

手を離すと、奴は小さく丸まって、地面を転がる。

「何だよ、図体はでけえくせに、弱っちい野郎だな……まだ俺はちっとも満足してねえぜ？ お楽しみはこれからだ」

俺は言いつつ、奴の尻尾を右手でつまみ上げた。奴は痛みや不快感より、これから何をされるか、その不安でいっぱいになっているようだ。

「く……何を……？」

「まだ俺の力を見せてねえだろ。特別に披露してやるよ…… 反転

」

俺は、怯える相手に向かって笑う。そして……その身体を、片手でいとも簡単に持ち上げてやった。

「う、うわ……あ!?!」

「どうだ? 散々チビと見下してた相手に持ち上げられる気分はなあ?」

相手は手足をばたつかせ、暴れている。鬱陶しい野郎だ。

俺はそのまま、奴を空中に放り投げた。すると、本来ならば地面に叩き付けられる筈の相手は、空中に、ふわふわと浮かんでしまった。

「な、あ!?!」

「いちいちうるせえ野郎だな。その牙全部へし折ってやろうか、おい」

相手は空中でもがく。が、未知の感覚に、思うように動けない様子だ。

俺はその無様な姿を十分に堪能してから、能力を解除する。いきなりリングに落下した相手は、受け身を取れずに悲鳴を上げる。

俺のPSは、グラウイティ balancer 摂理の天秤。その効果は、単純に言えば重力操作。
今みたいに無重力にする事も出来るし、逆に重力を数倍にしてやるのも可能だ。

「この程度で終わりと思うなよ、おい。てめえは、言っちゃならねえ事を言ったんだ」

「う……」

相手はもう、戦意を失っている様子だ。が、俺は許す気にはならなかった。

こいつは……兄さんを、侮辱した。例えそれが、勢い任せの言葉だったとしても。

「そうだな……天井まで浮かせて、一気に落とすってのはどうだ？ さぞや、見事にぶつ潰れた死体が出来んだろうなあ……」

「な……た、頼む、止めてくれ……」

「言葉は間違えるなよ。止めて下さい、だろ？ 地べたに這いつくばって詫びるや、ゴミが」

「ひ……があ!？」

今度は重力を増加させる。二倍の重力……単純計算で、同じ体重の奴がのしかかっているのと同じ状態だ。そこから、さらに力を強くしていく。

「このまま押し潰してやるのも良いな。さて、どこまで耐えるか見ものだな？」

「ぐえ……お、お願い、します……止めて、下さい、許して、下、さい……!」

涙ぐみ、惨めに許しを請う相手。命乞いは聞かねえって言った筈だがな……所詮、粹がっただけの屑か。

俺は、PSを解除する。相手は助かったと思ったのか、安堵に全身を弛緩させている。俺はそんな相手に向かって、出来るだけ優しげに見える笑みを作り……

「死ね、下種が」

今までと違い、加減など何もない拳を、その無防備な顔面にめり込ませる。

そのまま、悲鳴すら上げられない様子の相手をひつつかんで、宙に放り投げる。そして、受け身も取れないゴミ野郎に、渾身の蹴りを叩き込んでやった。

派手に吹き飛ぶ巨体。そのままどさりと倒れた相手は、ピクピクと痙攣を始めた。静まり返る会場。

「……ここが公共の場所な事に、感謝しやがれ」

急所は外した。大事に至りはしないだろう。……もし場所が違ったら、生まれてきた事を後悔させてやったんだがな。

「ふう……さてと」

俺はゆっくりと息を吐く。こいつが、この一件で少しは矯正された事を、せいぜい祈っとくでしょう。むしろトラウマになった可能

性もあるが、自業自得だ。

「審判！ 結果はどうなんですか？」

『あ……し、勝負、あり！』

あまりの事に呆けていた審判も、正気に戻った。僕も頭が冷えてくる。

まずいな、少しやりすぎたかも。この大会って、全国放送だった、よね……はあ。いろいろと後始末が大変そうだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2875u/>

ルナ ~ 銀の孤狼と月の娘 ~

2012年1月14日02時49分発行